



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	特別支援教育と地域支援プログラムの展開 第2報
Author(s)	影山, 竜子; 品川, 裕香; 高山, 恵子 他
Citation	発達・学習支援ネットワーク研究, 5, 1-90
Issue Date	2005-09-01
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/87928
Type	departmental bulletin paper
File Information	vol_5.pdf

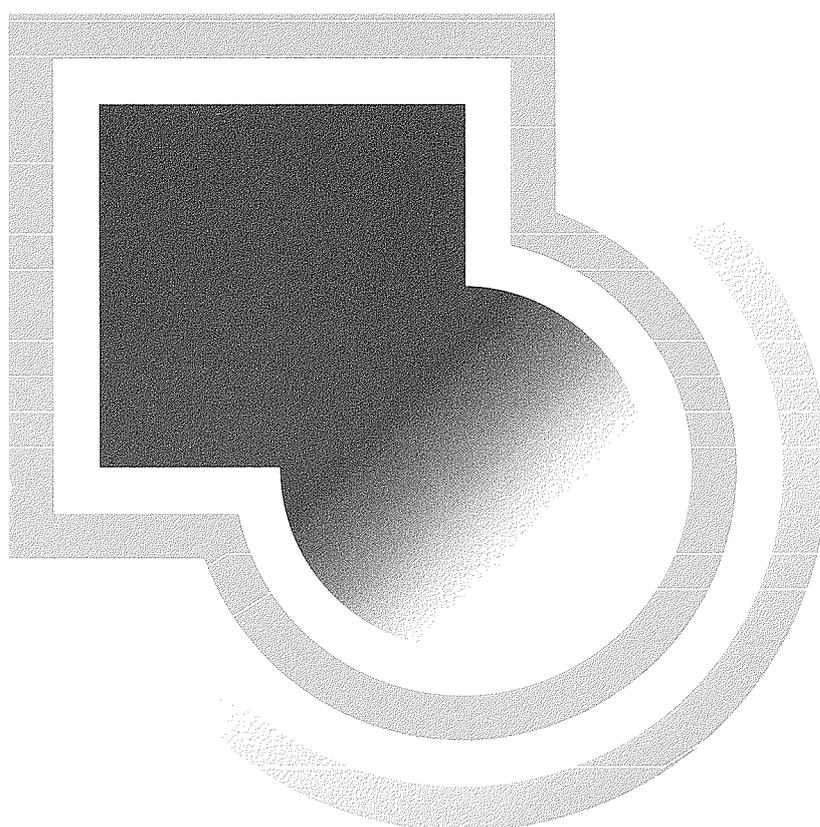


発達・学習支援ネットワーク研究

特別支援教育と地域支援
プログラムの展開

- 第2報 -

第5号
2005年9月



北海道大学大学院教育学研究科

特別支援教育と地域支援プログラムの展開



目 次

1. はじめにー研究プロジェクトの目的	1
2. シンポジウム	6
2. 3. 第3回シンポジウム	
『特別支援教育と地域連携～子どもと親たちの視点から～』2005.3.13	6
シンポジウム1（午前）	7
1. 就学前からの個別対応とは：保育園における取り組み	8
2. 子どもたちの今：ノンフィクションライターの目を通して	33
3. 支援グループの取り組みをとおして	58
シンポジウム2（午後）	73
「特別支援教育を具体化するために」 総合討論	73
2. 1. 1 第3回シンポジウムの解説	86
2. 1. 2 障害のある方々とおつきあい	87
おわりに	90

1. はじめにー研究プロジェクトの目的

たたけよ、されば開かれん

北海道大学大学院教育学研究科 教育臨床講座 田 中 康 雄

北海道大学大学院教育学研究科では、「特別支援教育と地域支援プログラムの展開」というテーマで、2004年度研究プロジェクトを始動させた。

基本的なスタンスは、第1回シンポジウムで、逸見科長（当時）が述べたように、文部科学省による政策的提起である特別支援教育を展開するうえでは、地域・学校・行政の総合的結びつき、つまり連携というテーマを無視することはできない、という点にある。

理念とタイムリミットが先行された政策である特別支援教育をめぐるっては、各市町村、都道府県レベルにおいていまだ試行錯誤の状態というのが実態ではないだろうか。時に先駆的と呼べる活動をしている地域展開も、数年のモデル事業で精鋭部隊により展開したもので、メンバー変更により容易にシステムが変容する危惧を抱かせるものが少なくない。

そこにおいて、われわれのプロジェクトの行き先は、子どもの成長、発達に広く「教育学」がどのような貢献ができるのかという自問自答である。かすかな一条の光は、これまで高等教育のあり方から、障害児教育、発達障害に関する基礎的な研究を長年推し進め、加えて教育臨床学あるいは臨床心理学との融合を推進しようとしている教育学研究科に内在している地力であろう。

その力と特色をどのように生かすべきかが、今回のプロジェクトで少しでも明確になればよいと思い、シンポジウムを組んだ。

主たるシンポジストは、学内だけではなく、学外のお他職種の方々も含め、当然明らかに実践者と呼べる方ばかりを結集させた。

初年度は、まず多くの他職種の方々を招いての現場からの声に耳を傾けようとしたものである。高名な方々ばかりではなく、地域に根ざし、真摯に子どもの未来を担い、己に責任を課している方の実践を聴くことで、間接的に経験したいという願いがある。

将来、北大ネットと呼べるような、開かれた結びつきを拓く一歩になればと、学際的な連携も試みた、教育学研究科の臨床知への冒険と実務化への挑戦でもある。

すこし自画自賛的ではあるが、この企画進行中に、さまざまな邂逅があり、すこしずつではあるが、学部内に地殻変動の予感が起きている。

私たちは、ようやく大きく重い扉に、内外で手は携えながら、触れることができたといえるかもしれないという、ささやかな感触を持つことができた。

第3回

特別支援教育を前にして、ひと、地域、
そしてネットワークを考えるシンポジウム

特別支援教育を前にして、ひと、地域、そしてネットワークを考える
シンポジウム

特別支援教育と地域連携

～子どもと親たちの視点から～

シンポジウム 1

1. 就学前からの個別対応とは：保育園における
取り組み
影山竜子（社会福祉法人みきの家わかくさ保育園
主任保育士）
2. 子どもたちの今：ノンフィクションライター
の目を通して
品川裕香（ノンフィクションライター）
3. 支援グループの取り組みを通して
高山恵子（NPO法人 えじそんくらぶ 代表）

シンポジウム 2

「特別支援教育を具体化するために」 総合討論
影山竜子 品川裕香 高山恵子
宮崎隆志（社会教育学G） 田中康雄（教育臨床心理学G）

3月13日 10時～3時

北海道大学学術交流会館

連絡先 北海道大学教育学研究科教育臨床講座 田中康雄

2.3. 第3回シンポジウム

『特別支援教育と地域連携～子どもと親たちの視点から～』2005. 3.13

特別支援教育を前にして、ひと、地域、そしてネットワークを考えるシンポジウムの最後を迎えた。

第3回シンポジウムは、年度末である2005年3月13日に開催された。今回も企画者である田中の人脈によるが、最後を飾る意味で、すべて道外から来ていただいた。

「特別支援教育と地域連携 ～子どもと親たちの視点から～」というタイトルで、これまで支援する側の視点で思いを語り続けていたが、最後は、親と当事者の代弁を依頼した。

ここでも、若干個人的なことを記しておく。

わかくさ保育園の主任保育士である影山さんとは、田中が千葉の国立精神神経センターに所属していたときの知り合いである。当時別の企画で、軽度発達障害のある子どもたちに、保育園がどのように取り組んでいるかというビデオ企画の一環で出会った。科学的なまなざしと、子どもへの暖かい思いを融合させた、夢のような新築まもない園で出会い、子どもたちの様子を見せて頂き、その後学研企画の書籍でも一緒にさせていただいた。

才覚あるかたで、切れ者という印象である。この方もご多忙にもれず、ハイパーなかたである。

二番手の品川さんとは、まだ某出版社の編集担当をされていたときにであった。このかたもハイパーでかつ切れ者である。しばらくして、社を辞めフリーライターになった。その後は彼女にある問題意識に色濃く支えられた良書を生み出していく。最近の書籍でも、「怠けてなんかない。ディスレキシア」(岩崎書店)や近刊(この報告書は出るところには書店に並んでいると思われるが)「ここからのごめんなさい 一人ひとりの個性に合わせた教育を導入した少年院の挑戦」(中央法規出版)という問題作が待っている。是非ご一読していただきたい。つくづく事実を伝えるドキュメンタリーは、手間暇がかかるものだと思う。貴重な本である。その一部が今回のシンポジウムでも語れている。特に当事者の思いをくみ取ってほしいと思う。

最後は、えじそんくらぶ代表である高山さんである。

話にも出てくるように彼女自身はAD/HDをもっている。そのためか、AD/HDのある人の気持ちや行動が自分のことのようにわかってしまうという。彼女とは、すでに10年以上のつきあいである。奇跡ともよべる持続力でもってえじそんくらぶが継続している。つくづく普段からの支え人の重要性を感じる。

高山さんも超多忙のかたでありながら、快く今回シンポジストとを引き受けて頂いた。本当にありがとうございます。

それにしても、最後を飾った3名は、みなハイパーでパワフルな方であった。いや、3回すべてそのような特性のある方々に支えられて開催可能となったようにも思われる。文字でそうしたエネルギーが伝えられるか、一抹の不安が残った。

やっぱり、これはライブでないと。

田中 康雄

シンポジウム1（午前）

（司会：田中） おはようございます。雪も降り、非常に天候が不順な状況の中、日曜日10時からということで集まっていただきまして、ありがとうございます。北海道大学の教育学研究科のグループでやっています「特別支援教育を前にして、ひと、地域、そしてネットワークを考えるシンポジウム」の第3回目ということで、今回が取りあえず最終回という形になります。

初回は、昨年の11月に帯広、十勝のグループに報告をしていただきまして、そして2月に石狩の教育委員会の方と上富良野のことばの教室の先生と我々で地域連携についてのプレゼンをいたしました。今日は最後の「特別支援教育と地域連携」というタイトルで「子どもと親たちの視点から」ということで、今回3名の方に来ていただきました。すべて本州の方から来ていただいた方ばかりです。

詳しい時間設定、タイムテーブルの方をお手元にお配りできなかったのですが、今日のご予定を簡単にご説明いたします。シンポジウムとして2つ、午前中に行います。まず社会福祉法人のみきの家わかさ保育園主任保育士である影山保育士さんの方から、「就学前からの個別対応」ということでお話を伺うという形になっております。お手元の方にレジユメがいていると思います。これに沿ってお話をさせていただきます。一応10時から11時ということで1時間お話をさせていただきます。

その後1時間、11時から12時までノンフィクションライターの品川裕香さんに、これも資料がいていると思いますが、「子どもたちの心の問題と望まれるサポートと大人にできること」というタイトルでお話をさせていただくという形になっております。それぞれのレジユメのところにはご本人の略歴を簡単に書いておきましたので読んでいただければ、あるいは著書なども載せておきました。

午後1時から、えじそんくらぶの代表である高山恵子さんに1時間お話を伺う予定でいます。その後、若干の休憩を挟んで3時まで我々の学部の方の宮崎先生に指定討論に立っていただきまして、それを踏まえながら皆さんと総合討論をしていきたい。特別支援教育を具体化するためにはどうしたらよいかというようなテーマで総合討論に入ろうと思っております。

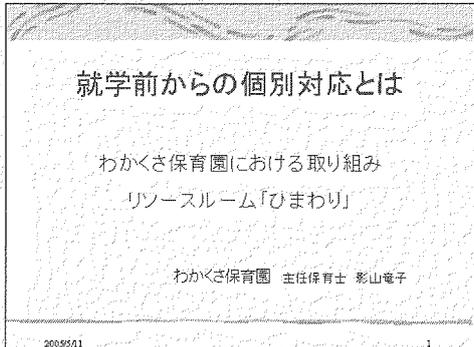
お手元の方にえじそんくらぶから無料で配布されている『実力を出しきれない子どもたち』というものが配られていると思います。これはちょっと手元の数に制限があったのでもしかすると全員に配布できないかもしれませんが、これももしよろしければ読んでみてください。

ほかに高山恵子さんが中心になって、えじそんくらぶが出しているブックレットというのが各種あります。一般書店にはなかなか並ばないものですが非常にコンパクトで、しかも値段が安いという利点がありますので、受付のところのテーブルの上に並べておきますので、お昼にでももしよろしければ眺めてみてください。

ほかにも日本自閉症協会の東京支部が出した『アスペルガー症候群を知っていますか？』という冊子、あるいは十勝やオホーツクのLD、AD／HD懇話会が作成した冊子なども一緒に置いておきます。お時間に余裕がありましたら、どうぞご覧ください。それでは、5分ほど遅れましたけれどもシンポジウムに入りたいと思います。みきの家わかさ保育園主任保育士の影山竜子さんです。よろしくお願いいたします。

1. 就学前からの個別対応とは：保育園における取り組み

影山竜子（社会福祉法人みきの家わかくさ保育園主任保育士）



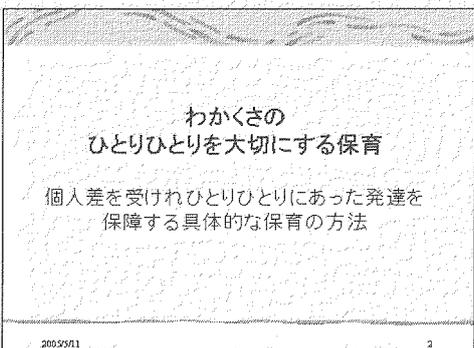
（影山） おはようございます。今ご紹介いただきました、わかくさ保育園の主任保育士の影山竜子と申します。よろしく願いいたします。わかくさ保育園は東京都の昭島市というところにあります。昭島というのは東京都の中でも西の方の多摩地区といわれるところで、だいたい人口が11万人ぐらいの市になっていまして、国営の昭和記念公園ってご存じでしょうか、それがあるところです。

隣接している立川市の西にある市です。結構自然に恵まれていて、東京でいう田舎なんですね。東京の中の田舎で、東京都と言いますが私たちが都内の方に行くときは「東京に行く」という表現を使うぐらいにちょっと田舎の方にあります。昭島市には公私、公立、民間合わせて20園保育園がありまして、ちょうどその20園というのはコミュニケーションを取るのにはすごくいい数だと思うんですけども、そんなところからやってきました。

今日は、田中先生にお声を掛けていただきまして、うちで独自に取り組んでいます就学前の個別支援、1つそれを紹介させていただこうと思います。お手元にレジユメがあると思いますので、そちらを見ながら一緒にスクリーンも見ていただけたらと思います。うちの園には、いわゆるリソースルームという言葉が皆さんご存じでしょうか。リソースルームという支援室を4年前ですかね、丸4年になりますが開設しました。

その事例をちょっとお話したいと思いますが、まず最初にうちの園の理念というところを触れないとそちらのリソースルームについてもお伝えできないので、わかくさの保育についてお話しさせていただきたいと思います。私たちの保育園ではかれこれ二十数年前に保育の大改革を始めまして、やはり乳幼児期の子どもたちというのは本当に一人一人違います。

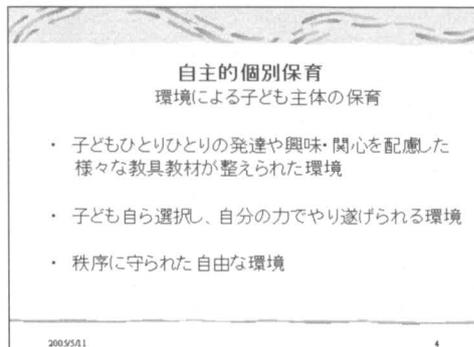
その一人一人の子どもを大切にしたいねということはどういうふうに取り組んだらいいのかということで、園の中で独自に勉強会なり研修なりを重ねてきたわけですが、一人一人を大切にするというのはいったいどういうことかといいますが、今、保育指針でもそこがすごく重要視されていますけれども、おそらく日本全国の保育士さん、また教育関係者の方で子どもに対して一人一人大切にしないでいいなんて思っている人は誰もいないと思うんですね。



でも、私たちがさらにそこを追究しようとしたのは観念的なことではなくて、じゃあ、その思いを具体的にどう実行するかという、実践的に具体的な方法を模索しようということに取り組んでまいりました。ここにも書いてあるように、本当に10人いれば10人違いますから、その個人差を受け入れる、そういった保育の在り方、それ

をこれからちょっと紹介したいと思います。

これはうちの園舎です。園舎の正面、北側から撮ったんですけども、実はこの園舎は平成15年の10月に新築完成しまして、それまではかなり老朽化した園舎で、その中で工夫しながら保育していたんですけど、園は17年度で50周年になる、歴史がある保育園なんですけれども、ぼろい園舎を私たち日々保育しながら、こういう園舎だと子どもたちが生活しやすいんじゃないかということを考えてながら建てた念願の園舎です。



私たちの保育園では独自にちょっとネーミングをしまして、それが「自主的個別保育」という言葉を使っています。あまりネーミングするというのはちょっと言葉が独り歩きして固定概念みたいなものを持たれると本当に嫌だなと思うので、あんまりこれは大きく色々なネーミングを使いたくないんですけども、要はこの言葉から受ける印象は一人一人あまり集団性がなくて勝手にやっているようなイメージがありますけど、そういうことではなくて、本当に一人一人がその子の発達に沿って成長、発達を遂げることができるようなことを願った保育だということなんですね。

そのやり方として私たちは、ここにあるように、環境による子ども主体の保育という方法でやっています。お手元のレジュメにちょっと文章にも書いてあるんですけど、私たちの考え方としては、子どもというのは、本当に基本的に生理的に満たされて精神的に安心できる状態が保障されていれば、彼らの中に秘められている発達のエネルギーというか、欲求に従って周囲の環境に自ら関わりながら、多くのものを吸収して本当に自分で育つというか、そういう存在なんじゃないかということが私たちの保育の原点にあります。

そのために私たちは何をするかというと、彼らの中に秘められているプログラムなり力に合わせて、彼らの力で育っていけるように周りの環境を整えるということと、保育者というのは環境の一部でもありますよね。その環境の一部としての在り方ということを考えていく。そういう保育の考え方を持っています。とにかく周囲の環境が整えられていれば子どもが自らその子に合った成長を遂げていくと。それを助けるのが私たち保育者の務めであるという考えでやっています。

そういった環境は具体的にどんな感じかというのをこの後、写真でもお見せしようと思っているんですけど、ポイントとしていくつかここにありますが、まずその子どもたちの環境には本当に様々なお子さんがいますので、その子の発達に合った興味や関心やそこを援助できるような色々な教具教材を整えています。

そして、それらは大人がやらせるというのではなくて子ども自らの欲求で選択して、そして自分の力で、その子一人一人力が持っている段階というのは技術的には差がありますが、意欲に応じてまだ身に付いていない技術でも、やった、できたと思えるような達成感が得られるような、自分の力でやり遂げられるように工夫して環境を整えてあげることが大事なポイントになってい

ます。

それらは、いわゆるよく自由という言葉が誤解されますけど、好き勝手に、よく放任とかという言葉がありますけど、そういうふうにやるのではなくて、環境の中には当然ルールがあったり、子どもたちの中で積み重ねられた秩序というものがあるって、その中で一人一人が自由を得られると。そういうような環境を構成して保育をしています。じゃあ具体的に映像を見ながらお話ししたいと思います。

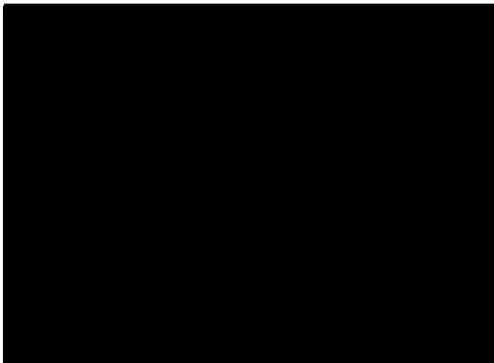
スライド1



(スライド1) これは保育室ですね。これは1～2歳の保育室なんですけど、うちの保育園はクラスが縦割りになっています。この件に関してはまた後ほどお話ししますけれども、こんな感じにコーナーに仕切られていて、関連の例えば指先を使うものはここだよと、そういったものはすごく慎重に集中して取り組むものだから、気が散らないように壁に向かってやれるようにテーブルを設置するよとか、仲間と楽しみながらやるものはまたそう

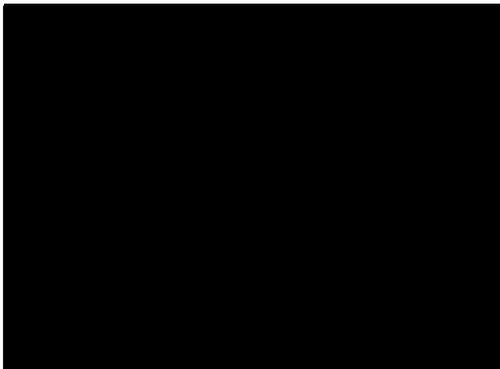
いうエリアをつくるというように、どういう遊びなり教具に意図があるかを考えて部屋の構造をつくっていきます。

スライド2



やはりこれも違う角度から見たお部屋ですね(スライド2)。本当に子どもがその発達段階で見て魅力を感じるようなものを用意し、それで自分で取り出して元に戻すという、自分の力で開始から完了まで遂げられるような工夫をしています。

スライド3



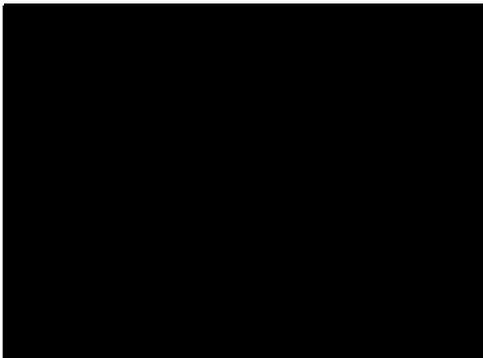
これは幼児のクラスですね(スライド3)。幼児の方は3歳以上の縦割りになっています。見ていただくと分かるように1クラスだいたい30～35名の構成になってまして、保育士が基本的には2人の担任に、そこに加配が1人入って3人の担任で運営しています。本当にさまざまところで子どもたちが自分の好きな活動を選択している様子が分かると思います。

スライド4



これもそうですね。個別といっても別に一人一人がバラバラでやるものばかりではなくて、仲間と関わりながら取り組むものもいろいろあります。

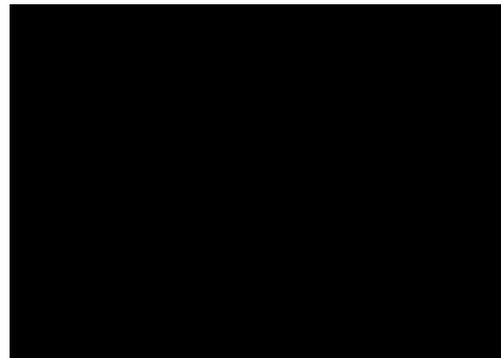
スライド5



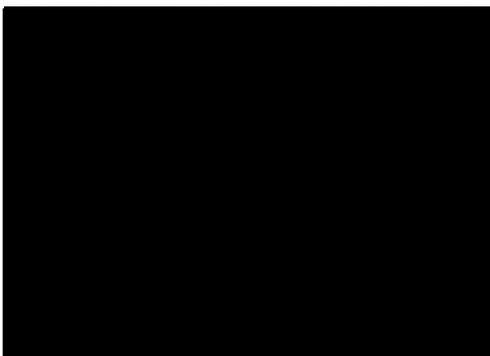
これもそうですね。保育士は、先ほどの映像から分かるように本当に援助が必要なところにさりげなく近づいていって援助するんですね。お手元の資料にもあるように、いわゆる一般的に行われている昔からの保育のやり方と大きく違うのは、まず保育者が主導で前に立って、「はい、さあ、皆さん」という感じで指導するのではなくて、本当にこれを見ていて分かるように、必要なところに保育士が近づいていって、あくまでも選択は子どもが行っていくという、マスワークではなくてケースワークといったスタイルで保育をしています。そしていろいろな子どもたちの発達、興味に応じたものを子どもが選択するわけですね。

スライド6

このように必要な場合は本当にじっくりと子どもさんに保育士が関わりながら教材に取り組めるように援助していきます。



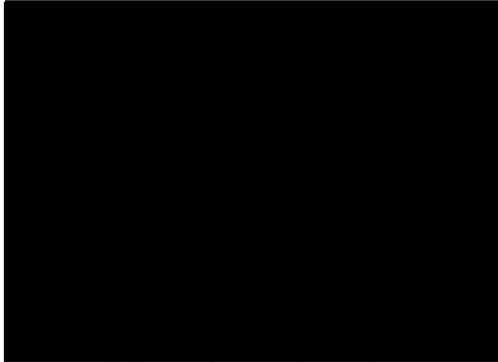
スライド7



この子は今ちょうど季節で毛糸を使った作業でボンボンを作る作業を熱心に行っていますね。こういったはさみであるとか、ああいって道具も自分で使いたいときに作業に必要なものを自分であそこから取り出して、終わったらまた元に戻す。こういった道具の使い方というのは本当に1～2歳のときから同じ園の中で一貫したルールの下で積み重ねられていて、担任が変わるとそのクラスのやり方とかルールが変わるといったことは一切ありません。

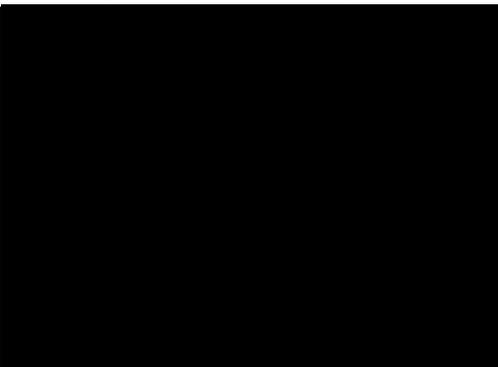
園の中で生活の仕方、道具の使い方、ルールというのがすべて統一されていて、子どもたちはそれを積み重ねていけるようになっていきます。

スライド8



ここではラキュー（LaQ）という、かなり指先の巧緻性を必要として、あと企画能力の必要ないわゆる構成遊びですけれども、今これがすごく、もう何年もですけどブレイクしていて、かなり大きなものを作っています。

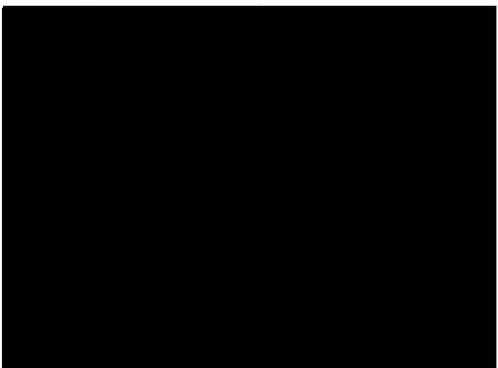
スライド9



このお子さんは2歳児ですね。この1月に進級してきて、実は進級もうちの園では4月というものを境にしていなくて、あくまでもその子の発達に応じた時期に進級していくというスタイルを取っています。今の時期ちょうど新年度を迎えますけれども、もちろん4月になってもし上の段階にまだ上がるのは非常に負担があるという場合はとどまったりします。

6年間保育園生活がありますけど、クラスが0～1歳のクラスと1～2歳のクラス、そして3以上のクラスの3つのブロックに分かれているので、6年間の園生活でクラス替えはその子にとって2回だけあるという感じですね。縦に入ったときはずっと持ち上がりになっていくんですね。この人は進級したばかりで、保育士が丁寧に色々な活動を紹介しているような様子ですね。

スライド10



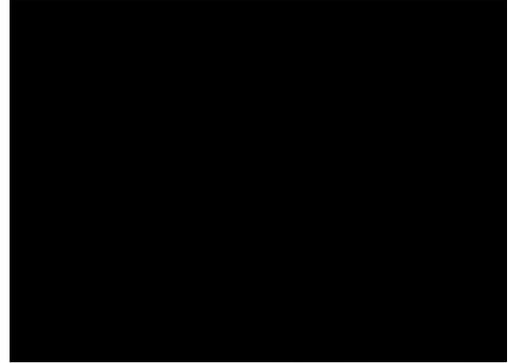
これは子どもたちにとっても人気のコーナーなんですけど、園生活の中で日常の生活の自立というか、日常生活に積極的に自分から取り組むということ、すごく大事にしていまして、毎日こういった季節に応じた調理とかのコーナーがあって、これは朝、登園してくると自分でやりたければそこに行ってお茶をいただいたり、あちらは今はギョーザピザを作っているんですけど、それを焼いていただいて、また食べ終わると片付けるみたいな感じでやっています。

スライド11



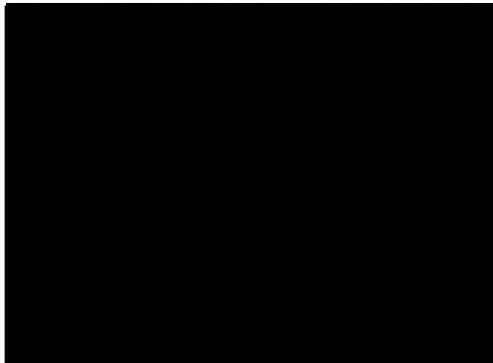
ここでは保育士と一緒にカードゲームをしていまして、ここでも年少児と年中児と交ざって一緒に活動している様子が分かると思います。

スライド12



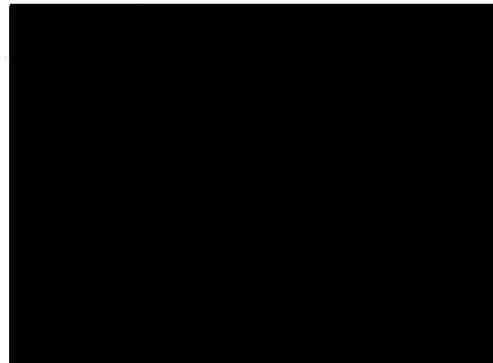
これもラキューのコーナーですかね。

スライド13



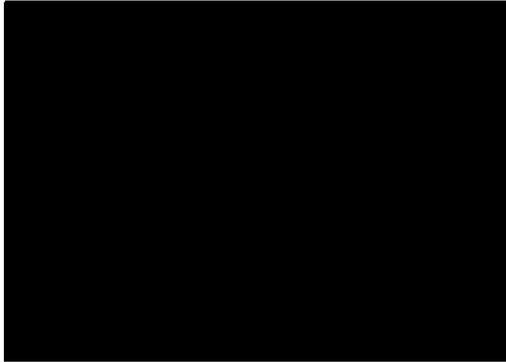
この人はまだ2歳児ですけれども、今一生懸命はさみで切る作業をしています。とにかく本当に一人一人の意欲と能力に合わせて、やりたいと思ったときに取り組めるような環境にしているんですけど、1～2歳のクラスからはさみであるとか針であるとかそういったものを使う環境が保障されていて、私たちの中では危険なものは何で危険なのか、危険でないように扱うことを幼いときから子どもたちに伝えて、危ないからやらせないではなくて、危ないものの扱い方を日々の生活の中で体験できる準備をしています。

スライド14



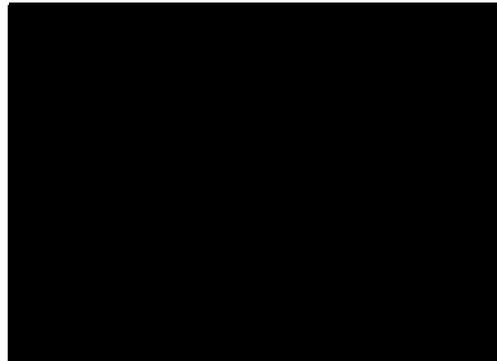
これはクッキーのコーナーですね。先ほどはピザのコーナーになっていましたけど、クッキーのシーズンもあって、レシピがあってそれを見ながら自分で自分の分のクッキーをこねてオーブンで焼いていただくコーナーです。

スライド15



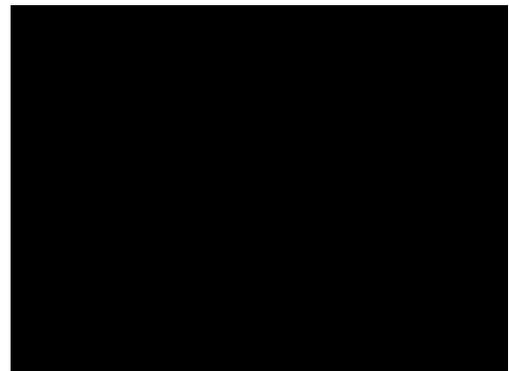
これは2歳児さんで、バナナを切るというコーナーがあつて、刃物を扱うことも早めに教えます。この2歳児の時期は木製のバターナイフですね。そういったものでまずは導入してバナナとか熟れたキウイとかを用意してやって、さっきの幼児のクラスになると本物の包丁で野菜を切ったりということを毎日の活動でやっています。

スライド16



これもラキューです。

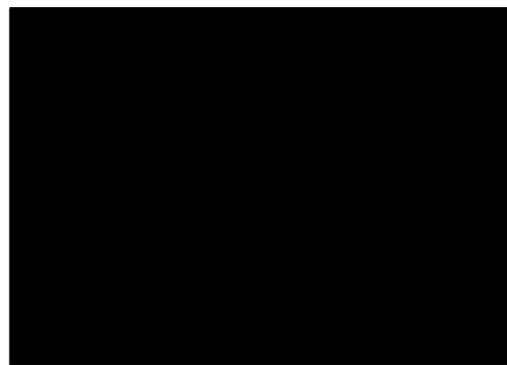
スライド17



その野菜を切るコーナーですね。こんな感じで、こうやって切ったものはお友達にサービスをしたりして、いただいたりしています。

これは構成遊びの積み木のコーナーです。これもうちの積み木の場合は「はい、今日はおしまいです」というのではなくて、子どもたちのクリエイティブな思いが続けば延々とそれを続けていっていい環境になっていまして、1カ月でも2カ月でも意欲が出れば、このように脚立に乗ってでも高く積んで自分のイメージを表現するようなコーナーもあります。

スライド18



スライド19

たてわり混合保育
発達の異なる子ども同士による育ちあいの環境
(0～1才児クラス・1～2才児クラス・幼児クラス)

- ・ 少し年上の子どもの姿から学習できる環境
- ・ 社会性を獲得する環境
- ・ 発達の個人差を受け入れられる環境

2005/5/1 23

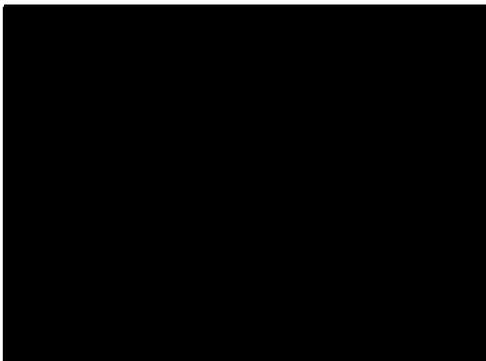
こんな感じで一般の保育園とはちょっと違う環境をつくって保育をしている保育園です。そしてうちの保育園の特徴のもう1つはここに書いてあるように、先ほどのお話のように縦割りであるということですね。縦割りであるということは、おのずと発達段階が違う人が日常的に交わっているわけですね。

私たちの考えとしては、やはり人が育つ過程で子ども

の育ちというのは少し年上のモデルというものの存在は大きく、少し年上の人の存在から多くのものを吸収する性質が子どもたちの中にあると思っています。普通の家庭でもそうだと思うんですけど、このレジュメにも書いたように第一子のお子さんよりも第二子、第三子のお子さんというのはたいがい要領よく色々なことを学習しますよね。

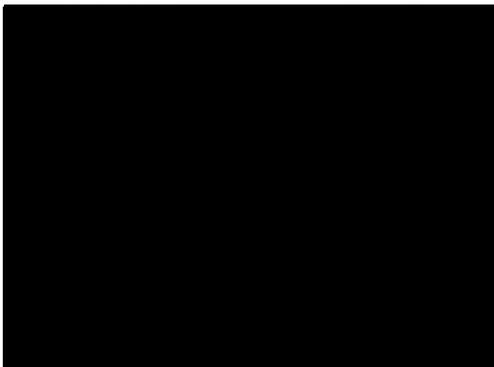
やっぱりそういう子どもの中にある性質は大いに大事にして、大人が何でも指導するとか教えるではなくて、子ども同士の中での学習効果というものを大事にしたいと思って、それが今いろいろ問題とされている社会性というものの育ちにも必要不可欠であると考えています。先ほどお話ししたように0～1歳のクラス、1～2歳のクラス、幼児のクラスという3つのブロックで保育を運営しています。

スライド20



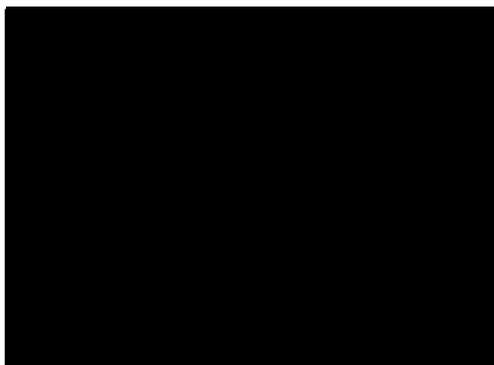
じゃあ、ちょっと写真を見ながら。これは小さな子どもさんが靴を履くのを年上の子どもさんが手伝っていますが、こういった姿が自然に見られます。

スライド21



これは幼児のクラスですけど、年長児と年少児ですね。ちょっと年少さんには難しい活動を一緒に年長さんがやっている姿です。こんなふうに小さな人もまだ自分には難しいんだけど大きい人がやっているのを見ながら興味を示したり、やってみようという意欲につながっていくということですね。

スライド22

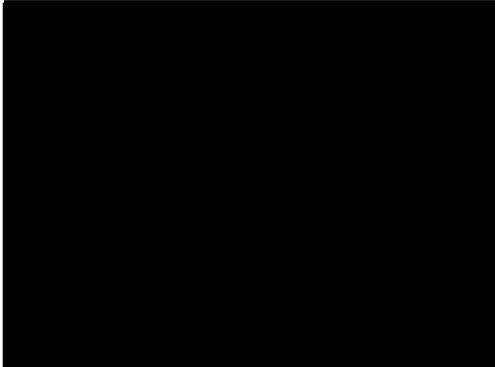


ここのコーナーも年中さんと年少さんが交じっています。こんなふうに色々な遊びであるとか知的な探求心も上のお子さんの刺激を得て、かなり早くスムーズに学習していく姿が見られます。例えば、いわゆる文字なんかもたいがい一斉保育であると年長さんの空き口とかというふうにして教えると思うんですけど、うちの場合は文字の環境が自然に保育室にあって、やりたい子どもがそこで取り組んでいる。そうするとそばで小さな子どもたちが寄って行って興味を示す。

たいがい年少の子どもぐらいは、50音は自然に読めていますね。書くということに関しては、書

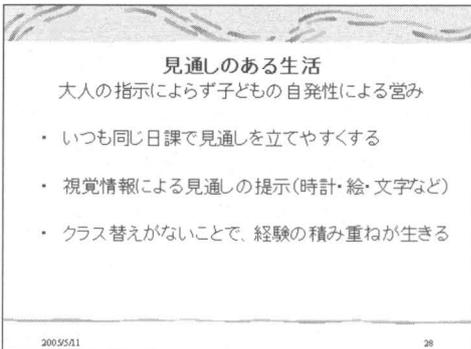
く欲求は結構早くからあるんですね。まだ文字にはならない文字もどきを書いたりして書く欲求はあるんですけど、ちゃんとした文字として書けるようになるのは個人差がありますが、それを大人が教え込むのではなくて、子どもたちの環境の中で吸収しています。

スライド23



これもこんなふうに大きな人と小さな。これは実は乳児のクラスに、幼児のクラスの人が遊びにいつているんですけど、こういう乳児のセクションにも幼児の子どもたちが日ごろから交流があって、大きい人のイメージモデルによる刺激というのを日常的に大事にしています。

スライド24



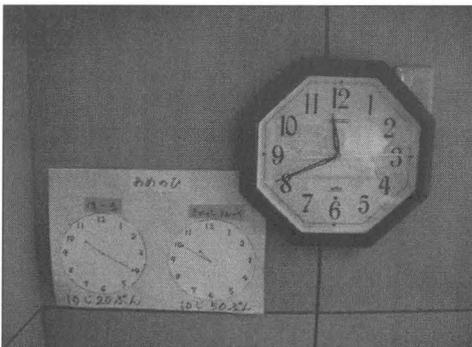
それと、うちの園のもう1つの特徴は、見通しのある生活ということをお大事にしています。これは主体的に子どもが生活していく上ですごく大事なポイントだと思うんですね。とにかく大人がいちいち指示、命令、禁止をするのではなくて、子どもが自分で考えて行動するという、そういうことができる環境をつくと。

その中で大事な要素が、いつも同じ日課で生活が営まれている。これは本当に園の中の一貫したもので、朝、登園して先ほどご覧になった環境の中で選択活動をして、それからお外に出ていく時間、そして給食があってというふうに日々の流れる日課というのがいつも同じなんです。

ですから、大人がいちいち声を掛けなくても、だいたいそれぐらいになると自分たちで片付けて、外に行く準備をし始めたりということが、子どもの中で出てきます。色々なことでその日課が変更になるときは、前の日であるとか朝であるとかに、みんなに提示できるようなことになっています。

それから視覚的な情報によってそれを伝えるということで、先ほどの写真でもあったと思うんですけど、うちの園では時計をすごく大事に使っています。子どもの目線に時計を常に置いて、時計の針を子どもたちが意識して、まだ何時何分と読めなくても、長い針がここになると何が起きるみたいなことを子どもが日々の生活の中で理解できるように工夫しています。

スライド25



それから絵であるとか文字であるとかを用いて、大人にいちいち言われなくても、それが理解できるような工夫をしています。それから先ほどのお話のようにクラス替えがないということで、子どもたちは1つのクラスを1～2歳でしたら2年、3歳以上のクラスですと3年もしくは3年半ぐらいそのクラスの中で生活しますので、積み重ねが生きていくという利点があるかと思います。

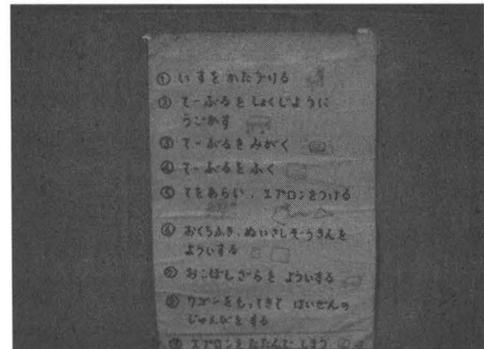
具体的にはこんなふうに（スライド 25）時計の横に、これは雨の日の活動のパターンが書いてあるんですけど、雨の日は外に遊びにいけない代わりに、この針の形になるとホールで遊べるよ。あと、そのホールの吹き抜けのところにキャットウォークという通路があるんですけど、そこに上がって遊べるのはこの時間だよ、というふうに提示されています。これを見て子どもたちは分かるようになっていきます、これは、いつもルールは一緒です。

スライド26



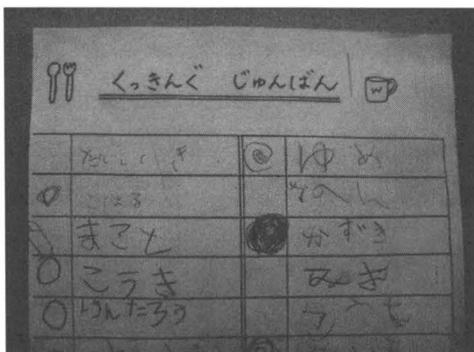
その高さというのはこんな感じで、本当に子どもの視線にある。これは1～2歳のクラスでも0歳のクラスでもそうなんです。分からないと思わないで、そこに置くようにしています。

スライド27



またその文字による案内は、これは例えばお当番活動なんですけど、お当番の活動はこんなふうにするよということで、お当番の活動もだいたい何時ぐらいから始まるというのがあって、大人が声を掛けなくてもぼちぼち子どもたちはいすを片付けだして、そしてごみを拾ったりしながら、何となくぼちらぼちら1時間ぐらいかけて、子どもたちだけでこういった活動を展開していきます。

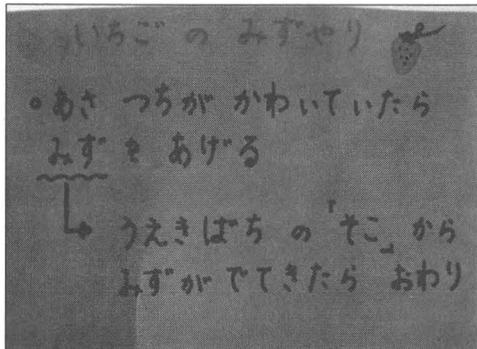
スライド28



これは例えば先ほどあったクッキングコーナーというのはやはり人気のコーナーなんです。でも、いつも、もめ事にならずに整然と事が進む1つの理由は、人気の活動のところは順番表というのがあるんです。そこにやりたい人が順番に名前を書いていくんですね。それで終わると次の人を呼びにいくと。その間はほかのことをしていていいわけです。ですから、自分がいつできるんだろうという不安にさらされないで済むというか。

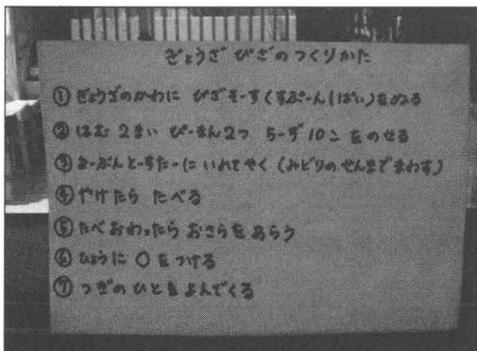
これは、その日に終わらなかつたら、また翌日に持ち越されていくというようなルールになっていまして、小さな子どもはここに名前を書きたいがために文字を覚えるという、やっぱり生活の必要を迫られて、文字に関心を示すという子どもさんもいます。

スライド29



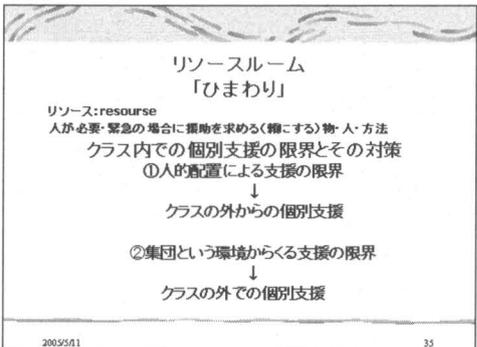
これは、今お部屋の中でプランターでイチゴを栽培しているんですけど、イチゴにみんな水をあげたがるんですね。それで、毎日毎日みんなが水をあげてしまうと根腐れしてしまうので、水をあげる目安みたいなことが書いてあって、イチゴが腐らないように育てる、1つヒントを書いてあります。

スライド30



これはギョーザのピザのコーナーのレシピですね。これを見ながら、自分が手順に沿って作るような表になっています。

スライド31



こんなふうに大人がいちいち関わって大人に依存しなくてもできる環境ということが1つ大切なポイントとして保育しています。それでは、そんな保育園の中での個別支援についてちょっと具体的にお話したいと思います。今のうちの園の様子をご覧になっていただいて、だいたい何となくイメージを持っていただけたかどうかあれなんですけれども、縦割りであると。

そしてまた、ああいった個別活動が中心であるという、本当に一人一人の違いということが全然オーライなんです。それで必ず居場所が得られると、そういう利点のある環境になるんですけれども、そんなんでうちの園はかなり昔から色々なお子さんがうちの園で生活するという、お受けするという経験をしてきたんですけど、あるお子さんとの出会いをきっかけに私は本当の一人一人を大切にというのは、どういうことなのかということをもっと追究したくなってしまったんですね。

特に自閉傾向のあるお子さんとか、また肢体の不自由なお子さんとか、色々なお子さんも一緒に生活していらっしやっただんですけど、その子にとってその子が発達を遂げるために必要な支援というようなことが、本当に保障されているかどうかという。居場所はあるように見えるけれども、子どもの方から見たときに本当に30人いれば30人が自分は大切にされていると、自分は本当に幸せだと思ってもらえているかどうか。

あと、そういう思いがなくても潜在的にとか、あと精神的に、身体的に発達に望ましい環境をちゃ

んと保障できているかということ、さらに追究したくなってしまうんですね。そう考えるとやはり待てよ、集団であるが故に苦痛を感じているお子さんもいるのではないかと、もっと日々その子にとって積み重ねていかなきゃならないことがほかにあるのではないかとというようなことで、いろいろ模索して考え付いたのが、このリソースルームです。

私たちのリソースルームは、きっかけはやはり軽度発達障害のお子さんたちと、あと、それに似た症状を持つ、なかなかコミュニケーションであるとか集団適応に困難を感じているお子さんたちが、保育の現場で少し増えてきているかな、というようなことを考えたときに、もうちょっとその子にとっていいケアはないかと考えたときに、アメリカの方でのLDの支援で、リソースルームというのを、テレビのドキュメントかなんかで見たことを思い出したんですね。

ああ、なんかちょっとそういう、いわゆる彼らが苦痛を感じているのであれば、場合によっては、違う空間で支援するのもありなのかな、ということで、いろいろ考えて4年ぐらい前にチャレンジし始めたんですね。私たちはリソースルームというのは本当に耳慣れない言葉で、私が現場にこの言葉を出したときもみんなが「はあ？」みたいな感じで、ちょっとそれを私もよく知っていたわけじゃなかったの、別にアメリカへ行って見たわけでもないし、アメリカのやり方をそのままやろうという発想ではなかったんですね。

要は子どもさん一人一人が本当に精神的にも生理的にも、身体的にも、満足してもらえる環境に、もしかして、保育室ばかりではない空間が必要なんじゃないか、ということからやってみようと思ったわけで、リソースという言葉の意味自体が私もよく分かっていなかったんですね。

それでこれは英和辞典かなんかで調べたら、レジメに書いてあるような「人が必要緊急な場合に援助を求める、頼りにする物、人、方法」と書いてあって、あ、なんかそのフィーリング、すごくいいかもしれない、ということでリソースルームということにチャレンジしようと思ったんですね。

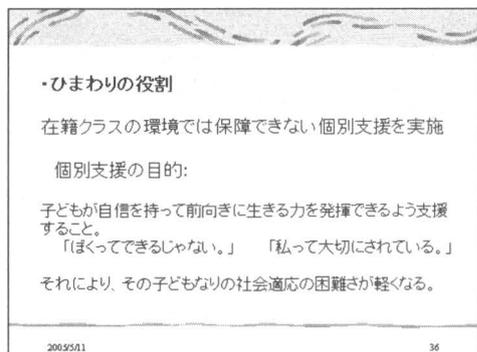
具体的にはここで書いてあるんですけど、クラス内での個別支援の限界ということを実感したというのは、まず1つは、人的配置による支援の限界ということで、加配という制度が自治体によっていろいろ違うと思うんですけど、やはり1対1というふうには付けられない現実があったりとか、反対に、そんなべったりその子に大人がまわりつくほどのいる必要もないということもありますよね。

昔は、各クラスに配慮が必要かなというお子さんがいる場合はプラス1とか担任に人手を加えていたんですけど、必ずしも、合理的に人的配置が機能していない実態がありました。それでクラスの中ではやっぱりやり繰りできない。ある一部だけちょっと外から応援してもらいたいとか、そういうようなこともあったりして、1つそういう人を、もうちょっとすべての子どもさんに、非常に有効にその存在を機能させる方法はないだろうかということですね。

あともう1つは、集団という環境からくる支援の限界ということで、先ほどもちょっとお話ししたように集団が苦痛、集団であるが故に、その子が満足をできる経験ができないというケースもあるんだなということから、何が何でもクラスというコミュニティで年がら年中やるのではなくて、その子に合った空間であるとか、集団の規模とか、そういうことも保障してあげる必要があるんじゃないかということで、クラスというコミュニティですべて支援するのではなくて、クラスの外で支援する方法もありかな、というふうに考えました。

基本的に私はあんまり保守的に考えないようにするんですね。あ、これはいいんじゃないかなと思ったらとにかく試してみるという傾向がある人間なので、そんなことからスタッフに、こんな感じで支援すると子どもたちにまた違うんじゃないかということで、このリソースルームがスタートしたわけです。

スライド32



「ひまわり」というのは実はリソースルームのニックネームなんですね。通称で、それは16年度にその名前を用いたんですけど、それまでは、リソースルームという名称を使っていたんですけど、これがまたなんか偏見のもとになっちゃったんですね。小難しい名前で、特別な部屋みたいな。

私たちのメッセージ的には、特別な部屋ではなくて、誰にでも開かれたくつろぎの世界だよみたいな、そういう

身近な空間というイメージで運営したかったのが、ちょっと保護者なんかにも分かりにくい名前とかじゃなくて、もっと身近な存在ということを感じてもらえるように、クラスの名前もいろいろ花とか木の名前なんですけど、明るく本当に凛としたひまわりというイメージで、ひまわりという名前を付けようかと。

ちょっとしたことなんですけど、そういったことでもっと皆さんに知ってもらうためにもイメージを変えていこうということでひまわりという名称が付いています。そこで行われる個別支援の目的というのは、ここに書いてあるように本当に一人一人のお子さんが自信を持って、乳幼児期の子どもたちの精神的な情緒的な安定ってすごく大事だと思うんですね。

やっぱり自尊心をしっかりとその子なりに持って、自分ってすごいな、とすごく存在価値なり、あと周囲の人に愛されている、大切にされているという実感を、一人一人が持ってもらいたいと思っています。それをクラスではケアしきれない部分を補完しながら、集団への適応とか自己達成みたいなことを援助する、そういうことを目的にしています。

スライド33



スライド34



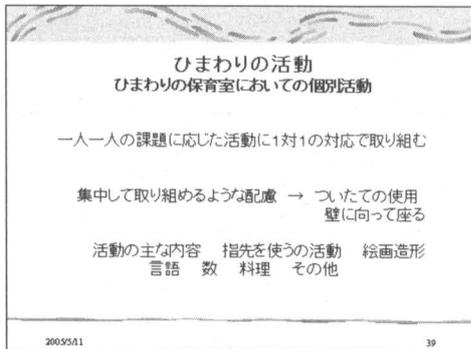
これはリソースルームのひまわりの入り口ですね。

こんなふうに保育室、各幼児の保育室と面しているんですね。ひまわりは幼児のクラスの支援ルームということで、乳児の方は1～2歳のクラスは各クラス15名ぐらいなんですね。ですからそこで、集団自体が小さいですし、乳児期の1～2歳のクラスで支援が必要なケースの場合はそこに加配の

保育士が入って、その空間の中でケアするんですけど、幼児になると結構オープンな感じの保育室で、何といても1クラス35名ぐらいで、このフロアにも100名以上の子どもが右往左往しているわけですね。

だからそれだけで何となく気持ちがいら立ってしまうとか、そういうお子さんっていらっしゃるんですね。ですから、幼児のクラスからのケアに非常に限界があるので、このフロアの中にリソースルームのひまわりがあります。

スライド35



具体的にひまわりでどんな活動をしているかということをご紹介します。まず一人一人の課題に応じた1対1の対応ということで、先ほど写真でもご紹介したように各部屋でああいうふうに自分に合った課題を見つけられる人はいいんですけど、やはり見つけられない。見つけたとしてもなかなか集中してそこに取り組めない、いつもうまくいかない。そういうようなお子さんは、ちょっと落ち着いた小さな空間で保育士がじっくり対応して

「できたじゃん」という、そういう体験を重ねていくんですね。

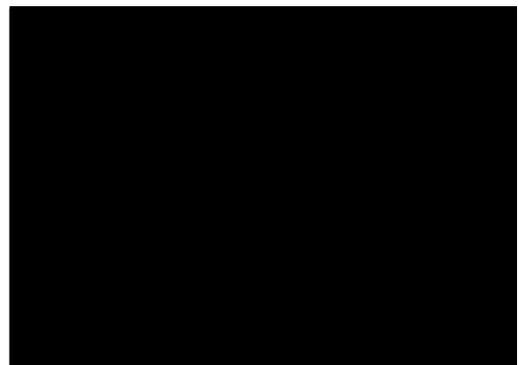
それはだいたい朝の時間帯、登園して10時半ぐらいまでに、集中時間が短いですから、だいたい1人15分から20分ぐらいのサイクルでローテーションして、子どもさんのケアをしていきます。このひまわりには3人の保育士が加配の中でそれを組んでいくんですけど、各クラスに1人ずつ担任として加配のスタッフが配置され、さらにひまわりにいわゆるクラスの外の援助ということで、そこに3人の保育士が、その担当のスタッフとして常駐しています。その3人の保育士がこのように朝登園してきた子どもに対応します。

それから集中して取り組めるような配慮ということで、これはこの後写真で見させていただきます。保育室でもそういう環境をつくっているんですけど、自分のスペースとか自分のテリトリーを侵害されないで、落ち着いて活動に向かえるようについたてを利用したり、壁に向かって座って活動の保障をしています。

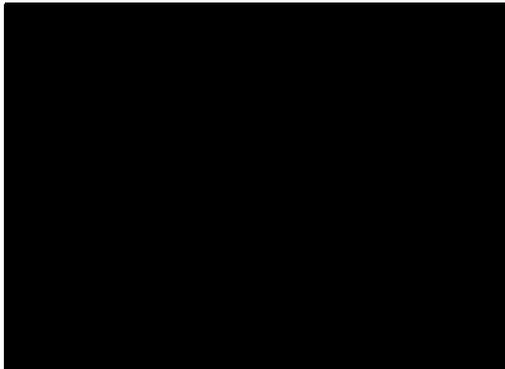
特にどんなことをやるかということ、先ほど映像で見させていただいたように、指先を使うものとか、絵画造形的な活動、言語数、料理とか、要は保育士がいつもやっていることですよね。ですから、何か特別な専門家がやっているわけではなくて、私たち保育士の持つ専門性の中でのケアをしていると。それが大事というふうに考えています。

スライド36

これがその個別活動の様子ですね。こんな感じでその日の課題を保育士が援助しながらやっています。



スライド37



結構苦手意識を持っている子が多くて、何かチャレンジしてみようなんて言うとそこで怒り爆発してしまったり、「お前なんか嫌いだ、死ね」みたいなことを言われたりしながらも、ちょっと自信を持ってやれるものから徐々に徐々に色々なことに挑戦していってもらって、「何だ、できるじゃない」。

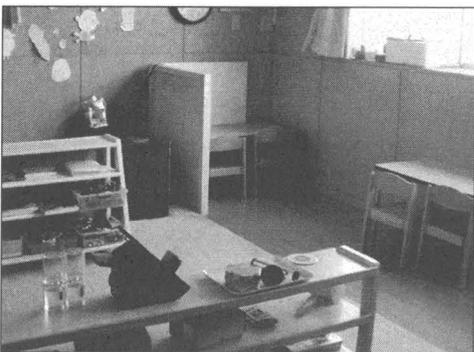
たいがい能力がないわけではないのに、そういう自分に対しての評価の低い子が多いが故に、なかなか積極的に色々な活動に取り組めないお子さんもいますけど、こういった感じで寄り添って提示してあげると比較的チャレンジできるようです。

スライド38



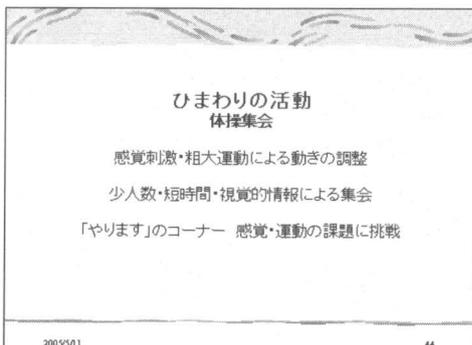
これは朝入ってきて、お部屋の中でこういうコーナーもあって、朝登園するとシール帳にシールを張ったりするんですけど、そこでなかなか滞ってしまうようなお子さんも中にはいらっしゃる。そういうお子さんの中には、朝の支度もここでクリアしていくように配慮しているお子さんもいます。ここでシールを張ると隣にある見通しカードを見て、今日はこんなふうに1日が流れていくよ、ということを案内してあげて1日が始まるという感じですね。

スライド39



これもリソースルームのひまわりの中の環境です。保育室にあるような雰囲気ですけど、実は保育室にはない魅力的なものをそろえていたりして、とても子どもたちはここで遊ぶのが大好きです。

スライド40

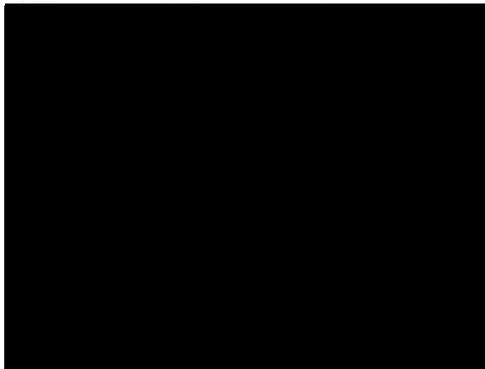


ひまわりの活動をご紹介します。ひまわりの活動の体操集会というのがもう1つあります。先ほどは個別の対応ですけど、これはお子さんによっては運動ですね、全身の運動が日々必要な、粗大な刺激が必要なお子さんがいらっしゃいます。やっぱり何とか運動が不器用とか、脳みその中で自分の動きをコントロールするところがとてもうまくいかない、バランスが悪い。

感覚的な刺激に対しての受けとめ方がすごく偏っているとか、そういったお子さんに毎日、金曜日はちょっと乳児のお子さんの方のプログラムにしているので、月曜日から金曜日欠かさずこういった粗大運動、そしてあと集団で集会に参加するということがとても苦手なので、苦手なお子さんを小グループで短時間の参加しやすい集会を積み重ねて、集会って楽しい、着席できた、素晴らしい、ということを毎日積み重ねています。

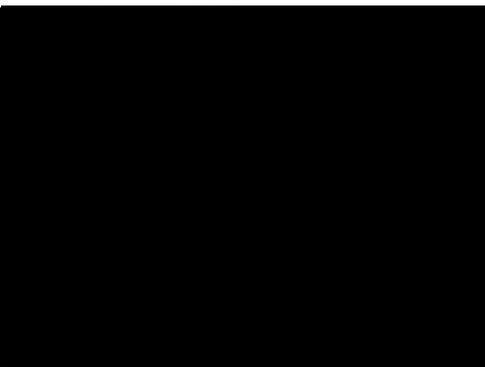
やりますのコーナーというのは、そういった集会の最後の締めとその日のテーマである、だいたい感覚とか運動とか、そういったものがテーマになっているんですけど、チャレンジするコーナーがあって、みんなのしている前でそれに挑戦して、拍手喝采を浴びるといような、そういうプログラムになっています。

スライド41



これは、最初の粗大の動きの中にもこういう伝承的な遊びとかやりとり遊びとか、そういうことも含みながらやっています。かごめをしていますね。これがなかなか手がつなげないとか、それがだんだんと毎日やっていくうちに手をつないで遊びに入ってきたり、ルールを守ったり、ということができてきます。

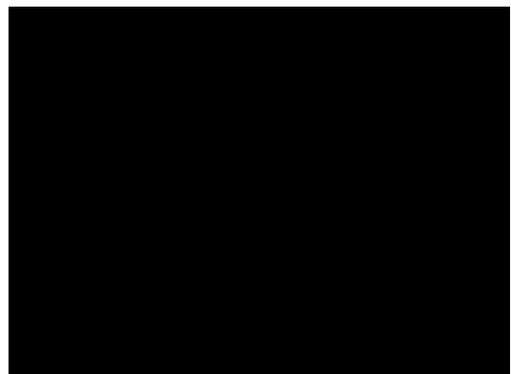
スライド42



これはバランスボードといって、あの上に姿勢を崩さないように立つ、なんていう、こういったものです。こればかりじゃなくて平均台であるとか縄跳びであるとかセラピーボールであるとか、色々な道具を使って、その日のプログラムを企画しています。

スライド43

これが集会ですね。こんな感じで集会をしていて、ここに参加している保育士というのはリソースルームの3人の保育士と、あと各クラスの担任がローテーションで参加して、自分のクラスの子どもたちがここでどういふふうな姿で参加しているか、ということをクラスの担任も把握できるようになっています。この集会の進め方もいつも同じで、子どもたちにとっては次に何があるのかが分かるということで非常にマナーよく参加できるようになってきます。



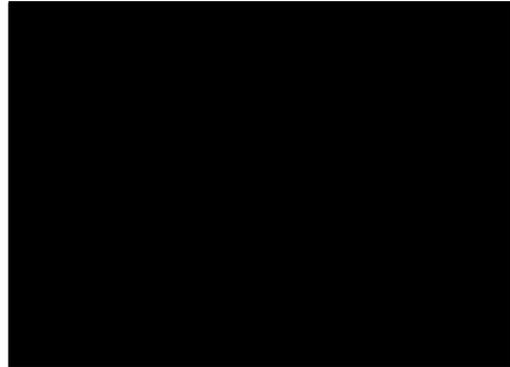
あそこの向かいにある絵とかなので、あそこはルールが書いてあって、静かに聞きましょうといふようなことを絵で示して提示しています。

スライド44



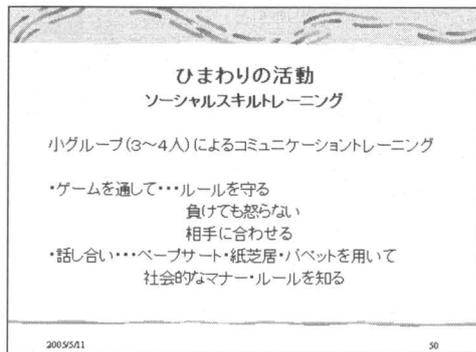
これはその日の出席を取っているんですね。

スライド45



これは、やりますね。これはギロに挑戦とかといって音の体験をしています。

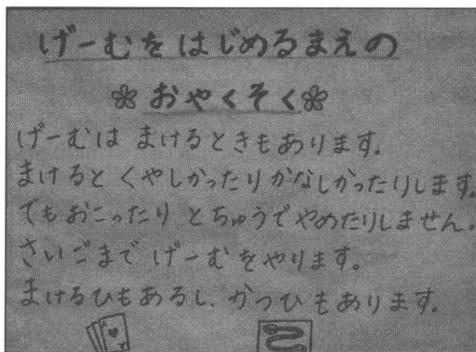
スライド46



それからソーシャルスキルトレーニングもやっています。だいたい3~4人ぐらいのグループをつくって、そのグループで色々なゲームを通したり、話し合いをしながら、色々なルールとかマナーを学びながら、ここで書いてあるようにゲームであれば負けても怒らないよ、負ける人は必ずいるんだよ、みたいなことを子どもたちと確認しながら、マナーよくルールを守ってゲームが楽しめたときに評価する、というようなことを重ねて、少し

ずつそういったことを子どもの中でコントロールできるようなきっかけづくりをしています。

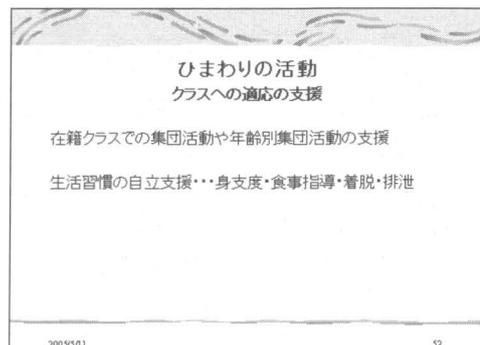
スライド47



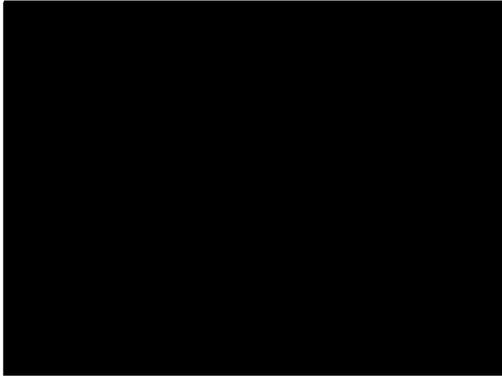
これはゲームを始める前にお約束カードというのがあって、これがゲームをやるコーナーに張ってあるんですね。これを見ながら始める前にこれをみんなで読んだりしてゲームを始めると。最初のうちは負けそうな雰囲気になると、もうそこで投げちゃったり、「俺は死んだ方がましだ」と言って泣きだすような人も、少しずつコントロールしてゲームが楽しめるように変化していきます。

スライド48

それから、ひまわりの活動の1つとして、クラスへの適応の支援ということで、ひまわりの方に来てもらってケアする内容を今ご紹介しましたが、それだけではなくて在席のクラスに出張して行って、必要な場面が必要な支援をするということもやっています。

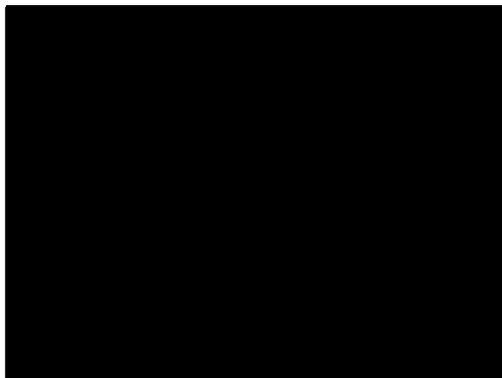


スライド49



例えば非常に食事の偏食の多いお子さんがいますけれども、かたくなな偏食に対して食事指導をするということもしています。このお子さんの場合もなかなか色々なものが食べられないので、これはカレーライスですけれども、子どもさんが好きそうなメニューですが、この子の場合にごっちゃとものが入っているとどうもそれが不快に思うようなので、小皿にその中の品物を1品ずつ取り分けてあげて、1つずつ「これはジャガイモだよ」とか「ニンジンだよ」とかというようにして提示して、「1つ食べてみよう」ということで少しずつ食事を進めているところです。

スライド50



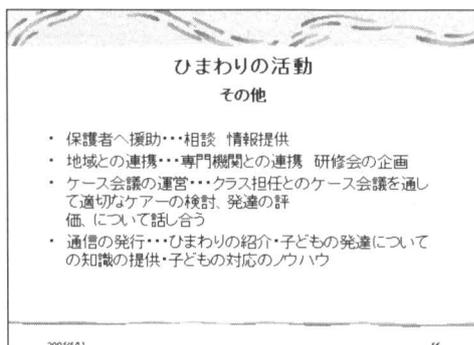
その隣にその導きのカードがあって、3つのお皿の品物をとにかく1口食べたら、おつゆとかご飯とかこのカードの順番に食べていっていいよ。4番目は、おかわりという意味だそうです。子どもと保育士の間で約束があって、3番まで行ったらおかわりもいいんだよということで、そのカードを見ながら食事を今進めているお子さんです。

スライド51

これは先ほどご案内しましたけど見通しカード、これはお子さんによって写真で提示する子、文字で提示する子がいて、その日の流れを紹介してあげています。



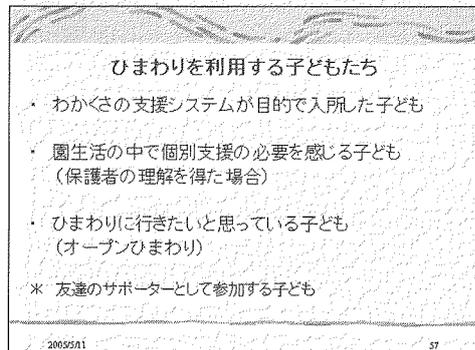
スライド52



それから、そのほかとしては保護者への援助、相談を随時行っています。そして様々な情報提供もしています。それから地域との連携、うちの在園しているお子さんの中で専門機関に通っているお子さんに対しては、定期的に専門機関のドクターや療育士さんと一緒に情報交換できるように、子どもたちの訓練に付いていくようにしています。

それからあと、地域の方たちに、地域の保育園関係者、教育関係者にぜひ子どもたちを一人一人大切にケアはこんなやり方があります、ということで、研修会を年間に何回か企画しています。それからケース会議ですね。これはフロアのスタッフと一緒に一人一人の子どもの状況分析し、対応の方針を見つけるためにケース会議を運営しています。

スライド53



そして通信の発行ということで、ひまわりの方から「ひまわり通信」というものを月に1回通信してひまわりの紹介をしたり、一般的な子どもの発達の知識とか対応のノウハウを保護者の皆さんにご案内しています。これは結構有効で、親御さんの「あなた」ということではなくて一般的な情報として提供すると、結構客観的に自分のお子さんを照らし合わせて評価しよう、とする親御さんが見られるときがあります。

どういう子どもさんがひまわりを利用しているか、ということですけど、こういうシステムがあるよということを聞き付けて、または療育とか病院関係で「わかきさに行くといいよ」というようなことで紹介されて、ぜひ入りたいと言っていた方たちがまず1グループいまして、その彼らは要はいわゆる専門家による診断というものを持ってわかきさにいらっしゃるんですね。

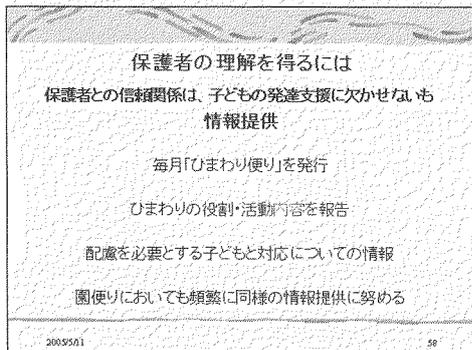
ですから、この方たちの存在によって加配を得ているという現実があります。だいたいマックスで10名、定員が160名なんですけど、マックスで10名お預かりしています。それから次に園生活の中で個別支援の必要を感じる子ども、これは保育士が日々生活を見て、ちょっとやっぱりつらい思いをしているかな、こんなケアをしてあげると非常にまた違う姿があるんじゃないかということで、私たちの中でひまわりを利用するといいかもね、なんていうことになると保護者にちょっと呼び掛けるんですね。それで保護者がぜひということになった子どもたちですね。

それからあと、ひまわりに行きたいと思っている子ども、これは自らひまわりに行きたいと、自己宣告ですね。そういう子どもたちもいます。その中、たいがい全員そうなんですよ。ひまわりへ行きたいと。親御さんに「僕、ひまわり習いたい」とかと言って、親に頼むそうなんです。

そういう子どもたちもいるし、実は親御さんの中からも、160人いたら個別的に配慮をしてほしい子どもって160人じゃないですか、という言葉もあって、ぜひひまわりを特定の人ではなくて、すべての子どもが利用できるようにしてみてもいいんじゃないかと、というご提案もいただいたりして、まったくその通りだということで私たちはオープンひまわりといって、その子によって頻度とかやることって変わってくるんですけども、必ずそこで体験できるようにプログラムというか順番をつくってあげています。

それからあと、友達のリポーターとして参加する子どもというのは、先ほどのソーシャルスキルのトレーニングには、そのお友達がとても一緒に活動したい、と思っている子を招いて一緒に、やっぱり大好きなお友達とやると結構コントロールが利くということで、そういうお友達もいます。

スライド54

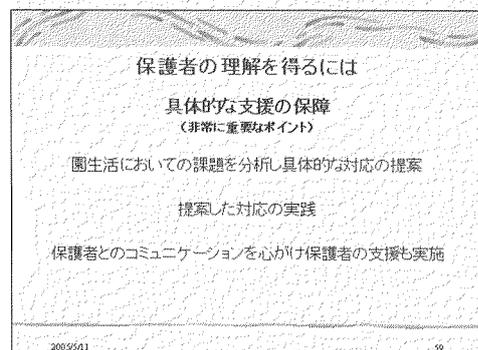


それから「保護者の理解を得るためには」ということでですけど、本当に保護者との信頼関係というのは大事だと。これがなくして子どもの発達支援というのは進まないと思うんですけど、先ほどお話ししたように私たちは日々情報提供ということを一般的にするようにしています。

毎月、ひまわり便りを発行しているんですけども、そこで軽度発達障害のことを取り上げたり、そういうことではなくて生活リズムの乱れによる子どもの異変ってこんなことがあるよとか、メディアによる子どもの影響はこんなことがあるよとか、親の養育態度で子どもはこんなふうになってしまうよ、みたいなことをくどく、くどく、これはひまわりだけではなくて、園便りでも連載するようにしているんですね。

そうすると親御さんの中には、ちょっとうちの子、こんな同じような姿がおうちでもあるんだけど、と言って自ら相談にみえる方もいらっしゃったりします。それで極力ひまわりというものに対しての偏見を親御さんも持たないようにPRして、ひまわりってなかなかいいところだ、ひまわりのケアによって子どもってすごく自尊心が高まって力強く発達するようだと、そういう信頼を勝ち得るためにそのPRに努めているわけですけども、開設当初は、どちらかというと発達に顕著に支援が必要な、という人たちでスタートしたので、そういう歴史があるのでちょっとひまわりに対する偏見が親御さんにある、それをぬぐうのに苦労しているのは事実なんですけど、私たちのコンセプトはそういう特別な子どものための場所ではなくて、みんなが特別だよ。そういう思いでやっていることを今一生懸命PRしています。

スライド55



その信頼を勝ち得るためには具体的に支援の保障を親御さんに提示するというのは大事なことだと思うんですね。よく「おたくのお子さん、こういう状況になっています」と言いつ放しで親御さんが傷つく。そうじゃなくて、私たちはこんなふうに園でサポートしたいと思うんだけどどうだろうかとか、おうちではどんなふうになっているのとか、そういうときはこんなふうしてみたらどうかしら、ちょっと園とおうちと協力してサポートする

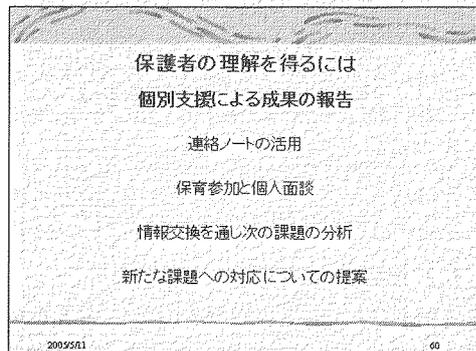
といい感じかもしれないということをお話しするんですね。

やはり親御さんとしても見通し、ケアの保障がある、親が1人で抱える問題ではない、きちんとこの子がその子なりに発達できる見通しが親御さんの中に感じていただけると少し心がリラックスして、やってみようかなとか、トライしてみようかな、任せてみようかなというふうに思っただけのようです。

もちろん提案したことは実行します。実行した結果を必ずお伝えして、それでその評価、分析して、じゃあ今度はそれがうまくいかなかったらこんな角度でまたやってみる。そういうことを繰り返

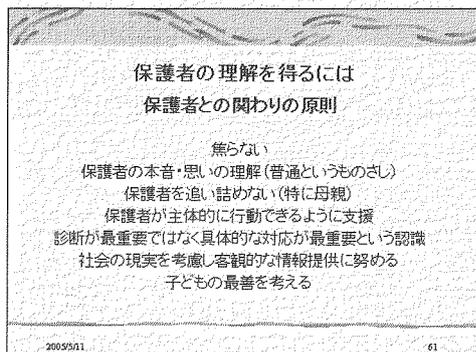
返して保護者とコミュニケーションを心掛けるようにしています。

スライド56



必ず成果を報告するという事で連絡ノートも用意しています。そのお子さんによってやりとりの頻度は毎日の子もいれば一月に1回の場合もあります。それから定期的に保育参加、これは参観というか一緒に参加していただいて子どもさんの生活ぶりを見ていただく。そしてそのときに個人面談をするということですね。あと情報交換を通して次の課題を一緒に考えていってやっていくということですね。

スライド57



ここで保護者とのかかわりの原則として私たちが日ごろ感じていることは、まず焦らないことですね。焦って親を追い詰めるようなことは絶対しないようにしようということで、親御さんの思いというか、次に書いてありますけど、本当に本音や思いというのがあると思うんですね。私たちの中であまり普通という物差しはないんです。

よく親御さんは、普通ということにこだわるんですけど、日本の教育の文化もそうだと思うんですけど、みんな違って当たり前だし、みんな違っていいよ、というのが私たちの園の中の物差しなんですけど、親御さんはそういう境地になかなか行けないというか、特に我が子になるとそういう思いがあるというのは現実なので、そういう思いに寄り添いながらも、私たちはそういう大きな目で子どもと親御さんをフォローできるようにすると。

やはり保護者を追い詰めないということ、特に母親が1人で思い悩み、家族にも相談できないとか、父親の養育態度がなかなかストレスの原因になっているようなこともあって、お母さんだけが抱えちゃうというケースが結構多いんですけど、そこで親自身が前向きになれるようなフォローをするようにしています。

あと、保護者が主体的に行動できるように支援、これは保育士に言われたからやるとかそういうことではなくて、お母さんたち、お父さんたち保護者が納得して行動できるようにということが、すごく大事だと思うんです。言われて動いた結果というのは、非常に感情的なものにつながってってしまうので、保護者が本当に自分で考えて、自分で行動できるようにサポートしていくことが原則かと思います。

それで、診断が最重要じゃなくて、具体的な対応が最重要という認識ということで、これはすごく難しい部分だと思うんですけど、実は保育園の現状というのはやはり診断がないと加配が得られない、いう実態があると思うんですね。だからどうしても園の方は専門機関へ導いて、ケアしてあげたいが故に人的配置をと思うので、診断ということが1つ壁になってしまうんですけど、うちの園の場合は、幸いマックス10名というお子さんがいらっしやって、その方たちの保護者は自分のお子さんはこうだというふうに認知して入所されるので、そこで毎年かなりの加配の保障が得られ

ているんですね。ですから、そのトータルで得られた加配を、その他の子どもたちにもケアできる体制を取っている。それがうちのリソースのシステムなんです。ですから、母親に何が何でも病院に行き診断、ということを行わずに済むという背景があります。情報提供だけはします。

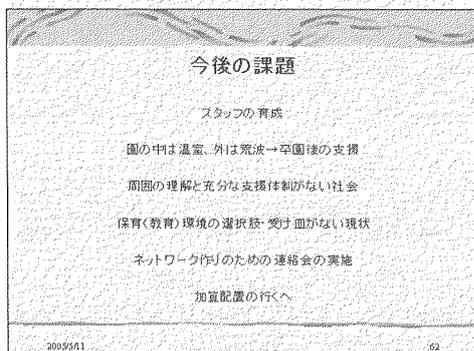
こういうところへ行くともっと詳しく子どもさんの状況が分かるよとか、支援の方針というのが見えてくるよ、またそれによって園も彼らのケアのヒントをもらうことができるよ、ということで、専門機関に通ずるメリットとか、選択肢も色々ある、ということを提供はしますが、その前のように保護者が主体的に行動できるということを最優先しますので、絶対行ってくださいとか、そういうようなプレッシャーはかけないようにしています。

就学して何かあって、あっと思い起こして行動されるお母さんもいます。だからうちに在園している間に、何が何でも専門機関で診断をもらってきなさい、というような雰囲気は持たないように今はしています。あと「社会の現実を考慮し、客観的な情報提供にする」。これは今まったくその時期なんですけど、就学相談、この時期になると本当に親もいろいろ揺れ動くんですね。

実際の一步出た環境状況、わかくさはこうだけど、ということで、一步出たときにどんな状況があるか、その中でこれから子育てしていくにはということが、ちょっと親御さんも勇気を持ってもらえるように、また悩みを抱えているならそれを一緒に考えてあげることができるように情報提供するようにしています。

そして子どもの最善を考える。誰のためのということ、やっぱり子どもさんの福祉、発達を最善に考えようという、そういうことを大前提だよ、ということで。でも、ただこういうケースがあります。やっぱり子ども最優先ということにこちらが力を入れ過ぎて、親御さんの精神なりストレスが大きいと、結果子どもによくないことになるんですね。だから、子どもの最善というのは、そこにやっぱり親、特に母親のケアということが付いて回るわけですが、それを両方バランス見ながら子どもの最善を考えてサポートするということですね。

スライド58



今、わかくさの今後の課題がいくつかありますけど、やはりスタッフの育成ということで、あくまでも、保育士の専門性でこれだけのことができる、というその認識が保育士の中でまだあまりないと思うんですね。これはうちのスタッフの中でもそういう部分があるんですね。だから、特別なことではない。私たちは、保育士として一人一人を大切にするとすれば、それは当然のことだと。また今度、保育指針の13章にも「特別な配慮を必要とする子どものケア」ということで、しっかりと文章化もされているということで、保育士がケアするその大切な専門性なんだよ、ということが大事な認識だと思っています。

それから今言ったように園の中ではかなり環境も整えられているので、子どもも保護者も非常に過ごしやすい、自信を持って過ごせていける。ところが一步外へ出ると学校の態勢であるとか、同じようなケアが継続できる保障が、実はないんですね。親御さんがなかなか認知できない1つの理由はそこにあると思うんです。やっぱり周囲がしっかり理解と整えられた環境、本当のバリアフリーな環境でみんなが生活していれば、あるがままの子ども姿とか、あるがままの自分ということ

受け入れて、お互いが協力し合って生きていけると思うんですけど、今はそういう環境にないが故にストレスと苦悩を抱えることになっているんだと思います。

ですから、今はまだなかなかこれで特別支援教育であるとか、発達障害者の支援法がどういうふうに機能していくか、が期待するところですけども、今の段階ではとにかく卒園した子どもたちを、そのまましっかりと育った自尊心を下げずに、社会に適応していってもらえるために、卒業のフォローというのも課題で考えています。

それからあと、周囲の理解と十分な支援体制がない社会ということで、社会全般そうですけど、昭島市もそうなんです。今、昭島市の支援体制を何とかできないか、ということが私の頭の中でぐるぐる回っている課題です。それから保育教育関係の選択肢や受け皿がない現状。保育園の入所が本当に悲しいかな、断るところもあるし、人数がわずかなもので行き場がない子どもたちがいっぱいなんです。

うちの園にも並んで待っていらっちゃって、入所できないで1年待って入るみたいなそういう現実があります。通園施設が1つあるんですけど定員数が少ないので、本当に家庭でお子さんを抱えて、どうしてあげようと悩んでいる親御さんがたくさんいる現状があるので、やっぱりその受け皿をどうつくるかということが昭島市においても大きな課題だと思います。

あと、ネットワークづくりのための連絡会の実施ということで、これは昨年度から少しずつ動いているんですけど、やっぱり地域全体がその問題に積極的に関わりながら、今その上に書かれているような問題をクリアできるように。ここで支援法の中にあるセンター化というか、そういったものが各自治体にしっかりと設けられることを期待して、そのきっかけになるような動きができればいいんじゃないかと思って、今——これは本当にわかくさの中のことじゃないんですけど、実はわかくさが昭島の中ではかなり注目されているというのも事実あるので、わかくさの園だけではなくて、地域のためにやれることをやっていこうということですね。

あと、加配に関してどうなっていくのかとてもよく分からない。国も一般財源化されて、それで各自治体に任されていますので、昭島市に関しては、うちみたいに実績を上げている園があるので、そんなに簡単にこれをなくすとか、あと手帳がないと付けないとか、そういうようなことになっている市も他市にはあるみたいだけど、うちの市に関しては、それはちょっとそうならないように、何とかしていこうと思います。

やっぱり、人が育つには人の手って絶対必要だと思っているんですね。教育とか保育というのは何にお金が掛かるって人件費なんですよ。だからやっぱり人を育てるために人が必要ということはそれなりの費用も必要ということで、今後、そこら辺の課題も大きな問題だな、とは思っていますが、一保育士、一保育園でどこまでできるか分かりませんが、子どもたちのために、やれることをやっていきたいというふうに考えています。時間オーバーしましたが、以上で終わります。ありがとうございました。

(司会) どうもありがとうございました。最後の午後に総合討論いたしますので、ご意見は、この後まとめておいてください。実はこのわかくさ保育園、私は2年ほど前に行かせていただきました。今のようなリソースルームのところや運動をみんなでやっているところにもちょっと見学させていただきました。

リソースルーム「ひまわり」

リソースとは：resource 人が必要・緊急の場合に援助を求める（頼りにする）物・人・方法など。

- リソースルームは、一人一人のニーズに応じた支援をするためのお部屋です。
- リソースルームのプログラム（必要な時期や時間帯・課題に合わせてプログラムをたてます。）に沿って、自分のクラスから通っていきます。
- 必要に応じて、リソースルームのスタッフが、クラスへ支援にいきます。

* 「ひまわり」とはリソースルームの通称名です。

世の中にはいろいろな人が生きています。ひとりひとりが違って、ひとりひとりが、かけがえのない大切な存在です。

私達保育士は、ひとりひとりの子どもの成長を願い、よりよい個別支援をしていくことを務めとじています。

個別支援とは・・・。どんな子どもにも、いろいろな事情によって抱えているものがあります。それによって、情緒不安定になったり、集団が苦手だったり、コミュニケーションがうまくいかなかったり、行動がコントロールできなかったり・・・。

そんなとき、その子に寄り添って、一緒に考え、安心できるように、その子にあった接し方をする必要があります。そんな、必要な対応を一人一人に合わせて行うことを、個別支援と考えています。

でも、悲しいかな、30人以上のクラスの中で、3人の担任ができる個別支援には限界があるのが現実です。また、子どもにとっても、クラスから離れて、小さな集団・空間でじっくりと大人や仲間と関わることの方が、安定でき、うまくいくことがあります。

そんなことから、クラスとは違う空間で、個別支援を可能にするお部屋として作られたのがリソースルームです。

リソースルームには、こんなお手伝い、利用の仕方があります。

何らかの事情で、心が不安定になり、クラスの中ではお落ち着くことができない場合、学校でいう保健室のようにほっと落ち着ける場所として、リソースルームを利用してもらうことがあります。

大きな集団での遊びや一斉活動では不安を感じたり、自信がもてない。そのため、自分から活動に取り組む勇気ももてず、ますます不安がつのってしまう・・・。

そんな場合、リソースルームで小さな集団活動を楽しむ体験を積み重ね、自信を身につけるためのお手伝いをすることができます。

お友達とのやり取りが苦手で、気持ちがうまく表せない。そんなつもりではないのに、つい乱暴になってしまう。お友達と喧嘩になってしまう。そんな苦手を持っている場合も、小さなグループワークを通して、ソーシャルスキル（コミュニケーションなどの社会的技術）を少しずつ身につけていくお手伝いもできます。

発達のバランスにばらつきがあることから、大きな集団での生活では、注意集中を持続することが苦手であったり、興奮しすぎてしまったり、お友達との関係がうまく保てなくなってしまう。そんな場合も、少人数のお友達と、安心して遊べるよう配慮します。また、活動も個別課題を設定して、じっくりと1対1で取り組めるように関わり、ステップアップしていけるように支援することができます。

これらの他に、リソースルームにお友達と一緒に遊んで過ごすことが楽しくて、足を運んでくるお友達もいます。

このように、子ども達にとってリソースルームは、保育園の中にあるなんだか楽しそうな小さなお部屋、というイメージで受け止められているようです。

リソースルームは、ひとりひとりの子どもが自信を持って前向きに生きる力を発揮できるように支援する場所です。

リソースルームはわかかさ保育園の子ども達みんなに開かれた場所です。

卒園までに必要に応じ、できる限りの支援を行うことが、楽しい学校生活にもつながっていくと思っています。

なお、リソースルームの利用は、クラスの集団が大きくなる幼児クラスの園児たちに開かれています。保護者の皆様の相談機関としては、幼児クラスに限らず、全てのご家庭や、地域にも開かれています。お気軽にご利用下さい。

ご質問やご意見、ご感想、もちろんご相談などお持ちの方は、遠慮なくお伝え下さい。

特別支援教育が始まる前に、すでに特別に個別支援保育をしている、というようなところで今日一部をご紹介していただきましたが、非常に先駆的な、また非常に関心の高い活動をされていると思います。資料の一番後ろに、影山さんの略歴のところに関連書籍というところがあります。

学研の『ラボム』という保育雑誌を中心に、ここの保育園の活動の実際というものが時折掲載、連載されておりました。2004年に『わかってほしい！気になる子』という小冊子の中で、わかき保育園の主たる取り組みをQ&Aの形で載せてありますので、もしご関心のある方はお手に取っていただければと思います。

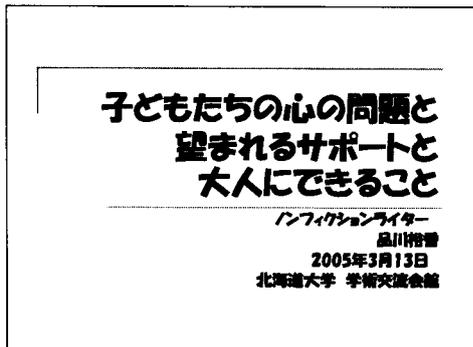
それでは、お2人目の報告に入らせていただきます。「子どもたちの心の問題と望まれるサポートと大人にできること」、ノンフィクションライターの品川裕香さんです。皆さんのお手元の1枚目に簡単な略歴と、品川さんがこれまでかかわって本に出してきたものがあります。

AD/HDの『嫌な子・ダメな子なんて言わないで』、あるいはえじそんくらぶのブックレットで出ている『みんな違ってみんないい』という本、そして最近では岩崎書店から『怠けてなんかない！ディスレクシア』ということで、軽度発達障害に関して非常に多くの子どもたち、そして大人たち、そして現場の丁寧な取材の中で紡ぎ出した、様々なお話が聞けると思います。

お手元の資料には非常に豊富な、91枚にもわたるスライドが載っています。残念ながら、今日はこれをすべて取り上げていただくわけにはいきませんが、1時間の枠の中でやっていただけるということになっております。

2. 子どもたちの今：ノンフィクションライターの目を通して

品川裕香（ノンフィクションライター）



（品川） 皆さん、こんにちは。ただいまご紹介にあずかりましたライターをしております品川と申します。よろしくお願ひします。お手元にちょっと分厚い資料が渡っていると思います。今日はどういった方がいらっしゃるか、ちょっと分からなかったの、いっぱいデータを入れてみました。お話は随時割愛しながら進めていきたいと思ひます。

いただいたテーマが、子どもたちの気持ちについてということでしたので、それについて今日は話していきたいと思います。

まず、子どもの話をする前に、特別支援教育がこう一気に広がった背景、それからそれを受けてどう変わってきているかということをお話します。

2003年10月に神戸市の校長会が出した本がありまして、そこに寄稿しました。そのとき全国の特別支援教育の現状を取材したのですが、多くの教育委員会の方が

AD/HDと言っても「ハア？」というような感じでした。電話で「AD/HDの子どもを転校さ

本日の狙い

- 特別支援教育の現状とは？
- 子どもたちの気持ちは？
- かつて子どもだった人たちがから学べることは？
- 大人にできることは？

せたいのですが」と教育委員会に聞くと、「エーデーエッチ？」と平気で言ってしまうような委員会もまだあったんですね。

ところが、それからわずか1年後、昨年の秋にある雑誌で取材をしたときには、ほとんどの方が「AD/HDですね、それはここです」とご存知でした。法律ができる前だったということもあるでしょうが、言葉が教育委員会の中に一気に広まったという印象を持っています。もちろん言葉を知っているだけ、というところも結構あるんですが。

実際にあそこの自治体はすごく頑張っているとか、あそこはいいよ、というような話を聞くと、私の性として取りあえず見に行こうかなと思い、取材に行きます。ところが行ってみると、看板は出ている。つまりお店屋さんが開いているのに、商品がないというところがあるんですね。診断はしても支援がないとか、あるいは特に最近多いのは、AD/HDとか高機能自閉症やアスペルガー症候群の子どもたちの支援はしていても、LDの支援はないということです。

特別支援教育の現状① 背景

- 通常教育の中で
いっせに広がった言葉と中途半端な概念
- ↓
- ところが、支援状況は地域格差広がる
・自治体によっての対応があまりに違う
(診断はしても支援はない自治体、ADHDや高機能自閉症等の支援はあってもLDの支援が遅れる、など)
- ↓

- ・診断はしても支援はない自治体
- ・ADHDや高機能自閉症等の支援はあってもLDの支援はない
- ・診断が付かなければ支援も指導はできない教育現場
- ・勝手に診断して告知する教師

など...!!

あるいは、先ほど影山先生もおっしゃっていただけけれども、診断が付かなければ支援はしないとか、あと一番最近多くて、私が非常に怒っているのは、学校の先生が勝手に診断をして、「おたくのお子さんはAD/HDですよ」と言ってしまうケースです。先生が我流診断するときのベースになるのは、文科省が調査したときに作ったチェックリストなのですが、チェックリストだけで「お母さん、おたくのお子さんはアスペルガーですね」と、いきなり教師が宣言してしまう。そんな乱暴な現状が少なくありません。

また、一方で、配慮しなければいけないという概念が広まったが

故に、結果的に排除につながっているというケースもよく見られます。これは昨年11月に取材をした都内の小学校なんですけど、AD/HDと診断されているお子さんが、廊下を走っていたんですね。この区は介助員といって、教職は持っていない人が、区の臨時職員の立場で付いていました。それで、子どもが授業中に廊下に飛び出て走っていたところ、介助員が後から追い掛けて行ったんですね。

どうするのかなと思ったら、子どもが走りっぱなしで、そのまま遊びに行ってしまうって、介助員も後ろからくっついていて見ているんですね。

特別支援教育の現状② 結果

- 配慮という名の排除

その①「学校側の場合」
ex) 2004年11月のこと、都内のある小学校、廊下を走るADHDの子ども(小5)、介助員が後ろから「気をつけろよ〜!」といいはがらあとを追い付ける。だが、教室には連れ戻さない、なぜかと聞いてみたところ...

彼には生まれつき、じつとできないという特徴があるんです。ADHDというんですけれどね。無理に教室に連れ戻し、授業を受けさせることは彼にとっては辛いことを強いることになるんですよ!
(校長談)

でも授業はやっているわけで、連れ戻さないのかなとか、どこか別の教室に行って授業をやるのかなと思ったので、校長先生に聞いたんですね、「やらなくていいんですか」と。そうしたら校長先生は「彼には生まれつきじっとできない特徴があるんです、それはAD/HDというんです、ご存じありませんか」とおっしゃいまして……。「その彼を無理に教室に連れ戻すことは彼にとってつらいことを強いるんですよ、あなたは分かっています」と。このレスポンスに驚いていた私は、逆にすごく怒られてしまいました。

では、じゃあ、そういう校長ばかりかといえば、これはまた関東の別の小学校なんですけど、ここは逆に学校が非常に熱心でLD、ディスレクシア、読み書き困難のLDをお持ちのお子さんの保護者が学校側に勉強会をしてくれということがきっかけになって、校内研修会を開いて、LDのこと

を勉強したという学校なんです。実はこの学校に、転校してきた別の保護者が、こういうことを校長に言ったわけです。「息子がパニックをしても放っておいてくれ。息子は辛くてパニックしていて、それが彼の特性なのでとにかく手出しは一切しないでくれ」と学校側に言ったそうです。

たまたま取材に行ったときに、音楽の授業中で、太鼓をゴーンとたたいたときに、子どもさんがパニックになって、泣いて床に転がったんですね。そのときも介助員というか、ここの自治体は補助員と言っていましたけど、補助員の人が横に立って子どものことをじっと見ているわけです。

音楽の授業をやっているんで、ほかの子どもたちはリコーダーを吹いているんですが、子どもの鳴き声もがーと教室中に響いているわけですね。パニックに手を付けないという不文律があるのかもしれないけれども、集団の中でこの子が泣いているということはどうなんだろうと思って、校長先生に聞いたら「保護者の依頼で何もできません」とおっしゃいます。授業が終わった後、ほかの子どもたちに「どうなの？」と聞いたら、“うざい”とか、“障害者だからしょうがない”、“特別扱いはむかつく”と答える。要するに泣いていても放っておかれるのは特別扱いだという考え方なんですね、子どもたちからみれば。“養護学校に行けばいいのに”という子もいました。

配慮という名の排除

その②「保護者側の場合」

ex) 関東のある小学校で。
「息子がパニックしても帰っておいてほしい。そのときに声をかけてパニックをおさえようとするのは息子にとって辛いことなんです！それが息子の特性なんです」と保護者が学校に依頼。

音楽の授業中、その少年がパニックになり、泣き叫んでも、床に寝転がっても誰も何もしない……。

校長は
「保護者の依頼で何もできません！」

他の児童たちに聞いたところ……

- ・困る
- ・ウザイ
- ・シューガイちゃんだから、しょうがない
- ・特別扱いにはムかつく
- ・養護学校に行けばいいのに

でもこの子が泣いているときに、補助員の人はずっと見ていたんですが、彼が転校してきたから仲がよかった女の子が、その彼のそばに行って肩をたたいたんです。女の子がその寝転がっている子のところにいって、肩をとんとんとやって、こういうふうにシーッとやったら、その子はハッと起きて上がったんです。タタタッと自分の席に戻ったんです。その間、補助員はこうやって見て

その子の特性を理解して配慮しているつもりが、結果的に

クラスのなかで、ほかの児童たちから排除されるのを促進している！

**本人はこれでいいのか？
これが本人の望んでいることか？**

いるわけですね。私からすると、補助員にお金を払うのはむだなんじゃないかと思ったんですが、学校側は「補助員が特別支援としての指導なんです」というようなことを言っていました。

ですが、ちょっと考えてみると、どうなんだろうと疑問が湧いてきます。この子の場合にはたまたまその女の子がいたからいいですけど、そのまま放っているというのは非常によくあるケースで、決してこの小学校だけではありません。でも、パニックしたままだと、クラスのほかの子どもたちから、なんかあいつとはちょっと一緒にやっていけないよなというような雰囲気生まれてしまう。本人はこれでいいのか、これが本人が望んでいることなのかなというように、常々思っています。

お手元の資料にはアスペルガーのお子さんの話が出ていますが、これは割愛して、田中先生の方から年齢が上の子の方がいいんじゃないかということだったので、上の方に行きます。詳しく書いていますので、見ていただければ分かると思います。紹介したいのが、今高校1年生の仮名なんですけどアヤちゃんという女の子です。彼女は中2の夏に診断を受けています。

ADDとLDのあるアヤ(高1)の場合

- 2002年、中学2年の夏に診断を受ける
- 学校に診断書を添えて相談するものの、フォロー(座席を前のほうに移動させる、テスト時間を延長するなどの「配慮」)なし

「中学校は小学校とは違いますから」(担任)

診断は、ADDとLDがあるということだったんですが、親御さんも、もう小学校のときからたぶん今、世間で言われているAD/HDというのがうちの子にあるらしいというのは感じてはいたんですね。ですが、正確な診断を受けたのが中2のときでした。だから3年前の夏ですね。学校側に診断書を持って相談に行くんですが、当時はフォローはありませんでした。座席を前の方に移動

させるとか、テストの時間を延長するというような配慮も一切なく、そのときの学校側の言い分としては中学校は小学校と違う、と。

- 2004年、中3のときに情緒障害児学級を知り面接に行き、通級することに。
- そこでは、中1の子たちと一緒の授業。ADHDもアスペルガー一症候群もLDも一緒に、授業と言いつながら、結果的に、最年長のアヤがほかの子の面倒を見るはめに。なった。
- アヤ自身は内心産る。「受験生なのに！」

ただ、この自治体は都内では特別支援教育をよくやっているといわれている自治体なんです。だから2～3年前はどこもやっていなかったからできなかったわけではなくて、この自治体はやっていたんですね。実は全国的にもよく取り上げられている自治体なんです。

私は取材で、2年前にこの子のお母さんと知り合って、でもおたくの自治体はすごく進んでいて熱心な先生がいっぱいいるから、情緒障害児学級で通級もやっていますよ、

ということをお伝えして、それで彼女は面接を受けて、通えることになったんです。

このお子さんは、算数障害があるんですね。数字の認知がすごく悪い。あと、ADDもちょっと強いので、リタリンを飲んでいたんですが、リタリンがあまり合わない子だったんですね。文章題を読むのも苦手で、行を読み飛ばしてしまうから、数学の文章題が点につながらないということもありました。

結果的に通級に通えるようになったんですが、その彼女が通った通級というのが中1の子どもたちから一緒にいた授業だったらいいんですけども、そこには結局、AD/HDの子もいれば、アスペの子もいればLDの子もいるという状況だったんですね。そうするとどうしても、やっぱり通級の中でもAD/HDとアスペの子に先生たちの目が行ってしまう。彼女は兄弟の真ん中で弟がいたので、わりと面倒見のいい子だった。

アヤの気持ち①

診断名よりも問題は・・・

- ・自分がテストなどでケアレスミスが多いこと！
 - ・わかっていて間違えるのが悔しいこと！
 - ・集中力が全く続かないこと！
- （自分の状況を理解している）

先生はつい彼女に「ちょっとこれやっておいて」という形で面倒を見させる役をさせてしまうわけですね。彼女も求められていることがよく分かっているのでやっていたんだけど、内心は“受験生なのにどうしよう”と焦っていました。そのときに彼女が私に言ったことは、とにかく自分にとってはLDとかAD/HDとかどうでもいいと。自分にとって問題なのは、例えばテストでケアレスミスが多くて、それが点数につながらないことだ

とか、あと分かかっていて間違える、その悔しい気持ちがなかなか解消できないとか、集中力が続かないとか、そういうことだって。彼女自身は、自分の状況がどういうことかというのはすごくよく分かっている。

アヤの気持ち②

- ・診断されるくらいいんだから、自分にあった勉強方法はあるんじゃないかと思うが、それが自分ではわからない！
- ・しかも塾に聞けば、どういった勉強方法が分かるのかもわからない（塾の先生も知らない）
- ・結果的に、クラスのなかで浮いてしまっている

彼女が私に言ったのは、病院に行って、ADDとかLDとか言われるぐらいなんだから、自分に合ったやり方とか勉強法があるんじゃないかと思うんだけど、それは自分では分からない。お医者さんに聞いたけどお医者さんも分からない、学校の先生に聞いたけど担任も全然分からないんですね。塾に行ったんですが、塾の先生も知らない。それを通級で教えてもらえるとちょっと期待していたんだけど、通級はそういう状況だった

から、彼女になかなかきっちり対応ができない。

結果的に彼女は診断名が付いて、あんたはこういう状況よというのだけが、がんと入って方策がない。その結果、彼女は非常にクラスの中でもだんだん居心地が悪くなっていくんですね。保護者も理解があるようでない。これは彼女の言い分なんですけど、親はものすごく頑張っているんですよ。親はこの子のために誰に相談したらいいか、どのカウンセラーに行ったらいいか、とものすごく調べているんですが、結果的に診断が付いた後、親は

・親の理解もあるようでない

「あなたにはADDでLDがあるんだから」と言いながら
「もともとの脳が弱いんだから、頑張ればもってこえる、だから頑張ろう」と言う。

たぶん彼女を励ますつもりで、あんたはもともと頭がいいんだから、頑張ればもっとできるよ、頑張ろうと言うんですね。

だけどそれは本人からしたら全然、この親は分かっていないという認識になります。彼女が繰り返し言うのは、“私が知りたいのは、とにかく対処の仕方なんです”と。でもそれが分からなから結果的に無気力になっていって、中3の2学期にちょっとした事件が学校内であったんですが、要するに教師の無理解から来る事件だったんですけれども、それ以降、“どうせ何をやってもだめですから”というようになります。

アヤの気持ち③

どうしたらいいかわからない…!

- 知りたいのは「対処の仕方」、
診断名ではない。

**ADDだのLDだの言われても、私ができる
いは変わらない(リタリンは効かない)**
↓

さっき言った事件というのは、ADDに関することなんです。彼女はどうしても忘れ物が多いんですね。提出物も期限内には出せないし、遅刻はするし、じゃあ、次にどこそこに集合といっても必ず遅れていく。そのことについて担任が三者面談のときに、“態度が悪いから、このままでは内申書は本当に悪くなりますよ”と彼女に言うんです。教師から見たら頭のいい子だったので、怠けていると見えたようでした。

- とんどん無気力になってしまう…

「どうせやってもダメですから…」
とんどん低下するセルフエスティーム

- 登校拒否
- リスカ常習
- 睡眠剤過剰摂取

親が、“いや、これはこういう弱さがあるので”と言っても、「はいはい、そうですね、AD/HDですね、分かりました」と教師は言いながら、平気で内申書の点数を下げるなど、実態が伴わないことを言う。そういうことを言われた彼女は絶望し、登校拒否を始め、どこで覚えたかというか、彼女のもう1人別の理由で不登校になった友達が、同じ中学校にいたんですが、その子がリスカのことをどこかから聞いてきた。リスカを始めたら、ど

うも心が安心するよみたいなことをこの子に吹き込んでから、彼女もリスカをやるようになり、それから睡眠剤の過剰摂取するようになります。

結論からいうと、この保護者が家庭教師を雇って、彼女もすごく頑張って受かったんです、名門校に。親としてはいい高校に行ったから、もう大丈夫だろうと思ったんでしょうが、彼女の的には全然何も変わっていないんですね。自分にあったやり方がわからない点は同じです。結局高校1年の2学期から不登校になります。それがきっかけで親子関係は非常に悪化します。とにかく母親との

アヤの環境…

中学2年で転校

- 既に受験体制に入っていたので、友達がいま
あまいできなかった。今もほとんどいない
- スポーツはしていない。演劇部に入った
が人間関係がうまくいかない
- 韓がとても勉強ができるので、自分で
比較してしまう(父親も祖父も比較する)
- 友だちはネットの中だけ

- 受験成功するものの(名門高)
低いセルフエスティームは
回復せず。
高校1学期2学期はほとんど
不登校。
親子関係激化(親はアヤの気持ち
理解できず)!!

関係がもう全然うまくいかなくなるんですね。

彼女自身の環境は、中2で転校してきて、行った先が受験に熱心な学校なので、中2からみんな

塾に通って受験態勢に入っていたんですね。なかなか友達ができない。別に関西から東京に来たとか、そういう引っ越しではなかったんですが、なかなか学校になじめない。スポーツはしていない、一瞬演劇部に入るんですが、せりふは覚えられるんだけど、急な指示で対応ができないから同級生から、「何かあいつ、動きが悪いよね」みたいになって、人間関係がうまくいかなくなってしまふ。

お姉ちゃんがいて、お姉ちゃんがまたすごく勉強ができる。父親も「お姉ちゃん是可以のに何でお前はこんなケアレスミスが多いんだ」と言ってしまう。父親は母親（奥さん）から「そんなこと言わないでよ」と言われるとやめるんですが、祖父母がめちゃめちゃ比較するわけですね。「小さいときからお姉ちゃん是可以のに、あんたはどうかのよ」と。そういうふうに言われて育つので、彼女が自分自身で比較してしまふんです。そして、友達はネットだけ。ネットをしていると、親は勉強しなさいと言う。こうして悪循環に入っていました。

アヤの苦悩はADDやLDだけ？
 「勉強の対処の仕方がわからない」
 ケアレスミスも多い⇒自己嫌悪

- 家庭でも、身の置場所がわからない⇒母親から怒られてもろえないうちの気持ち強い
 ⇒親や教師は頑張れ、と言いがけら、もはや私には期待してほしくないのが分かって⇒無気力に
- 同居している父方の祖父母も理解が合わない⇒
 「お姉ちゃん是可以のに、あんたはねえ…お母さんに似たのかしら？」などと言葉
 ⇒どうせやっても自分分かんかダメ、という気持ちが止まらない

彼女からすると母親、家

族もわかってくれない、家庭に身の置きどころがない。親も教師も「あんたは本当はできるんだから頑張りなさい」と言う。でも、「それは言っているだけで、絶対に私にはもう期待していないんだ」というようなことを言っていました。祖父母にも比較される。彼女が一番嫌なのは、「お姉ちゃん是可以のに、あんたができないのは、お母さんに似たからじゃないかしら」と父方の祖父母が言うことだったんですね。その母親と彼女は仲が悪いので、もう自分なんかどうでもいいや、という気持ちが強くなってしまふと。

一方、保護者はやっぱりすごく熱心な方で、小学校の中学年ぐらいからどうも、うちの子の、この不注意は単なる不注意じゃないじゃないかということで、いろいろ本を読んでいらしたんです。司馬先生の『のび太・ジャイアン（症候群）』も読んでいました。ただ、どうしてもお父さんのお仕事の関係で転校が多い、その都度うちの子は診断を受けていないけど、たぶんこういう状況なのでと説明はしていたが、なかなか理解はしてもらえない。親の会には早くから入っていらして、接し方とかは学んでいたんだけど、学校の言い分は、いつも、「診断がないんだから特別扱いはいできない」ということでした。

周囲の状況…保護者(母親)①

- 小学校中学年のころから、不注意については気がついていて、できる限りのしつけはした(本もたくさん読んだ)。
- 父親の仕事の関係で小学校では2回、中学校でも1回転校。その都度、学校には様子の特性を書いた資料を持参し丁寧に説明したが、いつもあまり取り合ってもらえなかった。

周囲の状況…保護者(母親)②

- 参考にしろだろうと思ひ、親の会には参加、子どもへの接し方などを学ぶ。
- 折を見て、学校側にも「こういう風に対応してほしい」と言うが、学校からは「診断もないのに特別扱いはいできない」と言われる。

周囲の状況…保護者(母親)③

- 小6のときにADHDを疑って、医者に行ったが「親の愛情が足りないだけ」と言われた。
- 中2で診断されるが、転校先の学校でもあまり対応してもらえない。
- このころから、娘が家庭内で荒れる。「どうせお姉ちゃんみたいにはできない!!」

周囲の状況…保護者(母親)④

- 塾に行くが、うまくいかない
- 家庭教師をつけるが、うまくいかない
- 中2の3学期の保護者会のときに「こんなに忘れ物が多かったり、提出物を出さなかったりする、内申書ではいい点にはならない」と担任に言われる。

周囲の状況…保護者(母親)⑤

- 保護者は完全に混乱
「夫や夫の両親には私のせいと言われるし、もうアヤにはどうしたらいいかわからない」
⇒何か娘にとって最大の問題になっているのか混乱してよくわからない!
- 母親自身、カウンセラーに通うように…

アヤは完璧に八方ふさがり!

- 転校生なので、地元にもだれも知り合いの大人もいない
- クラブ活動もしていない(指示通りに動けないことを知っているため)
- 習い事もやっていない(同上)
- 塾にも行ってない(自分に合った対応の仕方はどうせ教えてもらえない)
- コンビニのバイトをやってみたけど、作業メモリーが悪いし、きびきび動けなくてクビに…

小6のときにAD/HDを疑ってドクターに行くんですが、親の愛情がないと言われる。中2のときに診断されるけど、さっき言ったみたいに学校では相手にされない。そして、中2ぐらいから娘が家庭で荒れるんですね、「私はお姉ちゃんじゃない、お姉ちゃんみたいにはできない」って。母親にしてみれば、夫や夫の両親に「お前が悪い、お前に似たからだ、お前の遺伝子だ」と言われるそうです。

でも娘は娘でものすごく反発するので、お母さん自身も何が娘の問題かがまったくわからなくなっていく、これが中3のときでした。

私はお母さんには、親子でも相性があるんだから、取りあえず、まずお母さんが元気になることが先なんじゃないか、ということを行いました。お母さん自身はカウンセラーに通うようになるんですが、その様子に今度は娘がまた不安になっていく。お母さんが、ああやってカウンセラーに行くようになったのは、私のせいだというふうになっていきます。

一方、学校側に話を聞いたら、担任の先生は、「障害と診断されたなら、もう私の専門ではありません」とおっしゃっていましたね。あるいは「彼女だけを特別扱いにはできない」と。文句があるのなら教育委員会に言ってくれと。でも、その教育委員会はやれと言っているんですが、その意識のギャップというのがものすごくあり

ます。

高校に入ってからなんですが、高校側はすごく一生懸命、特に校長先生が熱心で、彼女の主治医に会ったりしてくれたんです。ただ、高校は義務教育じゃないから、特別扱いはできないと言う教師に対して強制はできない。校長にもジレンマがあるようなことを言われたそうです。

周囲の状況…学校

- 中学校側は興味がない
「障害と診断されたのであれば、私は専門ではない」(担任)
「オタクのお子さんだけ特別扱いにはできない」(学年主任)
- 高校側は医者に会うほど、努力はしてくれたが「義務教育ではないのだから、やりたくないという教師に強制できない」(校長)

周囲の状況…医者

- 医者にも本心を話さないので、医者も理解できない
- 「薬を出すとオーバードーズする、自己管理が悪い」
「もはやADDの問題ではなく、家族の問題」

ドクターからすると、薬を出すと飲み過ぎてしまって、自己管理ができない。もはや家族の問題

だろうと。結局、彼女自身は完全に八方ふさがりになっていくわけです。

コンビニのバイトをやっても、きびきび動けなくてクビになってしまう。コンビニのバイトって結構あれも動かしてこれもやって、レジも打って、とすごくいっぱい対応しなきゃいけないんですが、作業メモリーが悪いとそううまくできないんですね。

ディスレクシアのエミ(20)の場合

- 高1のときのバスケット顧問から投げつけられた言葉
- 「あなた、最近本読んでるの？ あなたみたいな子はみんなの迷惑なの、先生はLDのことはよく知っているけど、あなたみたいな子は高校をやめて他の道を選んだほうがいい、どうせ友達もできないだろうし、できたとしても漢字が読めないことがわかったら、みんな逃げていくわ」

もう1人、これはディスレクシア（読み書き困難）のLDのある女の子なんですが、この間二十歳になったばかりなんだけど、彼女の場合は診断がすごく早くて、病院で小学校の1年生のときだから、もう13年前に診断が付いています。それでこれはなぜ診断が付いたかというところ、お母さんが学校の先生だったんですね。自分の経験から見て、この子はたぶん何かあるだろうということで、お母さんが当時はインターネットも何もない時代に、口

コミととにかく片っ端から本を読んで、それで病院を見つけて診断を受けたのです。

なので、わりと早い段階から、お母さんが学校の先生だということもあって、こういう指導をしてください、全然特別扱いではないんだけど、例えば席を前の方にやってくださいとか、この子はちょっと音読が苦手なので、家でもやらせますけど、学校でこういうふうにやってください、みたいなお願いはしていたんです。お母さんに言わせれば、教師によって対応にはすごい差があったそうです。今と同じですね。

これは、ここに書いてある高1の先生の一言がきっかけでこの子は、それまで周囲の大人が一生懸命やってきたものが、全部崩れてしまった経緯があります。これは何かというと高1のバスケット部の顧問が彼女に言った言葉なんです、「あなた最近本を読んでいるの？ あなたみたいな子はみんなの迷惑なの。先生はLDのことはよく知っているのよ」と。この先生はLD学会の会員でした。

彼女は、自分がLDだということはちゃんと知っていたんですね。この学校を選んだのも、そのLD学会の先生がいるからだったのに、その先生に「あなたみたいな子は高校をやめてほかの道を選んだ方がいい。どうせ友達もできないだろうし、できたとしても漢字が読めないと分かったら、みんな逃げていく」と言われるわけです。彼女は呆然とします。呆然としながら、校庭に夕日が落ちていくのを見つつ、一体何が行われているんだろう、なぜこう

- 翌日から生きているのがやっとなる…
早く死ぬ、と通る悪夢
取り戻される恐怖
みんなから離れている自分
友達ができない！
記憶が飛ぶ(解離する)ようになる

そして…16歳の誕生日の翌日、自殺未遂
ひとりで水葬へ！！

いうことを言われるんだろう、と思いながら聞いていた。これがきっかけで彼女は解離していくんです。

翌日から、もう呼吸するのがやっとなだ、とお母さんは泣きながらおっしゃっていましたが、ものすごい悪夢を見るようになります。先生が白い花を持って、彼女に来る夢なんですって。学校中の先生が、今まで彼女のことを受け入れなかった先生たちが、みんな白いユリを持つ

- 小3のある日、教師だった母親がどうしてもおかしなところがあった…読み書きのLDと診断される

- 診断されても、今から10年前、療育は全くなかった！
- 親はなんとか子どもの特徴をつかもうと必死に、
- 耳が痛いことがわかっていたので、何度も聴覚検査を受けた→本人は教科書を暗記して勉強に対応

て迫ってくるという悪夢でした。それからまるで眠れなくなるようになりました。

16歳の誕生日の翌日に、自殺未遂し学校を変わるんですが、結局変わってもうまくいかない。

この子には耳がいいからと言って、早くからピアノをやらせたり、音楽のことをやらせたりもしていました。字が読めないわけじゃなくて読むのが遅いだけだと言って、この子のペースでは付いていけないからと言って、毎晩1時、2時まで教科書を読んだり。彼女は1回聞かせると、一発で覚えちゃうので、そうやって対応をしていたんです。

小学校のときはそれを学校側に言って、そういうことをやっていますということを説明していました。ただ、中にはやっぱりすごくいじわるな先生がいて、「今日は本当はここからやるはずだったけど、先生の気が向かないからこっちからやろう」と

エミの場合は・・・

- 難しい漢字が読めない
- 教科書が読めない(ルビがらってあれはなんとかなる)
- バスケやなどのルールが覚えられない
- 先生の指示がわからない(一度にたくさん言うので)
- 組み体操など隊形が変わると覚えられない
- 計算は得意なのに、文章題はできない・・・

と言って全然違うところをやったりすわけです。そうすると彼女はまったく対応ができない。なのに、そういう担任は彼女に読めと言ったりするわけですね。そうすると、また彼女は立ちつくして読めない。そんな状況が小学校の5年生のときにあって、それでも基本的には小学校ではすごく恵まれていた。うまくいかなかったのは、中学に入ってからなんですね。

LDがあるので指示に対して素早く動けないとか、この子の場合は視覚の処理が悪いので、黒板の字が黒い丸に見えるらしい。黒というかチョークだから白い丸に見える。先生が黒板を写せというのと、何で白い丸を写すのかなと思いつつ、それを写していたと言うんですね。ところが教師はそれを見て、ふざけていると言って怒る、というような状況でした。

それをその小学校5年のときに経験しているので、中学ではLDに理解のある中高一貫に入れようとお母さん

も思われて、ものすごい勉強をして入るんですが、そのことをちゃんと説明したにも関わらず、中学でもまた同じことをやられる。中1の最初に国語の授業があったんですが、そのときに教科書を読めと言われた。彼女の苗字はあいうえお順で早いので最初に当たってしまうと。

まさか始業式の翌日に、授業をやるとは思っていませんでしたので、いつもやる予習をしてこなかったんですね。結局いきなり当てられてしまい、緊張もあるので余計に読めなかった。そうすると何でこんな漢字が読めないんだということで、教師がみんなの前で怒鳴るわけですよ。「よくお前はうちの学校に入れたな」と言ったそうです。新しい学校に入って希望に燃えたその日に。

彼女は真っ青になるんですが、これじゃだめだ、頑張らなきゃと思って、トイレにその休み時間に入って、ひとしきり泣いて、よし、次の授業は頑張ろうと。もしだめだったら今日は家に帰ろう

その都度、保護者が理解を求めて説明に行くが

**「怠けているだけでしょう！
特別扱いはできません！」
と言われる**

● LDに理解のあるという理由でわざわざ入学した
中学で、すぐにいじめが...

「あの子、頭悪いんじゃないの？なんでウチの学
校には入れたの？」(同級生から)

「なんで、ルールが覚えられないのにバスケット続
けているの？迷惑なんだけど」(顧問から)

「小学生が読む字が何で読めないのか！
教師をバカにしているのか！」(教科担任から)

と思ったそうです。

親も、小学校の先生もしんどかったら、まずその場か
ら離れろということもすごく指導をしていたのですが、
トイレに行ったら「あの子、頭悪いんじゃないの、何で
うちの学校に入れたの。ルールが覚えられないんだから
バスケット部なんか続けられないでしょう」と。

彼女はすごく悩むんですが、でもここで中学に行か
なかったら、私は小卒になってしまうと。地元の公立は行

けないんだから、ここしかない、と思ってすごい頑張るんですね。指示に対してはなかなかぱっと
動けないんですが、運動神経はすごくいい子で、小学校の1年生のときから地元のバスケットチー
ムに入っていて、何か県の大会とかにも出るような子だったんです。

ところが、だんだん中学ぐらいい入ってくると、変則ルールになったりとか、今日はこういうチー
ムでやろうとか変わったりしますよね、それに対応できなくなったんですね。最初に言った、「あ
んたなんかこの高校やめた方がいいわ」と言った顧問というのは、実は中1のときから彼女を見て
いたという顧問だったんです。LD学会の会員の方だったという人ですね、ちょっと強調しちゃい
ますけど。

現在の日々と尽きない苦悩

絶対音感を生かして作曲
の進へ
コンピュータで音を落とし
込む勉強を続ける

バイトがない...
某化粧品会社の工場NG
レストラン・ウエイテスNG
レストラン・洗い場NG
コンビニNG
新聞配達NG
ティッシュ配りNG...

結果的に高校をやめて今はどうしているかという
自分には絶対音感があるということは彼女はわかっ
ているので、自分の頭の音を何とかコンピュータに
落とし込めるようにできないかということで、コン
ピュータの音楽ソフトの使い方を勉強しています。
できればそれでプロになりたい、とすごく思っ
ている、そういう自分がある一方で、でもやっ
ぱり自活したいと思うんですね、すごく。とに
かなく工場のバイトならできるかもしれないと思
って、化粧品の会社の工場バイトに行くんです。こ

これは高校を高1でやめ、高2で実際にやめるんですが、(工場に)行くんですね。

これはどういうバイトかという、ベルトコンベアに乗ってきたものを、ただ箱に詰める仕事で
す。彼女は字は読むのが遅いけれども、形でも認識できるし、色とか分かるわけだから、できると
思って行ったんです。高2のときに学校をやめるときに、もう私は隠して生きていくのは嫌だとい
うことになって、採用が決まったときに、自分から工場長のところに行って、私は読んだり書いたり
するのにすごく時間がかかりますと、でもできないわけじゃないので、事前に言ってくださいと言
ったんですね。

そうしたらその工場長が言った言葉が、留学生でさえ漢字が読めるんだから、君は来なくていい
と。しょうがないので、ウエイテスはいいかもしいかなと思って、ウエイテスに。ところが、
ウエイテスは逆に注文をばーっと今は言われますよね。注文を言われても今はボタンでプッシュ
できるのがあるから、これなら対応ができるだろうと彼女も思うんですが、やっぱりこうボタン
を押す行間がすごく狭いんですね。

飲み物とかも色分けされているから、できると思ったらいいんだけど、実は狭いから押し間違え

ちやう。注文を間違えて、ここもクビ。じゃあ、洗い場ならいいだろうと思った。ところが洗い場というのは、洗いながらいろいろとやらなければいけないことがある。その指示に対応ができなくてだめ。コンビニはもちろん無理でした。

新聞配達ならいいだろうと思ったんですが、新聞配達は、今日は何とかさんちは休みだから入れなくていいよとか、何とかさんちは今日はこれもついでに入れてね、みたいな、そういうやはり変則があつて対応できず。ティッシュ配りならいいだろうと思ったんですね。ティッシュ配りをやろ

うとするんだけど、ノルマがやはりすごくある。結局自分はだめだと思っていたこともあったんでしょう、結局もうこれでもできませんでした、と言ってやめてしまいました。

私は最初彼女がコンピュータの音楽をやる前に、バイトで今困っているというときに、相談に乗っていたんですね。そうだ、君にできることがあると私は思った。それは何かといたら手話通訳ならいいかなと思ったんですね。手話通訳だったら、ペアになればできるんじゃない

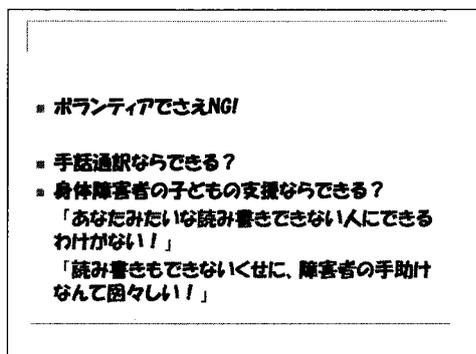
いかと思ったら、彼女が私に言ったことは、「品川さん、ボランティアだって私はできないんですよ」「どうして?」と言ったら、実は彼女は最初に手話通訳ができるかもしれないと思って、その地元のボランティアグループに中学のときから登録をしていたんですね。

そのボランティアグループの中で、障害のある子どもたちのリーダーみたいな感じでキャンプに行くときの支援とかをやっていたんですが、そこでもう隠しているのは嫌だということになって、ある日そのリーダー会で、実は私はこういう苦手なところがあると、だけどこれはこういうふうに支援してもらえばできるからと話した。

そうしたら、そのボランティア会の幹部が彼女に、今まで私たちがだましていたのかと言ったそうです。読み書きができないくせに障害者の手助けをするというのはずうずうしいと言われたと、これは彼女は泣きながら言っていましたけど。でも彼女はこのときひるまなかつたんですね。そんな人はいっぱいいるんだと、私はたまたま診断されているだけで分からない人だっていっぱいいる。実際に彼女のすごく仲いい友達が、彼女以上に読み書きができないんですが、もう1人のおうちの方はご両親がすごく子どもさんに無関心なおうちなので、できなくても、何となく勉強ができない子という形で認識されていたんです。

このボランティアが結構有名な会なんですけど、どういうことかなと思って聞いていたんですが、そういうふうに言われて、その後彼女は、その会の会長に長い手紙を書くんですね。そうするとその手紙が彼女の許可なくコピーされて、全幹部に回って、回ってじゃあ、理解があるような行動につながるかと思えば、彼女をクビにする理由になったそうです。これは本当にひどい話なんですけどね。

結果的に彼女はうつ状態にだんだんなっていくんですが、家事能力はご家庭で小さいときからアイロン掛けとか、料理とか鍛えられていました。なので、今はその親の仕事を手伝いながらやっていて、どうしているかなと思ったら、この間、1年付き合っていた彼が自分のことを分かってくれて、結婚しますとラブリーな手紙が来ていました。



ただ、私としては結婚が全てではやはりないので、彼女がもうちょっとうまく生きていける方法があるといいな、と考えているんですけど。

2年前にアスペルガー症候群とわかった主婦(36歳)の場合

- 学生時代はほとんどか対応できた
- 嫌な記憶: 小五で修学旅行へ…
- 「どうしても修学旅行に行きたくなかった」
- 今思い返せば、場所が変わる不安など
- 教師は…
- 「お前は顔がいいからって、同級生を見下しているんだろ! あんな幼稚な奴らとは行きたくないというのか!」と激怒。
- なぜ怒られたのかわからなかった

これはこの間取材した、34歳のときに自分がアスペルガーだと分かった女性なんですが、彼女の場合はご両親が養護学校の先生だったんですね。なので子どもに理解があって、色々な子どもがいていいんだよ、と小さいときから言われていたそうです。なので、学生時代はみんなと違うことをしても、親にも別に怒られなかった。でも集団の中でも浮いていて、いじめられた、友達もあまりいなかった。だけど親からは、でも君は顔がいいんだから、みたいなことを言われて自分でもそう思っていた。

それが自分の1つのアイデンティティーになって、何とかやってきたんですね。

彼女にじゃあ、小学校時代に嫌な記憶はないかと聞いたら、それが小学校5年生のとき、修学旅行に行くとき、どうしても修学旅行に行くのが嫌だった。何で嫌か、今思えば、それはたぶん場所が変わるからとか、そういう自閉傾向的な不安だったと思うんだけど、自分では説明できない、だから「嫌です、私は修学旅行に行きたくありません」と教師に言うわけですね。

問題は就職してから悪化!

- 一度大学を卒業したが、就職試験はすべて面接で失敗!
- 表情が怖い
- 目を見て話さないのは対人恐怖症?
- バカにしている?
- 偉そうに話すせに…

教師は「お前は顔がいいからって同級生を見下しているんだろ、あんな幼稚なやつらと行きたくないと言うのか」と彼女に言ったそうです。彼女は非常に正確に覚えていて、そのときの先生の声色までまねしていましたけど、先生は声を震わせながら怒ったそうです。でも彼女は、私は行きたくないだけで、別に誰かを見下すとかそんなことは思っていないのに、どうしてもそういうふうに言われるかが分からないというようなことを言っていました。

この人の場合は、そういった事情でとんとん拍子でストレートでいい大学に入ります。大学を卒業する、就職活動をするときまでものすごくハッピーだったんですね。自分で自分の好きなように生きてこられたと言っていました。

ところが就職活動をする段階になって、履歴書はどんな会社も一発で通るのにすべて一次面接で落ちたそうです。一次面接では面接官が「君は顔が怖いよ」と言われたそうです。彼女は目を見てなかなか話さないので、目を見て話さないのは対人恐怖症なのかと言われたり、面接官は彼女は要するに首席で卒業しているわけですから、面接官をばかにしているのかと言ったり、“偉そうに話すせに、君何だ、その態度は”みたいなことを言われたり。一次面接でだいたい面接官が怒ってしまう。

- ようやく就職した企業で…
- 客あしらいができない
- レジ打つで混乱する
- 一度に多くの用事ができない
- 計算が異常に遅い
(計算障害があることが後でわかる)
- 友達ができない
- 飲み会などにいけない

上司から…
「いい大学を出ているからって、バカにするんじゃない！」
と激怒される。

**またしても、相手の怒りを買ひ、
居場所を失う！**

彼女は、なぜ面接官が怒るかが分からない。結局、こんなに学歴があってもできるはずなのに、何で就職できないんだろうと思って、失意のどん底に陥るんですが、またご両親がいい人なので、ご両親が彼女に、就職先のコネを持ってきて斡旋するんですね。斡旋したところがちょっと大手の流通だったんですが、流通はだいたい1年目はみんな現場に出ますから、レジ打ちとかをやりませうね。ところが今度は客があしらえない。

特に変な客が来ますね、ゴネる客。ゴネる客が来ると、もう彼女はフリーズしちゃうんです、どうしたらいいか分からない。ゴネる客の相手をしながら何とかさんレジ打ってと言われて、はいつてレジに行くけど、ゴネる客もやらないきゃ、レジもやらないきゃと言ってパニックする。この人は後から計算障害があるということが分かるんですが、ものすごい打ち間違いが多い。友達ができない、飲みになど行けない。そうするとだんだんそういうことが続くと、上司というのは彼女よりも年下の高卒の女の子だったんですが、「いい大学を出てるからって、あんた手抜いて仕事してるんじゃないの」と言って、また怒るんですね。

結婚も試練！

- 他人との共同生活が共同
- 相手の顔が覚えられない
- 相手の生活ルールがわからない
- 海外駐在中は夫の職場の上司の怒りを買ってしまう

彼女の場合、いつも理由が分からないのに相手が怒ってしまふ、どうして相手が怒るか自分には分からない。それでも彼女は結婚をするんですね。この結婚もなかなか不思議な結婚で、友達の紹介で知り合うんですが、相手が地方にいたので、遠距離恋愛だったんですね。遠距離恋愛だと相手の顔が覚えられない。だからその人が好きらしいという気持ちがあるんだけど、どうも顔が覚えられないので、毎日彼の写真をこうやってずっと見て勉強したそうです。

ところが写真は動かないですよ。動くとき表情が変わるから、表情が変わると、この人は私の知っている人かしら？ と思って不安になったそうです。そんなことを言っていました。

結婚すると、だんなにはだんなのルールがあって、自分には自分のルールがあるから、今度は共同生活を送るのが困難になる。どうしてこれはここにあって、こっちがここにはないのみたいな。そのぶつかり合いが、もうすごいことになる、というようなことを言っていました。

だんなさんと一緒に海外赴任したときは、地元で翻訳のバイトをしようと思ったわけですね。そうしたら、そのだんなの上司に呼び出されて、うちの会社というのは、奥さんは家にいるものだから、働くのは困るというふうに言われる。ところが彼女はその理屈が分からないし、その場が読めないで、その場で丸く収めるということができず、どうしてですか、私はこういう理由だからこうやりたいんですけど、と、がーっと言ってしまつて、だんなが恥をかくわけですね。

それから今度は、この駐在員同士の付き合いがまったくできなくなってしまうというようなことがありました。今、技術翻訳をずっとやっていたら、それで食っていきたいと思っているんですが、彼女の場合アスペルガーの度合いがそんなにシビアではないという意識はあるんですね。

だから彼女の場合、パニックするとそれが怒るという表現になってしまう。そうすると急にがーっ

と怒って、相手が驚いてしまう。だから営業中に何とか翻訳の仕事がほしいと思って営業をするんだけど、相手のちょっとしたことに引っ掛かって、が一っと怒ってしまっ、自分ではそれがパニックなんだけど、相手はこの人が何で怒ったんだろうと思う。今はそれが彼女の大きな悩みです。私はエージェントを付けろと勧めています。

**シナガワ的支援案：
不登校・リスカの中でもかく、
アヤに筆者が勧めたこと…**

- ①犬を飼い始めた
- ②ウ千の犬の散歩バイトをさせる
- ③落語に行く
- ④自伝(日記)を書かせる
- ⑤英語だけでも勉強を続ける

先ほどの高校1年生で今は不登校になっているアヤちゃんなんですが、結局、彼女が私によく相談をしてきたので、これも何かの縁だろうと思って、今は一緒に友達のような、こんなに年が離れた友達なんて凶々しいんですけど、よく家に来たりするんですね。特に自殺未遂を2回したので、その後いくつか、ちょっとこれは何かアプローチをしなきゃいけないと思って、私が勧めたことがここに書いてあることなんですが、犬を飼うということ。あと私が犬を飼っているの、うちの犬の散歩パイ

トを。結局彼女はまったくバイトができない、私にはもう働く道がないと思っているので、取りあえずうちの犬のバイトをさせるところを今やっています。

犬を飼えと私が言った1つの理由は、自分以外に面倒を見る相手を1つ作った方がいいだろうという単純な理由です。実はお母さんも犬好きだと私は知っていたので、犬は娘と母親の1つの共通の話題になったんですね。そうすると、最初お母さんは、「あんたなんかに犬なんか育てられるわけ

ないでしょう」と言っていたらしいんですが、結果的に、お母さんも犬の面倒を見るということで、何とか1つのキーワードになりつつあるかなと。

でもお母さんは、飼うのはすごく反対だったので、ここで祖母が出てくるんですが、この祖母とお母さんはすごく仲が悪いんですけど、祖母も自分がお金を出したから、自分もちょっとかわいい。結局この家庭は、犬が1つの接着剤になっているんですね。今はすごく一生懸命育てていて、ところが、犬を飼った直後に母親とけんか

して、またこの彼女は手首を切ったので、私は非常に怒って、そういうことをする人は犬を飼う資格はないからと言ったら、さすがに本人も、確かに犬のことを私は忘れていました、とか言って、あんたは犬の母親なんだから、それはだめでしょう、ということを書いて、それからはやっていないです。

①犬を飼い始めた

- これは、自分以外に面倒を見る相手を作らせるのが目的、自殺防止。
- アヤが自分で言い出し、母親は大反対
- でも強行突破(資金は祖母が出した)
- といえ、いまは一生懸命育てている

②ウ千の犬の散歩バイトをさせる

- 「働く場所は必ずある」「働く場所がなければ自分で作れ」を実感させたかった
- 毎週、決まった日に我が家に来るとい習慣づけ(家から出る)

うちの犬のバイトをさせるということは1つには、必ずどこかに働く場所がある、ということを実感させたいな、という気持ちがありました。働く場所がなければ自分で作ればいいという、堀江君ではないですけど、そういう気持ちがちよっとあったのと、あとやっぱり毎週決まった日に家に来るとい、そのルール。彼女は朝起きられないので、私が朝じゃないうちのバイトはさせな

いよと言っていますから、毎朝10時に家に来ると。一応、週に2日とって、なかなか今日も起きられませんでしたと言うんですが、本人はやっぱり来ようと努力している。来るとうちの犬がまた、すごく懐くので、それはそれで結構気持ちがいいみたいなのを言っていました。

落語に行くというのも、これ何でもよかったです、結局彼女の世界が学校と家庭しかないわけですね。サークルもやっていない、習い事もやっていないという状況で、あとネットの中しかない、バーチャルな世界しかない。学校に行かなくて社会はもっと広い、ということを実感に知ってほしいという意味がありました。

1つは、私が前に取材した人で40歳で会社をリストラされて、奥さんに逃げられて子どもにももう会えなくて、行き場がなくなって、落語が全然好きでもなかったのに、いきなり落語家の門をたたいて弟子入りしたという人がいたんですね。

当初、師匠も、その人が驚くぐらいに下手だったので、二つ目も絶対に無理みたいな、一生お掃除して終わりね、とかって思っていたんですが、彼はリストラされて落語家になったというところでちょっと話題性があったので、あるビジネス雑誌が取材したら、リストラの星ということになって、ものすごい講演の依頼が来たんですね。

そうしたらこの人は、どうも僕は期待されているらしいということで、急に落語を頑張るようになって、全然できなかったのがすごく上手になって、今はちゃんと二つ目になれたんですよ。こういう人もいるんだよって、奥さんにも相変わらず会えないし、子どもにも会えないらしいんですが、でもすごく頑張っているということを彼女にちょっと教えたいなと思って、「あの落語家さんはね、40歳でリストラされたんだよ」とかって言うと、「ええ、そうなんですか」というようなことを言っていました。

あとはやっぱり、なかなか笑うという経験をしていないので、何でもいいから笑うといいのかなというふうに思って、今は私が落語に行くときには一緒に行っています。

③落語に行く

- 世の中にはいろんな仕事がある
→学校だけがすべてではない、を体験させたい
- 幸せの基準はいろいろだということを教えたい
(40歳で会社をリストラされて落語家になった人がいたので)
- 笑うことを思い出させたい
- 定期的な家から出る習慣をつけさせたい

④自伝(日記)を書かせる

- 自己表現の練習
- 文章を書くことで、「学校の●●は悪かったけど、▲▲はよかった」「親の●●はいただけないが、▲▲はいいかもしれない」など、自分の人生は本当はそんなに悪いことばかりではないはず、ということを実感させたい
- セルフモニタリングの訓練

日記を書くということは、非常にしんどい経験が多いのでフラッシュバックするからよくないよとおっしゃる方もいたんですが、本人が書きたいというから、じゃあ、書いてごらんと。その文章なら、私は編集者ですから、それはチェックしてあげるよ、というところから始まったことです。

国語の勉強、小論文の勉強というところから実はスタートしているんですが、ところが、その文章を書いていくと学校のあれは悪かったけど、これはよかった。例えば

ほにやら先生は悪かったけど、何とか先生はそういえばよかったとか、そういえばうちの母親はこういうところは嫌だけど、ここはいいかもしれないというのは、わりと客観的に考えるようになったんですね。最近自分の人生はそんなに悪いことじゃないかもしれない、というふうにちょっと言い出していて、個人的にはやっぱり文章を書くというのはすごく意味があるのかなというふうに

思っています。このセルフモニタリングは、まさにそのことです。

⑤英語だけでも続ける

- ・受験のための英語ではなく、社会で生きるための英会話を学ばせたい
- ・働く場は日本だけではなくことを実感させたい

それから、英語だけはやれと私は言っているんですね。1つにはこの子はすごく英語ができたということもあるんですが、働く場所は日本だけではないので、別にそんなに難しい文法は必要ない。これ下さい、何が食べたい、ここに行きたい、という基本的なことさえできればいい。別に働くのは日本だけじゃないんだという意味で今、英語を頑張りなさいというふうに言っています。

ます。

結局、じゃあ彼らのようにしんどくなる前に、私たちに何ができるか、ということなんです。今、すでに大人に、成人になってLD、AD/HD、高機能自閉の人たちの取材をしていて分かること、共通項がいくつかあります。1つは、やはり小学校のときから集団の中で認められていたということなんです。

**彼らのように
辛くなる前に、
我々には
何ができるのか？**

大人のLD・ADHD・高機能自閉症の人たちを取材してわかること①

①小学校のときから、
集団のなかで認められていた

ex:

- ・勉強はできないが、運動(絵・音楽)はできる子
- ・勉強も運動もできないが、面白いことをいう子
- ・小学校では友だちがいなかったが、ボーイスカウト(塾・お絵かき教室)にいけば仲間がいた子

セルフエスティームを
低下させないためには
集団なかで認められることが必要

だからこそ…

- ・教師はクラスの集団作業を
しっかり実践したい
- ・保護者はその子に合う集団(学校
以外の場)を見つけたい

先ほど影山先生も集団ということをすごくおっしゃっていましたが、彼らの話を聞いていて、すごく痛感するのは、親は分かってくれた、先生も分かってくれた、でも友達はいなかったというパターンなんです。それは非常に辛い。結局、大人が分かってくれても、彼らの話を聞いてみると、でも友達がいなかったというのが、やっぱり一番つらいんです。自分と同世代の人たちに分

大人のLD・ADHD・高機能自閉症の人たちを取材してわかること②

②勉強以外のことで、
本人が「ハマるもの」「得意なもの」
「好きなもの」を見つけたい！

スポーツ	漫画	動物	雑学
絵・陶芸	作文	料理	囲碁・将棋
マジック	音楽	弟妹の世話	
折り紙	パソコン	落語	園芸

かってもらえないというのが非常にしんどい。うまくいっている人というのは、やっぱり同世代の中で、何か一目というか、居場所があった。例えば勉強はできないけど絵がうまいとか、勉強も運動もできないけど、面白いギャグを言うやつだとか、小学校には友達がいなくても、スイミングスクールに行ったら友達がいるとか、そういうことですね。

結局、こういう自尊心を低下させないというのは、実

・本人は自分が何に向いているか分かっていないことも多い。
(●●は好きだけど、でも、どうせ自分なんかダメだし…)

だからこそ…

**小・中学生のうちから、
可能な限り、何でも体験させたい！
高校からでも遅くない！！**

は大人が認めるというよりも集団の中で、同世代の中で認められることがすごく必要なのかな、というふうに思っています。だからこそ学校の先生は、今は特別支援教育とって、取り出して授業をするということにすごく熱心なんですけど、それはもちろん大事だと思いますけれども、やっぱり集団の中でその子の位置をちゃんと作るということ。これは大人にこそできることなのかな、と思うんですね。

また保護者にできることというのは、その子に合う場所、もしその子が学校で居場所がなければ、どこかには必ずあるはずなので、そこをやっぱり探すというのが、これは本当に小さいときに親にしかできないことなのかな、と思います。また勉強以外のことで、本人がはまるものとか、得意なものとか、好きなものとか、これはできるかもしれない、とちょっとだけでも思っているものがある、ということです。

ここに書いてある裁縫とか囲碁将棋でも、弟・妹の世話、何でもいいんですね。というのは、結局、よくこういうことがあるんですね。お母さんを取材して、子どもさんを取材すると、お母さんは「うちの子はもう全然だめ、たぶん品川さんの話も分からないかもしれません」とおっしゃるんだけど、子どもに聞くと、僕はずっとこうこうこうで、ああ、お母さんはたぶん分かってないと思いますよ、話したことありませんから、と言う。お母さんがイメージするお子さんの像がやはり過小評価で、子どもの方がすごく冷静に、僕はこれができて、これができないというのが分かっているのかな、という気がします。もちろんすべてがそうだとは言いませんが、そういう場合が多いかな、と。

ただ、多くの場合、何々は好きだけど、でもどうせだめだしと思って、このどうせだめというのが必ずくっついているんですね。だからやっぱりどうせだめというの

をいかに取っていくかというのが実は課題なのかなと思っていて、やっぱりそれは色々な体験させる、やっぱりリアルな体験をさせていくというのがすごく必要なのかなと思っています。

例えば水産高校に行った子は今高1ですが、ディスレクシアでした。なぜこの子がこうかが親も分からなかった、学校の先生はもう全然興味がない、勉強ができないとしか思っていなかったんですが。それで保護者が、とにかく見てみよう、やってみよう、触ってみよう、じゃないですけど、いろいろやっていたんですね。水族館も子どもが興味を小さいときから示していたので、よく行っていたんですね。

そうしたら、いざ受験をするときにどうするかと言ったら、子どもが「お母さん僕は、イルカが好きだから、イルカの調教師になりたい」って、中3の頭にいきなり言い出した。親は、自分の子どもがそんなことを考えているのは微塵も思っていなかった、と言っていました。

ところが子どもは子どもなりにずっと考えていた、でもみんなからお前はだめだ、だめだと、言葉では言われていなくても、そういうメッセージを受け取っていたので、だめかなと言ったそうで

ex:

(中学校)水族館に行く⇒水産高校へ
(小学校)地元の陶芸教室に通う⇒芸術高校へ
(小学校)サッカー⇒体育専修で高校・大学へ
(小学校)パソコン⇒ウエブデザイナーへ
(中学校)絵を描くのが好き⇒商業デザイナーへ
(小学校)テニスが好き⇒テニスのプロコーチ
(中学校)本読が好き⇒ジャズ・ドラマーへ

す。しかも、彼らが住んでいる自治体は海がない自治体なので、水産高校がないんですね。それでお母さんがそれから気合いを入れて調べまくって、それである水産高校に入って、今はもうめっちゃめっちゃ生き生きやっています。

その下の芸術高校というのも、今高校1年生の子なんですが、小学校のときに、やっぱり彼女もディスレクシアで、この子はAD/HDもあるお子さんで、小さいときから全然勉強もできないし、落ち着きもないし、もうだめだめという状況だったんですね。この人の場合はお父さんが非常にいい大学を出ていて、お母さんがいくら、どうもこれらしいのよと言っても、全く興味を示さなかったんですね。

お母さんは、だんなさんの協力が得られないので、取りあえずこの子がやりたいということ、全部やらせようと思います。そうしたら子どもが小学校の3年生のときにいきなり、チラシを持ってきた。そのチラシには、陶芸と書いてあったそうです。でもよく読むと老人向けの陶芸教室だったんですね。あんたは小学校だからこれは行けないわって、でも私は陶芸がやりたいということになって、お母さんが交渉をして陶芸教室に行ったら、実は粘土がすごくうまくいく、ということが分かり、彼女は陶芸家になりたいと言って迷わず芸術高校に行っています。

3番目の子は、今は、実は彼は診断は受けていないんですが、私の本を読んで、これは俺のことだと言っていた人なんですけれども、今ある中堅の会社の社長をやっています。自分で起業をして成功しています。彼は本当に読めない、書けない、しかもいまだに非常に激しい多動があるんですが、サッカーがすごくできて、サッカー推薦で高校に入り、ところが大学にサッカー推薦で入りたいと思ったら、その彼が行きたいと思っていた大学の推薦枠が1つしかなくて、普通は推薦枠なんだから彼からしたら、勉強はできないけど俺は体育ができるんだから入れてくれ、と思っただけなんです。教師が推薦は勉強ができるやつのためにあるんだ、と言いつつ、彼は推薦を取れなかったんですね。それで高3の2学期から、1日2時間の睡眠で猛勉強して、過集中が発揮されたんだと思うんですけど、それである大学の夜間に入って、今は卒業してやっています。

4番目の彼は、早くから自分が普通の社会にはなかなか難しいだろうと思っていて、ネットの中でできないかということ、自分でずっと模索していたんですね。結果的に留学してウェブデザイナーになりたいと言っています。名前を書くのもやっとならなくて、英語なんか全然できない子がウェブデザイナーになりたいという目標ができてから、自分からNOVAに通いたいと言って、とにかくまず会話さえできればということで、今すごく頑張っています。

ほかにもこうやって、絵が描けて、雑誌なんかのデザインをやる人になったりとか、プロテニスコーチになったり、太鼓が好きでジャズドラマーになったりと、色々な可能性は、結局小さいときに何が好きかとか、嫌いかとか、できるかということなのかなというふうに思っています。

・「▲▲は～だから苦手だ」「●●は～だから、うまくできない」と言語化できた。
 ・「手伝ってほしい」「(忘れ物をして)困っている」など支援を頼む方法(言葉)を知っていた。

その今、ウェブデザイナーになりたい子が私にこういうことを言ったんですね。僕はディスレクシアでよかった。というのは僕の友達は今、高校に入ってやりたいことは別はないし、ってみんな言う。みんな「将来はサラリーマン？ でもリストラされてフリーターかな」って言うけど、僕はディスレクシアがあったからこそできな

いことがいっぱいある、だけどできることもあるということも分かっていたから、できることをどうやって生かしたらいいかをずっと考えていた。

大人のLD・ADHD・高機能自閉症の人たち取材してわかること③
③自分に何ができて何ができないか、なんとなくわかっていた！

・できないことに対して、周囲(保護者もしくは教師)から責められてこなかった。
 責められたときは、あとからお互いに話し合っ解決した。大人から謝られることもよくあった。

彼は小学校4年生から不登校だったんですけど、不登校のときに僕はずっとそれを考えて、どうやったら将来食べていけるかを考えていたから、親は僕がディスレクシアだということを悲しむけど、僕はそうは思っていないです、というふうに言っていました。そのことをお母さんに伝えたら、お母さんは息子さんがそんなことを思っているということをまったく思っていなかったの、すごいショックというか、うれしいショックだったと思

いますけど、言っていました。

つまりもう1つ共通することは、自分に何ができて、できないかということをよく分かっているということですね。できないことを周囲から責められてこなかった、でも責められたときに、責めた大人が、あ、あれは俺が悪かったと子どもに謝っているというケースがすごく多いのかなというふうに思います。

だからこそ…
小・中学校の間に、困った状況に陥ったとき、どう説明すればいいのかわ、何と書いて助けてもらえばいいのかわ、フリース等を教え、日ごろから練習しておきたい！

大人のLD・ADHD・高機能自閉症の人たち取材してわかること④
④親以外の、大人の支援者・理解者がいた

保護者や教師とうまくいかなかったとき、塾の先生、近所の人、野球のコーチなど第三の大人が相談相手になったり、支えてくれたりした。

あと何々ができないから助けてくれ、というような頼む方法を知っていると、言語化できると。これは今大人になっている人はみんな共通しているなと思います。だからこそ、やっぱり学齢期の中に困ったときにどうすればいいかと、どうやって人の支援を求めたらいいかというのを、練習させておきたいな、というふうに思います。

実は一番大事なものは、私はこれなのかなと思っていて、それは親と、実はここに担任と入れたいんですけど、親と担任以外の大人の理解者、支援者がいたということです。やっぱり保護者や教師とうまくいかなかったとき、塾の先生とか、近所の人とか、野球のコーチとか、その第三の大人というのがやはり相談相手になったり支えてくれていた。

その第三の大人というのがすごく大事だなと思っていて、そのさっきのアヤちゃんのように、お母さんとアヤちゃんの仲は犬猿なんだけれども、たまたま偶然私がお母さんとも友達で、彼女も知っているから、彼女は私に愚痴を言い、でも私は彼女の愚痴は全部お母さんには言わない。お母さんも娘の愚痴は私に言い、でもお母さんの愚痴も全部は言わない。

だからこそ…
保護者以外の、信頼できる第三の大人とのつながりを作りたい！

・保護者はそのひと連絡を取りながら、子どもの支援に参ればよい(パイプ役)。
 ・子どもも親や教師、医師に言いにくいことを、そのひとに言えたい(ガス抜き役)。

だけど、時々彼女が言い過ぎたときに、「ええ、でもお母さんはそうは思っていないんじゃないの、確認した？」ということを言うわけですね。一つの接点になるのかな

という気が、これは自分の体験からちょっと思っていて、そういうパイプ役になれる人、あるいは親やドクターなんかには言いにくいことを言える、ガス抜きになれる人。子どもというのは、あまり保護者にも担任にも、それからお医者さんにも言わないんですね。

さっきのアヤちゃんなんかは、「あんた、そんなにしんどいんだったら医者に言ったら」と言ったら、「でも先生も忙しいそうなんです」と言うんですよ。「先生はそれでお金をもらっているんだからいいのよ」と言うんだけど、「でも先生も大変そうだから、もうちょっと頑張ります」ってやっぱり言うんですよ。子どもはすごく大人に気をつかうので、そういうときに第三の全然関係のない、いいかげんな立場の人がいるというのは、実はすごく大事なかなと思っています。

もう1つやっぱりすごく思うことは、保護者あるいは学校の先生もそうですけれども、あまり悲観的に見ないように努めてほしいな、ということはずごく感じます。これは子どもたちがみんな言うんですね、僕のせいで両親のけんかがすごく多かった。僕のせいでお母さんがおじいちゃん、おばあちゃんにすごく責められていた。そういうことがすごく子どもに伝わっている。

親は子どもにそういう態度を見せないようにしようってされているんですが、子どもは全部敏感に感じ取っているんですね。感じ取っている子どもには2パターンあって、内向して自分が心の中で傷つくパターンか、あるいは保護者に反発して荒れたりという、外的に出てくる場合かのどちらか。だけど共通しているのは、皆さん心の中でお母さんがああいうふうになっちゃうのは自分のせいだと責めたりしています。

やっぱり誰も悪くないということ、でも誰も悪くないと思いつつも、そうそう発想の転換もできないと思いますので、やはりリラックスしたり楽しんだりするのは大事かなと。

そこでちょっと考えたのは、今皆さんご存じかどうか分からないんですが、去年のベストセラーの9位に入っている幻冬舎から『キッパリ!』という本が出ているんですよ。これはイラストでこうやって『キッパリ!』と書いてあるんですが、これは例えば掃除ができない人は、こういうふうにはやればきっぱり生きていけるわとか、整理整頓ができない人はこういうふうにはやれば3分間で変わりますみたいな、すごくこうきっちり、正しく生きていこうという本なんですけど、そのパロディー本で『ドブプリ!』という本が出たんですね。

これはもうまったく反対の本で、いわゆるだらしな系というか、パジャマに着替えるのが面倒だったらジャージで寝れば、朝起きてからジャージのまんまでラッキーみたいな、そういう本なんです

大人のLD・ADHD・高機能自閉症の人たち取材してわかること

番外！保護者には物事を悲観的に見ないように努めてほしい

「夫婦仲が悪かったり、祖父母から批判されたり、周囲から責められたりしても、その子に主に関わる保護者には、責めたり悲観したいしほいしてほしい」との声多し

子どもは保護者の不安や苛立ち、怒りを敏感に感じ取っている

⇒保護者に反発したり、荒れたり、ひきこもったり、リズカしたいしても、内心では「お母さんが、ああやって怒っているのは、僕のせいだ」と自分を責めていたいする

⇒もちろん、誰も悪くない！でも、どうどう割り切れぬし、腹もくくれぬし発想の転換も難しい…

だからこそ…

保護者にも「リラックスしたり、楽しんだりする時間が必要！」

コツその①
ドゥア!! 的人もたまには悪くない
■ キッパ!! (上大岡トメ) 幻冬社…
もいれれど…
■ ドゥア!! (下久住マサ) 東京漫画社
アンラッキーは幸運の積み立て
心配はしすぎてもしょうがない
泣くのを極力我慢しない
人の顔を見て、ほっとする

コツその②
人間相性もあるんだから…
■ たとえば…
■ 四柱推命は？
■ ホロスコープを描いて、相性を見てもみる
心理占星術という手段
↓
相性を知ることは戦略をつくること

けど。私は個人的には、やっぱり保護者の人には、そういうきっちりやらなきゃと思っている人ほど、実はこういうちょっと力の抜いた、人が見たら、えっ、これはだらしがないじゃないのと思うことも、でも実はちょっと大事なのかな、という気がすごくしています。

これは買うまでもないので、立ち読みをしていただくと、あまりにもくだらなくて結構笑えて、私は自分のバイブルにしようかな、と思っているんですが、でもやっぱりいいことが書いてあるんですね。例えば泣くのは極力我慢しないとか、それは「泣くのは心の栄養」とかって書いてありましたけど、人の顔を見てほっとしようとか、人の顔を見てほっとするというのは、あ、世の中色々な人がいるんだから、私はこのままでもいいわというような、そういうすべてをポジティブに解釈するという本なんですけど、これは業界内ではパクリ本とされていますが、私は結構よくできたいい本だな、と思っている

んですね。

でもそれだけじゃない、やっぱり相性があるので、例えばさっきのアヤちゃんとお母さんは、ホロスコープで見るとめっちゃめっちゃ相性が悪いんですね。

お母さんに「あんたが娘と合わないのは、ほら、あんたは何とか座だけど、彼女は何とか座だからよ」とか言ったら、お母さんが異常に納得していて、そうか、そうだったのかと。だけど相性が悪いから無視するんじゃないで、でも例えば魚座の人だったら、こういうふうにアプローチした方がいいのよ、とかっていうものがあったりするんですね、この心理占星術というやつなんですけれども。

そういう方法で見れば、うまくストレートにはいかないものが、ちょっとアプローチを変えるだけというときに、うまくいったりする。その後その話を彼女に、自分と相性の合わない星座であると言われてる娘のアプローチの仕方を、こういうふうに言うんじゃないで、こういうふうに言ったらいいって書いてあるよ、みたいなことを言って、やってみたらうまくいったわ、というふうなことを言っていたので、別に何でもいいと思うんですよ。要するに相性があるというとき、相性があるということは、やっぱり何らかの統計でもいいし、理屈でもいいと思うんですけど、知っておくということも実は必要なのかな。

これはだから、夫との相性もありますし、学校の先生との相性もあるんですね。だいたい皆さん、ホロスコープだと恋愛しか見ないんですが、ホロスコープは恋愛だけを見るものじゃないんですね。特に学校の先生にアプローチするときに、事前に先生が何座かなというのを知っていて、そのアプローチの仕方をすると、非常に効果的です。

これは私が上司で実践しましたから、間違いありません。特に私の上司、獅子座だった人は、非常によく言えば親分肌なんだけど、悪く言うと非常に部下にとってはしんどいところがあるので、そういうときにはストレートに反対意見を言わないで、1回その上司が言いたいことを、そうです

ねと聞いてから言いなさい、みたいな。これはうまく行きましたよ。(笑) だから、学校の先生には絶対に使えると思いますね。あと嫌な、自分と相性の合わない祖母とかもいいかもしれないですね。

結果的にはみんな何を言うかという、自分に合った勉強法とか、生き延びるコツを教えてください、ということです。理解とか同情をしてくれても、指導してくれる人が本当に少ない。これは勉強するコツを教えてくださいとか。あるいはこのさっきの高校生は、結局通級で字がなかなか読み書きできないんだったら、パソコンを使えばいいと言って、早くからパソコンの指導を受けるんですが、本人は「でも品川さん、社会に出たら読み書きする場面がすごく多い。そのときにいちいちパソコンを出して、パソコンで書いていられないでしょう」と言っていました。最低限のこと、本当に名前を書くとか、住所を書くぐらいは、やっぱりちゃんとできないといけないと自分で思っていると言っていました。

大人のLD・ADHD・高機能自閉症の人たち取材してわかること 番外

番外2 自分に合った勉強方法・生き延びるコツを教えてください

「理解・同情はしてくれても、指導してくれる人が本当に少なかった。僕は理解されたいのではなく、勉強するコツを教えてください」(ADHD)

「通級では字をうまく書けなければPCを使えよと言われてたが、社会では読み書きする場面がすごく多い。小学生時代に最低限のことを叩き込んでほしかった」(LD高校生…今度カナダへ留学)

「作文も書けなければ無理に書かなくてもいいと言われてきた。でも、「できないならやらなくてもいい」は、ダメな自分を強要され、見捨てられた気がして辛かった。アメリカで作文の書き方を学び、自分にも書けたときは本当に嬉しかった」(LD…フロのジャズミュージシャン)

このジャズのミュージシャンはLDの診断は早かったんですが、もうずっと自分はだめだ、どうせできないんだ、自分はばかなんだとずっと思っていたと言っていました。ところが、その太鼓に目覚めて、自分から留学したいと言って、アメリカに留学をして、アメリカで具体的なディスレクシア支援を受けるんですね。それまで書けなかった作文が書けるようになったときに、俺ってできるじゃん、すごくうれしかったとやっぱり言っていましたね。でもこれが、なぜアメリカまで来なきゃできなかったんだらうということですよ。

これは先ほどのアスペルガーの方が言っていたんですが、自分は理解のある集団、非常に居心地のいい集団で育った。けども、社会に出てからのギャップが、やっぱりでかすぎた。やっぱり異集団の中で生き延びる方法というのを知りたかったと。

ディスレクシアの大人の方は、中学校に入ってから英語が——彼の場合は意味が取れるので、結局漢字で何とか対応できたんですが、アルファベットになると、全くできなくなりました。やっぱり後からディスレクシアだと分かった。そうするとそのフォニックスで指導してほしい。ところが中学校の先生で、フォニックスで指導ができる先生がなかなかいないんですね。それは英語を教えているのが英語教育の専門家だけではない、英文科の先

「理解者の多い、自分にとっては居心地のいい場所であったが、社会人になったときのギャップが大きすぎた。異集団の中で生き延びる方法を学ばせてほしかった」(アスペルガー症候群…翻訳家)

生が教えるという背景もあるんですが、やはりそういう指導が僕にあってもよかったんじゃないか、とか言っていました。

**「中学校に入ってから、英語が全くできず、落ち込んだ。小学校のころから、少しずつフォニックスなどを使った英語指導を受けたかった」
(ティスレクシア…大学生)**

■「いじめを見たら、先生がガンとしかってほしかった。子どもはいじめられていることを大人になんか言えないのだから」
■「道徳の教科書も見直してほしい」
(高機能自閉症)

あとこれは、この間ちょうど一昨日取材した高機能自閉の方が言っていたんですけども、そのいじめを受けたときに教師がそのいじめた子をみんなの前が厳しくしかってくると、自分には二度とそういういじめがなかった、と言うんです。自分からなかなかやめてくれとやっぱ言えない、でも誰かその場にいる大人がやっぱ厳しく言ってほしい、でもやっぱ言ってもらえない、それは何とかしてほしいというようなことを言っていました。

あとこれは私もちょっと確認していないんですが、小学校1年生の道徳の教科書で絵があったそうです。机がぐしゃぐしゃで、だらしない格好をしている子どもと、ぴしっとしている子どもがあって、こっちがいい子、というふうに書いてあったと言うんですね。それは僕にとってすごくつらい、僕は整理整頓ができないということを、教科書でだめだと言われているようなものだ、ということすごく言っていて、これはぜひ、もし教科書にそう

いうことが書いてあったら、使うときに悪い教科書だというふうにぜひ言ってほしいなというふうに思いました。

しかも……
財)日本青少年研究所による中学生の意識調査
(2002年11月)では…
「私は自分に大体満足している」
日本…9.4%
アメリカ…53.5% 中国…24.3%
「私はほかの人々に劣らず価値のある人間である」
日本…8.8%
アメリカ…51.8% 中国…49.3%

**セルフ・エスティームが低いのは軽度発達障害を持つ子どもたちだけではない！
つまり、全ての子どもに必要な支援**

結局、でも、今の話というのは何も、その発達障害の人に限った話ではないんですね。これは2002年の11月に、日本青少年研究所が出したデータなんですけど、「私は自分にだいたい満足している」という子どもが日本ではたった9.4%しかいないんですね、10人に1人しか自分に満足していない。アメリカは2人に1人、中国も4人に1人ですね。「私はほかの人々に劣らず価値のある人間である」、日本は8.8%、アメリカは2人に1人、中国もやや2人に1人。これだけ、ほとんどの子どもが自分はだめだと思っているという現状においては、今言ったようなことというのは、すべての子どもに必要なのかな、というふうに考えています。

トム・クルーズにしても、リチャード・ブランソンにしても、真ん中はチャーチルですね。ロビ



トム・クルーズもリチャード・フランソムもチャーチルも障害者?

■ 診断を受けていない大人のなかにもたくさんいる。
 教師・大学教授・学者・新聞記者・内科医・外科医・精神科医・デザイナー・写真家・作家・料理研究家・起業家・建築家・政治家・芸能人・画家・営業職……

障害or生きる力?

ン・ウィリアムス、ジェイミー・オリバー、これはみんなディスレクシアがあったり、AD/HDがあったりする人たちなんですね。じゃあ、彼らは障害者なのかということですよ。

結局今、発達障害者支援法という法律もできて、実際にどうなのかなと。その件については、たぶん高山さんが午後にお話されると思うので、ここには書いていませんが、私は実際に取材したい人たちの中にも、学校の先生も大学の先生も学者も新聞記者もいっぱいいるんですよ、今働いていて、AD/HDもLDもディスレクシアもアスペもある人たちも。

その違いは何か、やっぱり環境なのかなと。ここにはストレス、虐待もいじめも全部入っているかな、というふうに思っています。

だから結局、一人一人の子どもに応じたことをやっていくのかなと。それだけなのかなという気がしています。

それからこれは最後にいつも言うことなんです、保護者の方も学校の先生も当該児童だけではなく、やっぱりその兄弟にもぜひ目を配っていただきたいな、というふうによく思います。というのは、保護者に取材をすると、じゃあ、弟さんはどうですかという、あ、あの子はしっかりしていますから、と皆さんおっしゃるんですね。お姉ちゃんはどうですか、あの子はね、大丈夫なんです、自分でできますから。でも、その兄弟に話を聞くと、だいたいそんなことはないですね、兄弟はすごく我慢して、お母さんが大変だから、私はちゃんとやらなきゃいけないんです、と言って我慢をしている。



目指すは環境調整!!

一人ひとりの子どもによって、ニースは違う。
 決まった答えもマニュアルもない……。
 親子にも教師と生徒の間にも相性はあるし、
 一人の大人にできることに限界もある。

**答えは子ども自身が持っている。
 我々にできることは考え続け、
 行動し続けることだけではないか?**

例えば実際に、お兄ちゃんがAD/HDがあるとき、親が妹のほうは大丈夫と思っていたのに、結局妹が中学から不登校になったりとか、やっぱりひずみは出てくるんですね。5分でもいいから、今はママとあなただけの時間よ、というのがやっぱり必要なのかなと。

あと学校の先生はよく、お前はあの兄貴と違ってしっかりしている、なんていうことを平気でおっしゃるので、ちょっとそれだけはやめてほしいなと。大人だって比較をされたら嫌なんですから、これは子どもも同じかなと

いうふうに思っています。ちょっと時間をオーバーしてしまいました、すみません。どうもありがとうございました。

(司会) どうもありがとうございました。なかなかこういう何ていうんでしょうか、真実の言葉というのを聞く機会というのではなくて、仕事をしていて何かそういう遠慮があって、ここまでは子どもたちも親たちも聞けない話ではなかったかな、というふうに思います。そんなこともあって、ぜひ今回は品川さんにも、この部分話をしていただきたかったというようなところでもあります。

いみじくも前半は、影山さんと品川さん、共に環境調整というのがキーワードになったのかなというふうに思います。午後、昼食を挟んで若干時間が遅れていますので、1時15分から申し訳ないんですが、午後の部を始めたいというふうに思います。各自昼食などを取りながら1時15分には戻ってきてください。1時15分から高山さんに1時間講演をしていただこうと思っております。じゃあ、また1時15分にお会いしましょう。

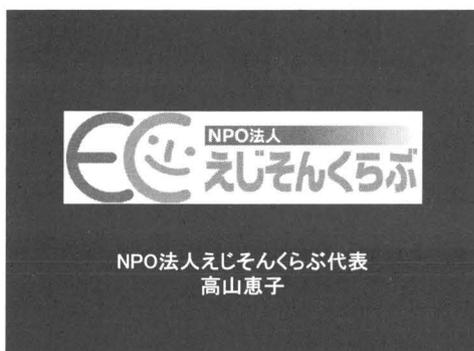
(昼食・休憩)

3. 支援グループの取り組みをとおして

高山恵子 (NPO法人 えじそんくらぶ代表)

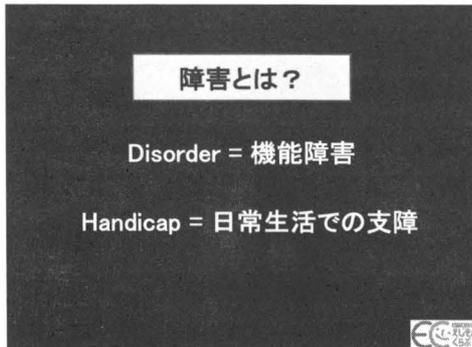
(司会) NPO法人えじそんくらぶ代表の高山恵子さんです。高山恵子さんの略歴は、これもまた皆さんのお手元の1ページ目に書いてあります。AD/HDのある子のカウンセリングと教育を専門としております。様々な児童養護施設、保健所、養護学校などでの臨床に携わる一方で、教育委員会主催の研修会、セミナーの講師などを務め、最近では文部科学省や様々な全国的な、あるいは組織的な会議の委員をなされております。

えじそんくらぶを立ち上げて、ここまで障害、そして障害のある子や、そしてその子の親とかかわっていく中で、ある意味での到達点のような話が聞けるのではないかなというふうに思っています。では1時間、高山さんよろしく願いいたします。



(高山) 皆さん、こんにちは。えじそんくらぶ代表の高山です。今日は、どうぞよろしく願いいたします。えじそんくらぶをご存じの方はどれぐらいいらっしゃいますか、いらっしゃったら、ちょっと手を挙げて。ありがとうございます。多くの方に知っていただいているみたいですが、初めての方もいらっしゃると思いますので、簡単にお話させていただきますが、えじそんくらぶは、発明王のエジソンがAD/HDであったのではないかと以前に言われていますので、プラスのイメージで日本にAD/HDを紹介したいと思って設立した支援団体です。

「イーヨ」という親の会が札幌にもありまして、定期的に活動などを行っています。AD/HDをお持ちの方の支援ということをやってきましたんですけども、その中で本当に大切なのは何かということを感じることがありましたので、今日皆さんとシェアできたらいいなというふうに思います。ではパワーポイントの方に行きたいと思います。

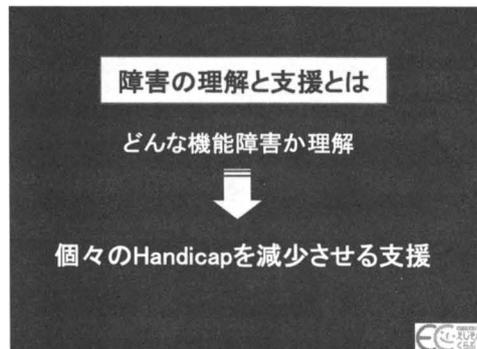


まずAD/HDというと、障害なのか個性なのか分からない、というふうによく言われますよね。私は、えじそんくらぶを設立したときはAD/HDというものを日本にプラスのイメージで紹介したいというふうに思って設立したんですけれども、最近は障害の概念を変えたい、そう思って活動をしています。障害というイメージが悪過ぎるんですよ、差し障りがあって害がある。障害って本当に差し障りがあって害があるのか。これをAD/

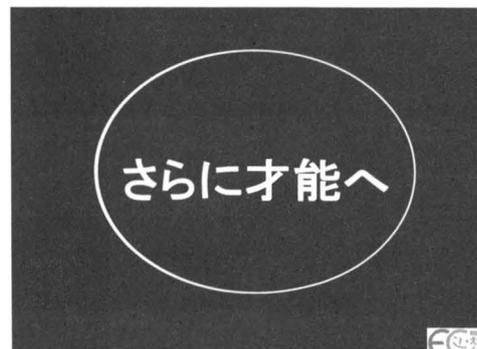
HDというものを通して皆さんとともに考えていただく時間になればいいなというふうに思っています。

AD/HDの「D」はディスオーダー、機能障害ということで何かができない、機能障害がある。多動、不注意、衝動性ということなんですけどね。あと障害といったときに、よくハンデ、ハンデというのがありますが、日常生活で支障をきたすというのがもう1つの障害であるわけなんです。

この2つを分けて考えるということが非常に重要だというふうに考えています。



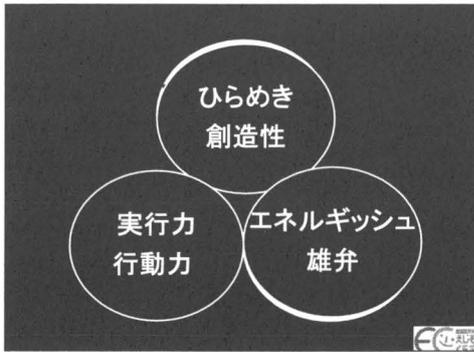
障害の理解と支援というのは、その子が何かできないんですね、大人の場合もありますけれども、障害を持っていたら何かできないことがあるんです。努力してもできない何かがあるんですね。それが何かということを理解して、その日常生活での個々のハンディキャップを減少させる支援、これが理解と支援だというふうに思っています。これは特性ということで、アスペルガーがあったら、こだわりとか、LDであったら認知のところなかなか難しい、というのがあるわけなんですけれども、それが単に努力が足りないということで叱責するとか、そういうことではなく機能障害として、頑張っているんだけどできないという見方をする、これで支援の方法が変わってくるというふうに思います。



AD/HDは理解と支援で個性になるというのをえじそんくらぶのキャッチフレーズにしています。これは本

当にAD/HDだけではなく、障害は理解と支援で個性になる。これがやはりバリアフリー、ノーマライゼーションの基本になる考え方になっていくんじゃないかなというふうに考えています。さらに才能になる、何でもそうですけれども、見方を変えるということが非常に重要です。

例えばAD/HDというふうに診断されて、親御さんはほっとする場合がありますけれども、障害を持った子どもを産んでしまった、この子はそのまま自立ができないんじゃないか、そういうふうに暗い面持ちで生活をするのではなく、プラスに障害を見るということによって、毎日、毎日が楽しくというのはちょっと変ですけど、そんなに絶望的な毎日を送らないようにするということは十分にできるのではないかと。そして、それが非常に重要という考え方を持っています。



この3つがAD/HDの中心的な問題、医学的にいえば症状です。でもこれは見方を変えると1つのことに集中できないからこそひらめくんですね。皆さんもいいアイデアが浮かぶというときは、実は1つのことに集中していないときに起こるわけです。衝動性、これはいいことに使えば実行力であり、行動力であるということですよ。多動なんかいいことあるのかなと思われるかもしれませんが、エネルギー、ズシユ、雄弁ということで、ア

テネオリンピックのゴールドメダリストの中にAD/HDと診断された人がいます。

運動能力の高いAD/HDのお子さんもいますので、そういうところを生かすという視点も大切なんじゃないかなというふうに思います。そういう意味で、同じ脳の回路なんですね。ひらめくというところ、1つのことに集中できない、ということは同じ脳の回路なんです。ある意味同じ機能障害なんです。問題は、日常生活で困らないようにうまくAD/HDと付き合うことが大切なんです。本人はAD/HDとうまく付き合う、周囲は、そのAD/HDのある人とうまく付き合う、その方法をマスターするということが非常に重要なんだろうというふうに思います。

『窓際のトットちゃん』もAD/HDというふうに言われていて、あと坂本竜馬もAD/HDと言われています。この前、高知で記念館に行ってきたんですけども、坂本竜馬の年表のところを読んでみると10歳まで何とおねしょをしていたと。水泳ができなくて乙女お姉さんというスパルタのお姉さんがいて、川で特訓をしたと。それで、寺小屋を途中でやめた、と書いてあるんです。それもけんかをして出て行ってくださいと塾長に言われた、と書いてあるんですね、どこかで聞いたような話ですよ。

だけど明治維新という時代の流れですね、混沌とした時代に、ブレイクスルーをつくった人であるということは間違いのないと思うんですね。ですから障害と呼ばれているものを見方を変えて、それを才能にまで引き上げる、これが非常に重要になってくるんじゃないかなと思います。

この視点は、実は非常に日本では今後重要になってくると思います。今、少子高齢化が問題になっています。何十年後かは4人に1人が65歳になるんです。そうしたら、1人でも多くの子が働けなければ、日本は沈没してしまいます。卒業するまでの間に、その子のいいところを見つけ、伸ばし、自立し、さらに才能を発揮できるように環境因子を作るということは、今時代になくしてはならない発想、そういうふうに言えるんじゃないでしょうか。

教育の目標、在り方というのは時代によって変わってきますよね。今の少子化の時代、1人でも多くの子どもを働く人間にする。これは重要な私たちの課題になると思うんですね。

軽度発達障害の共通の問題

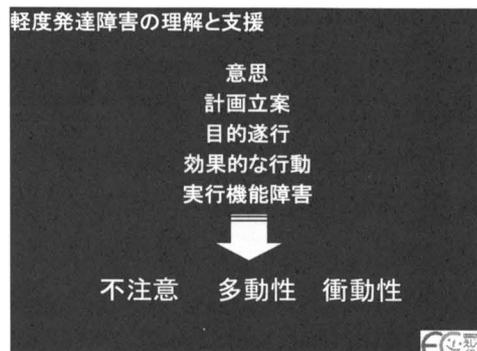
- 見えにくい障害 ⇒ 虐待の誘発
- 能力のアンバランス ⇒ 無理解・いじめ
- 発見の遅れ ⇒ 2次障害の併発

AD/HDだけではなく、LDとか高機能自閉症とかアスペルガーとか言われていますけど、そういうのを含めて軽度発達障害と呼ばれているわけですよ。共通な問題があります、1つ見えにくい障害であるということ。障害があるというのが分からないので、親御さんは親のしつけが悪いといって周囲から責められるんですね。虐

待の誘発因子でもあります、これはもったいないですね。

親子関係がうまくいかないということによって、子どもの自尊心が下がっちゃう。下がったまま小学校1年生のクラスに入ってくる。そこで一生懸命先生が、自尊心を高める言葉がけをしても、もともと下がっていた場合には、なかなかその先生の支援も届かないですよ。ですから保育園、幼稚園の時代からこの見えにくい障害の理解ということが重要になってくるということになると思います。

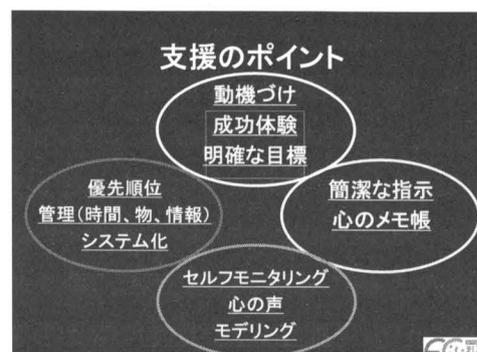
能力のアンバランス、できるところとできないところの差が激しい。これが軽度発達障害の特徴です。できるところは本当に才能と呼ばれるそういう部分であることもあるんですね。音楽的な才能、美術的な才能、発想力、企画力、実行力。ところができないところはダウン症のお子さんができるようなことでも、できないことだってあるということです。これは別に差別的に言っているわけではありません。ただ、ダウン症のお子さんは見て分かる、軽度発達障害は見て分からないんです。



発見の遅れということで二次障害の併発、これがもう本当に問題になってくるわけで、不登校とか引きこもりとかそういう問題になってくるんですよ。ですから、いかに、この二次障害を併発させないようにするか、これがポイントになってくるというふうに思います。

AD/HDの人ができないことというのは、この4つのことだというふうに言われています。強くやろう、という意思が持てないので、動機付けが非常に重要だと言われているんですよ。動機付け、ここのお部屋に教育関係者の方はどれぐらいいらっしゃいますか、手を挙げてください。意外と少ないですね。

やっぱり、やる気というのは、何かを指導するときの基本になるものですよね。そのやる気を上手に引き出してくれた先生に出会えた子どもたちというのは、この自己機能が発達していくんですけども普通の子とは同じにならない。あえてここで普通という言葉を使うわけですが、同年齢の子どもと同じにはなれない、そういうことがあるんですね。計画が立てられない、色々なことがあります。目的を最後までできない。効果的な行動というのは、自分のセルフモニタリングができない。自分が悪いことをやっているということさえも分からない、そういうことなんですね。



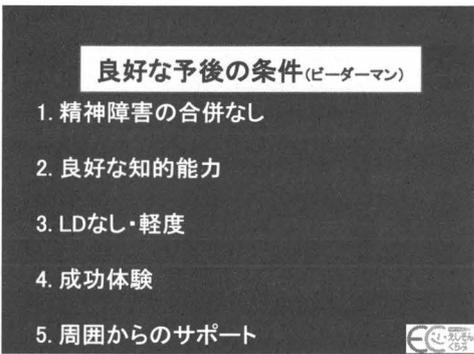
こういうことがうまくいかないので、不注意とか多動とか衝動性がある。表面的には不注意、多動、衝動性なんですけど、中でできないことというのは、本当に個人差があるわけなんですね。支援のポイントは、さっきの4つのところ。支援のポイントということで動機付けというのが非常に重要だだと思います。このようなことが本当に重要になってくるなということで、たくさんの先生方に知っていただきたいと思って講演をしたりとか、そういうところにすごく時間をかけているんですけども、一番大切な支援のポイントというのは、子どもに失敗してもいいん



だよ、と言ってあげることだと思います。失敗するなど言わないこと、失敗してもいいんだよ、これが非常に重要だと思います。

それから誰かに助けを求められる子にする、これが重要だと思います。助けを求められなくて、自分で苦労をしてしまう、障害があればできないことがあります。それを理解して上手に助けを求めるといことが非常に重要なんですね。

このところはあまり詳しくお話ししないんですけど、「僕たちのサポーターになって」の2というところはかなり詳しく書きました。ちょっとしたポイントでどんどんその子たちは伸びていくので、やっぱり子どもたちが輝いていく、という瞬間を見るということが、逆に支援者の動機付けになるということがあるんじゃないかなと思います。



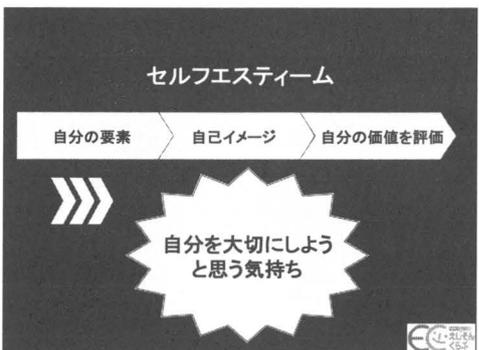
ところがうまくいかない。それは、そのできないということが、努力が足りないという見方をしてしまう、そして自信喪失になってしまうということなんですよ。これはちょっとダブリで2つ入ってしまったんですけども、アメリカのビーダーマンという博士がAD/HDの人で、良好な予後というと何か本当、病気みたいな感じ

ですけど、一応そういうふう書いてあったので、良好な予後の条件というのを追跡調査してみたんですね。

精神障害の合併がない場合、鬱とかがないということですね。良好な知的能力、あとLDがないか、軽度である。このところは個人のところで変えられない部分というのも一部あります。精神障害は環境によって、そういうものが二次的に出てくる場合もあるし、気質的にちょっとそういうものを持っているという場合もあるので、どちらともいえないんですけども、ポイントは4と5ですよ。これがあるかないかで、その人の人生は変わっていくということです。これってAD/HDだけじゃないですよ、みんなに大切なことじゃないかなというふうに思います。

ですから、いかに成功体験を体験できる環境を整えてあげるか。周囲からサポートを上手に受けられる子に育てるか、そこがポイントになってくるんじゃないかなというふうに思います。

私はセルフエスティーム (Self-Esteem) という言葉をよく使います。私たちには色々な要素があるわけですよ。そして障害、こういうもので自己イメージというものができます。この自己イメージがやっぱり学校で傷つきやすい。特に人前で叱責されるということで非常に屈辱を受けるわけですよ。



やはり色々なところで接している間に、この人はAD/HDだろうな、と思えるような人で、結構活躍している人がいるんですよ。その人に「忘れ物多かった?」とか聞くんですよ、興味津々で。「多かったよ。でも

別に忘れ物なんてどうっていうことなかったよ、借りればいいじゃない」とかって、そういうふう
に言えている人は予後がいいんです、本当に。「忘れたら借りればいいじゃない、ただ、叱られたり
立たされたりしたけど、気にしなかったね」とか言って、ああ、そうですかとか、そういう感じ
なんですよ。

だから障害という感じで私たちが小さかったころ、AD/HDと言われた人はどこにもいなかった
んです。でも5%いるんですからね。今、成人になっている人だっているんです。どこかでサバ
イバルしているんですね。その技を自分で見つけたか、サポーターがいたか、その両方か。残
念ながら自分で見つけられない、サポーターがいない。そういう場合に二次障害になって出るとい
うことが起こってしまうのかな、という感じですね。

それでこの自己イメージというのが非常に大切ですよね。集団の中で恥をかかせない、そういう
ことですよ。自分で自分の価値を評価するわけですね。だめな人間だとか思っちゃうんです。み
んなに迷惑を掛けているし、と。忘れるということがすごく困る、治さなきゃ、と思って、びし
しと行くのもいいけれども、そうじゃなくて忘れることってあるよねっていう感覚をみんなが持つ。

じゃあ、どうしたらいい？ そこまでセットで考える、これがポイントなのかな、というふう
に思うんですよね。だから私にとってハプニングがないのがハプニングという感じで、毎日色々な
ことが起こるんですけど、そういうのは対処するところまでがセットになっているみたいだね。だ
から急に台風で新幹線が動かないとか、飛行機が飛ばないとかと言っても全然大丈夫、もう堂々と対
処ができる。それは結構、遅刻して乗り遅れたりしているからなんですね。

本当にだから、そういう考え方というか、それで大切なのは落語がいいんじゃないかというの
はありましたけど、自分のミスを笑えるということは、実は非常に重要なことなんですね。私はこ
うミスしちゃった、ばかだよ、はははって笑っちゃう。そうするとそれ以上言わないみたい
だね。そういう子どもにやはり育ててあげるということは非常に重要なことなんじゃないかなとい
う

ふうに実体験の中から思うわけなんですね。これは押し
ていいのか悪いのか、というのが悩むところです。

セルフエスティームを高めることがすごく重要だとい
うことで、色々な活動をしているわけですが、やはり人格と行動を分けるということが非常に重要
ですね。やはり問題行動は絶対にあるんですよ。その行動が悪い
と、行動が場にそぐわないとか、あなたにとってプラス
の行動ではないということはちゃんと教えてあげた方が
いいんですね、分かっていないから。だけどそのときに

セルフエスティームを高めるために

1. 人格と行動の分離(ありのままの受容)
2. 誰も責めない(自責の予防)
3. 成功体験(長所・課題の設定)
4. 自己実現に向けて(ボラ・係り活動)



お前は人間のくずだとか、何をやってもだめだとか、あとはこんなことは猿でもできる。そういう
ふうになんて言われて傷ついたAD/HDの成人の方がいるんですね。

それは支援にならない。だめなところがどういうところかって結構分かっていないんですよ。
だから、モデルになる行動を見せて、何が問題なのかを伝える、この大切なことを叱責だけして忘
れちゃってる、そういうことも結構あるんじゃないかなというふうに思います。

それで責めるというのは、いいことがないんですね。子どもを責める、親を責める、先生を責め
る、世間を責める、教育委員会を責める、これは何の役にも立たない。それは本当にそういうふう

に思うんですね。それよりも何か1つ行動を起こす、これが非常に重要なことというふうに思います。

えじそんくらぶは、あまり要望書とか署名活動とかというのはあまり好きじゃない。そんなことをする間に子どもはどんどん二次障害になって脱落していくということがあるので、指導者養成講座という形で、指導者を1人でも多く輩出したいと思ってやっていたんですね。その中に影山さんがいたわけなんです。もう本当にえじそんくらぶの誇りですね、こういう方が指導者養成講座の中から出たということは。

ですから本当に行動を起こすということが非常に重要になってくるんじゃないかな、と思います。成功体験を増やしてあげる。そして自己実現に向けて、ボランティアとか係活動、やはりテーク・アンド・テークだとだめなんですね、キブ・アンド・テーク、自分も何か人のためになっている、この感覚が大切です。そういう環境に出会えた子というのは、やはり自立ができるんじゃないかなというふうに思います。

二次的問題の要因

1. カリスマティックアダルトの不在
2. 強い自責・他責
3. 目標・モデルの不在
4. 不十分な家族、地域の理解

品川さんのお話にも出たんですけども、第三の人物の存在、それが非常に重要だということですよ。カリスマティック・アダルト (charismatic adult) というふうにアメリカで言った先生がいるんですけど、見本になる人、モデルになる人、あこがれの存在、こういう存在が非常に重要ですね。その人は受容だけしているわけじゃない、だめなところはだめだと言ってくれる。それはいい関係性を保てた後、だめなところはだめだとちゃんと

言うてくれる、そういう人が重要だと思いますね。

こういう人に出会えたら、やはり二次的な問題は少なくなるんですね。動機付けのところでは明確な目標がある、ということは本当に重要なことになってくるんですね。思春期以降、やはり将来何になりたいとか、そういうものを見つけてあげる手助けをする、これが本当に重要になってくるかなと思います。あと強い自責と強い他責、これはもう本当に鬱の方に行ってしまうたり、あとは行動化してしまったり。ここのところで非常に重要になってくるのは、共感をすることと、感情の言語化、これが非常に重要になってくるというふうに思います。

AD/HDという行動療法ということで、感情は横に置いておいてというのが普通の本に書いてある支援なんですけれども、私はこれが非常に重要だというふうにずっと思ってきました。そして今、ブラウン博士が6つの実行機能ということで、新しいAD/HDの実行機能の定義を出しているんですけど、その中の1つに感情という部分が出てきたんですね。感情のコントロールもできない、これが実行機能の障害の本体であるというふうに言われたきた。

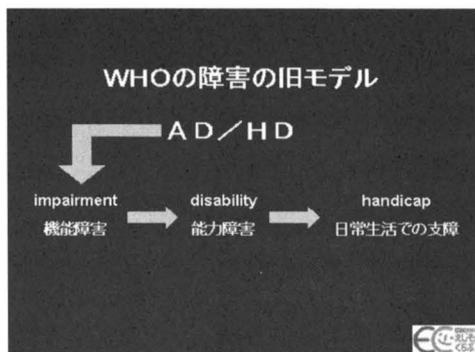
ここのところを上手にコントロールできる方法を身につける、これも非常に重要になってくるわけですね。そういう意味では、目標モデルが不在であるということ。あとは十分な家族、地域の理解、これが本当に重要ですよ。学校では問題児という形で居場所がないと思っても、例えば、太鼓が上手でお祭りではりきって、そこでヒーローになる、そういう場が地域にあれば、それはそれで子どもの集団意欲というんですかね、セルフエスティームは高まる、という自分に価値を見出すことができるわけですね。

やっぱり親御さんは疲れちゃっているんですね。ですから地域力を高めるということも本当に大

切なことなんじゃないかな、と思うんです。それもちょっとしたことでいいんですよ。「あいさつが元気だね」そういうふうに言うと、AD/HDの子は毎日でもあいさつをするようになるんですね。ちょっと離れた立場の人から褒められるということで、素直にそれを聞き入れることができる、ということもちょっとした特徴かもしれないですね。

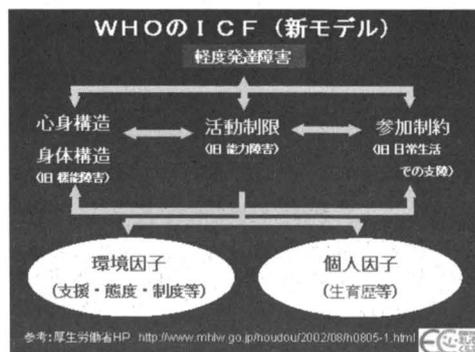
私は、障害の概念を変えたい、ということを常々思って活動をしています。これが昔のモデルで一方通行のモデルだったんですね。その人に何か障害がある、AD/HDがある、鬱がある、LDがある、だから機能障害があって、だから色々な能力障害が出て日常生活で困る、その人が悪いみたい。でもそれを持っているから、もう日常生活で支障があるのは当たり前みたいなモデルですよ、これが変わったんですね。

WHOのICF (International Classification of Functioning) のモデルということですが、軽度発達障害を持っているお子さん、親御さんを支援するときに、このモデルは絶対に必要です。このモデルを知っていて支援をするかしないかで、支援の質が変わってきます。このモデルという



のは、色々な特徴があるんですけども、どういうところが先ほどのモデルと比べて違うのでしょうか。

1つは相互モデルになったことです、一方通行じゃないということです。だから先に参加制約というところで何か問題が出てきちゃう、そして活動の制限が出てくる、学校の場合ですね。活動のところは学習だったり、対人関係だったり、そういうことですね。不登校という形で、先に参加制約が出てきちゃって、もともと健康で病気も何もないのに、帰国子女なんかはそうですよね。1週間で白髪になっちゃう、そういうお子さんもいます。いじめです、いじめ。そういうことによって病気をつくられちゃう、環境によって障害がつくられる、そういうことをいったモデルなんですね。



これをAD/HDに当てはめてみますと、AD/HDが軽度なほど活動とか参加のところに制約が出てこないで分かりにくいんですよ。ここで、非常に皮肉な結果が出ているんです。重度の方が支援が受けられやすい、

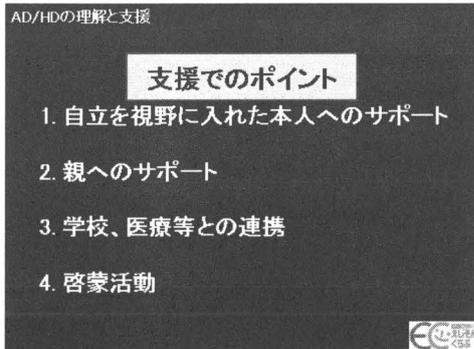
分かるから何とかしなきゃ、とみんなが思う。ところが、軽度だったり傾向だったりすると、あなたの努力が足りないということで、よく学校で言われるんです。障害名が付いていないから支援はできません、それで二次障害になっちゃって先生が徹夜をするようになってっちゃうんですね。

ですから、予防的な対応という観点が、非常に重要であるということです。特別支援教育のところで、例えば数学、算数とか国語の漢字を書けるようにしよう、とかっていうのは活動のところですよ。そういうのをべったり支援の先生が付くということによって、その子のセルフエスティームが下がったり、クラスで逆に居場所がなくなっちゃう。代わりの先生がついた日だけ学校に来なくなっちゃう、という例もあるんですね。それはもう参加のところを考えていないということです。

ですから、特別支援教育は上手にやらないと逆に障害をつくっちゃうという、そういうことにも

なりかねないということになるんですね。環境因子というのは本当に重要なものだと思います。個人因子は生育歴、ここに虐待があるかないか。それから性格が内向的か外向的か、性別、『片づけられない女たち』という本が出ましたけれども、それは女性のAD/HDの話ですけれども、『片づけられない男たち』という本は出ないんですね。もう片づけられなくてもいいよという、そういう社会的な通念があるからです。

そうすると女性のAD/HDの方が片づけられないということで責められやすいし、自責的になるということになります。二次障害の出方も変わってきます。自責が強い性格であれば、リストカットとか、そういう方に行きますし、他責が強ければ行動化するということになってしまうわけですね。



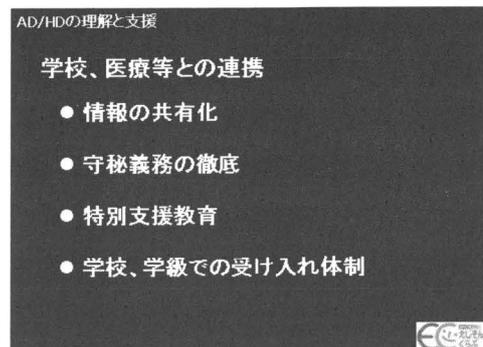
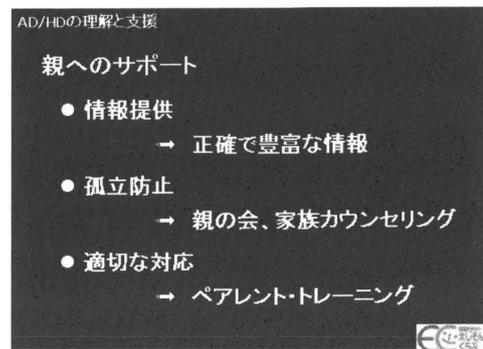
支援でのポイントは、これは自立を視野に入れた本人へのサポート、これが重要ですね。ですから福祉モデルじゃなくて教育モデルであるべきというふうに考えます。親へのサポート、そして連携と啓発活動、というのが重要になってくるというふうに思います。

親へのサポートというのは、非常に重要ですね。ペアレント・トレーニングということでAD/HDをお持ちの、お子さんのためのペアレント・トレーニングをずっとやってきましたけれども、遅過ぎるというのを実感し

ています。診断名が付いてからのペアレント・トレーニングは遅過ぎる、もっと早くやらなければいけない、そういうふうなことを最近つくづく感じています。

これが、特別支援教育のところで今後も重要になってくる場所ですね。色々なセミナーもたくさんあると思います。啓発活動ということで、まず知ってもらい、ということが非常に重要だという考え方から、えじそんくらぶでは田中先生のご協力を得て、こういう冊子を作りました（実力を出しきれない子どもたち—AD/HDの理解と支援のために—）。これはコピーフリーです。このまま開いて両面コピーしていただいて、折っていただくと冊子ができるようになっています。製本をしていないので、たくさんの方にコピーしていただきたいと思って、コピーしやすいようになっていますので、ぜひ色々ところで使っていただきたいな、と思います。

ボランティアの育成ということですがけれども、ここで実は、いい副産物がありました。不登校の子がえじそんくらぶで、AD/HDを持った子たちのサポートをしてくれたんですね。そこでセルフエスティームが高まり、不登校をやめて大検を受けて、「僕は学校の先生になる」そういうふうに言った子がいたんです。ですから、人のために役に立つ、こういう体験をさせてあげるとい



とは、色々な意味で、非常に重要なんじゃないかなと思います。

そうなってくると、やはりボランティアの先でもICFモデルとか、こういう軽度発達障害ということを知っていただく、ということが重要になってきますよね。これからは専門家だけが知っているという時代ではなく、みんなが知っている、そういうふうな活動をするということが、やっぱりえじそんくらすの使命なのかなというふうに感じています。

今後の課題ということですけど、親の会の運営が非常に難しいです。これはやはり、親御さんたちも軽度発達障害を抱えているということがあるんですね。非常に難しい、ですからやはり専門家にサポートをしていただきたいなというふうにすごく思います。それから地域格差が大きくなってきています。スーパーティーチャーがいたり、スーパー何とかという人がいるところはがーっと伸びる。だけどそういう人がいないところは、AD/H Dって何？ という状態がいまだに起こっています。

校長先生でもすごい差があります。それから障害への偏見、差別化。AD/HDって脳障害なんでしょう。この障害という言葉をやっぴりイメージを変える必要がありますね。そうじゃないと、やはり障害受容というのがなかなか難しい。それから専門家が少な過ぎる。専門家がバーン・アウトし始めている、これが問題ですよ。やはり1人でも多くのサポーターを育成するということが重要になってくるわけですね。

段階的なペアレントトレーニング
(指導者養成: 1回~10回)

- 一般向け (児童館・公民館・保育園・幼稚園・学校)
- 子育てに悩む親支援 (学童・子育て支援センター)
- グレーゾーンのお子さんの親支援 (保健所・保健センター)
- 診断名のあるお子さんの親支援 (精神保健センター・大学・病院)



色々なことをやっているわけですけども、今、私が熱中してやっているのは段階的なペアレント・トレーニングです。1つは一般向けです。公民館、児童館で1回の場合もありますし、4回の講師もあります、一般向けにやります。結局、AD/HDの子の対応に大切なことというのは、一般の子どもたちにも十分使えるノウハウであるということなんですね。

一番新しいものは、実は古いものだったりするわけです。まさに、このペアレント・トレーニングの中でやっていることというのは、やはり人格を傷つけないこととか、受容をすることとか、その子に恥をかかせないこととか、当たり前なことなんです。これができるか、できないかというところ。あとは子育てに悩む親御さん、だんだんにちょっとグレーに近づいてくるわけですけど、この一般向けも実は非常に大切ですね。この人たちはサポーターになる、そういう集団です。

つまり、クラスでの保護者になるんですよ。誰かクラスでAD/HDと診断された人がいる。そのときに保護者会で理解してくれる親御さんたちをつくる、大切な環境因子です。だから、必ず

AD/HDの理解と支援

啓発活動

- 小冊子発行
- 講演会・シンポジウムの開催
- 指導者養成講座
- ボランティア育成



今後の課題

- 親の会の運営
- 地域格差
- 障害への偏見、差別化
- 専門家のバーンアウト



これを入れます。皆さんも子育てで苦しんでいると思いますけど、もっと苦しんでいるお母さんたちもいるんですね、という話をして、LD(高機能自閉症)とAD/HDの話はするようにするんですね。

そうすると、そういう人がお友達の中で出たらサポートをしてあげたい、というふうに感想文に書いてくれる。自分の子どもがAD/HDの子に怪我させられたという、そういう被害者、加害者という段階になってからでは、理解と支援を求めにくいです、もう感情的になっているから。だからいかに早く入れるか。3歳児健診とか、1歳半健診とか、そういうところでこういうものを配布していただく、ということが重要になってくるかな、というふうに思います。

あとは、グレーゾーンのお子さんということで、診断名が付かないお子さん、それを今は放置している状態なんですよ、様子を見ましよう。それって、悪化するのを待ちましよう、ということですよ。AD/HDという診断名が付くためには、日常生活で支障がないとAD/HDという診断名が付かないんですよ。だから悪化するのを待っていて、診断名が付くまで放っておきましよう、という状態が今起きている。

ペアレントトレーニングのポイント

- 託児(集団での行動観察)
- スキル&話し合い(親のネットワーク構築)
- 自己理解&社会性(グループワーク)
- 継続的な支援(関係機関のスタッフの研修)

ここでやっぱりペアレント・トレーニングが非常に重要です。このペアレント・トレーニングだけで構造化された中で親子関係がうまくいって、多動が治まってきて、本当に診断名が付かない元気のいい子のレベルでとどまる子どもたくさんいるわけです。まさに理解と支援でここは個性になるレベルです。そして診断名のあるお子さんということで、これはもう診断名があるので、インストラクターがだんだん下になるにつれて難しいんですよ。お母さんの鬱が入ってきたり、色々な葛藤があったり。

でも一般向けは、ちょっとセンスのいい先生、保育士さんだったらできるんですね。ですからどんどんやっていただきたいと思います。私がペアレント・トレーニングを今、一般向けからこの4つのパターンで、えいそんくらぶではやっているんですけども、そこに必ず専門家を10人ぐらい入れます。その人たちが、次には自分で講座が開けるように、サポーターの育成もかねたペアレント・トレーニングをやっています。

私が1人でペアレント・トレーニングをやっても限界がありますから、ペアレント・トレーニングができる人を増やさないといけない。そのときに一般向けからやっていただく。基本は同じです。ただ、お母さんの健康度が高い人からやった方が簡単にできる。その中で色々な体験する、インストラクターも体験するというので、より難しいお母様のグループになっていく、そういう方がいいんじゃないかと思います。

最初からAD/HDの診断名が付いた、もうちょっと二次障害が入っちゃって、お母様も鬱が入ってというところのペアレント・トレーニングのインストラクターは難しいです。これは下手にやっちゃうと、ペアレント・トレーニングに行かない方がよかったということにもちょっとなりかねないときがあるので、非常にちょっと難しいところがありますね。でも一般向けはちょっとセンスのいい方はできるので、ぜひやっていただきたいなというふうに思っています。

今、えいそんくらぶでは子育て基金をいただいて、ビデオを作ったりしてマニュアルを作るとい

うところも一生懸命やって、今は学研さんと組んでそういうものも作っていききたいな、というふうに思っています。これが環境因子を変えることになるわけですね。実際にペアレント・トレーニングでのポイントは託児を付ける、ということです。よくお母さんに言うんですけど、私の話を聞きに来なくてもいいから、子どもと分離してそこで寝ててもいいんだよ、と言うわけです。それで子どもと離れて自分を見つめ直す時間を持つ、それだけでもいいわけですね。

あとはスキルを教えるだけではなく、グループ・ディスカッションというのに重点を置きます。共感し合う、つまり井戸端会議の場所を提供する、ということですね。そこにファシリテーターという形で、支援者が各グループに入って、その方たちが将来的にはインストラクターになるような、そういうプログラムになっています。

あとは最近入れるのは親御さんのストレス・マネジメントをペアトレの中に入れます。これが実は非常に大切なんです。褒めなきゃいけないことは分かっているけど、できない。なぜか、お母さんがストレスがあるから。そのストレス・マネジメントをする方法、それをプログラムの中に入れる、これがやはり重要になってきていますね。

それは結局、お母さんの自己理解であると。あとは社会性、お母さんが社会性を見本にならない場合が実はあったりして、それに気がついていない。だから子どものモデルにならない、そういう気付きですね。あとは虐待の連鎖といわれていますけれども、自分が褒められない親に育てられた、だから褒められないという、そういう気づき。そういう色々なものの中に組み込んだペアレント・トレーニングになっています。

キーワード1
障害受容
 …自分の弱点や「ちがいを」理解し自分を追いつめない
 どう告知するか
 ➡ **自己理解・自己受容**

これは障害名を付けないで支援するということが本当に重要だというふうに私は思っています。自己理解、自己受容、これをなくして障害受容はあり得ないですね。自分が何が不得意か、そしてそういう不得意である自分を許せるというんですかね、それがないと先に進めないんですね。これが非常に重要で、これは自立をするときに重要なんです。できないことは人に頼む、頼んでいいんだと。そして、できないということで自分を責めない、そこがすごく大切なことになってくるんじゃないかなというふうに思います。

キーワード2
虐待防止
 …家族をサポートするシステムが不可欠である
 どう支援するか
 ➡ **連携・啓発活動**

どうしても虐待が誘発因子になるんですね。ここで非常にやはり重要なのは、母親を追い詰めちゃっているんですね。母親を支援するシステムというのが本当に大切なんです。ペアレント・トレーニングということで、どういうふうなかかわり方をしましょうとかというふうに正当論を話しますよね。そうするとお母様の中には打ちひしがれて帰っちゃるお母さんがいるんですよ。こんな

のでできない、あ、これ全部やっていなかった、私はだめな親だと、それだったら意味がないですね。講演会の意味がない。ですから、いかに自責の念を持たないようなペアトレができるか。これがポイントになってくるわけですね。

キーワード3

特別支援教育

…「ちがう」プログラムを普通
クラスで実施するのは難しい

どうクラスが受け入れるか

⇒ ソーシャルスキル



特別支援教育はうまくいくかどうかというのは、クラスで子どもたちがみんな違って、みんないいという感覚を持てるかどうか、ここにキーポイントがあります。逆に言えば特別支援教育がなくても、違っている、みんな違っているんだ、助け合おうというクラスづくりができているところはうまくいくんですね。色々ところで講演会をさせていただいているんですけども、感想文を書いていただくときに、先生の中には、自分のやっていたことが間違っていないということが今日分かってよかったという先生もいます、そういう方もいらっしゃるんですね。

そういう方は、みんな共通して言うことは、特別なことはやっていないというんですよ。教師として、人間として普通のことをやっている、というんですよね。特別支援教育、特別支援教育と言っている人の方が逆にその理念のところに分かっていないみたいな。品川さんの話で某学会の会員の方がそうであったという例があるわけですけども、これはやっぱりスキルじゃないんですよね。どうしたらやっぱり行動を変えていけるか。これは、スキルはみんな分かるんですよ。でもできない、ここがブレイクスルーなんです。

そういう方は、みんな共通して言うことは、特別なことはやっていないというんですよ。教師として、人間として普通のことをやっている、というんですよね。特別支援教育、特別支援教育と言っている人の方が逆にその理念のところに分かっていないみたいな。品川さんの話で某学会の会員の方がそうであったという例があるわけですけども、これはやっぱりスキルじゃないんですよね。どうしたらやっぱり行動を変えていけるか。これは、スキルはみんな分かるんですよ。でもできない、ここがブレイクスルーなんです。

発達障害者支援法というのが今年の12月に成立しました。議員さんの前でAD/HDの説明を私も何回かさせていただきました。必ず言うのは坂本竜馬とチャーチルが、このあれだということを使うんですね。そうすると、みんながふっと見る、それから5%いるという、みんなふっと見るみたいな、そういうのがあるんですけど、5分間ぐらいしか話す時間がないので、いかに印象的にちゃんと聞いてくれるか、まず注目をさせるということが大切です。

それは、もうAD/HDの子どもたちのかかわり合いの中で、もう本当に一番の基本ですね。まず注目をさせるということですよ、インプットをするということ。そこで本当にすごく思うんですけど、結構議員の方に、僕は多動だったとか、授業中縛りつけられていたとか、そういう方とか結構いらっしゃるんですよ。本当に5%ですから、どこにでもいるという感じですよ。ただ、それに気がついていないということ。

キーワード4

発達障害者支援法

…「ちがいに」を受け入れる
社会と個人の意識改革

どうバリアフリーをすすめるか

⇒ ICFの概念の理解



だから、障害の概念をやはり変えるということが大切であり、この発達障害者支援法をつくることによって、初めてAD/HDというのが障害と認定された、ということなんです。だから私は堂々と障害者になったということなんですけどね。でもね、何かやっぱり障害者という感覚がなじめないんですね。これはやっぱり障害も1つの違いとして受け入れる、その社会と個人の意識改革がないと、これはもう、差別をつくるだけの支援法になってしまうというふうに考えます。

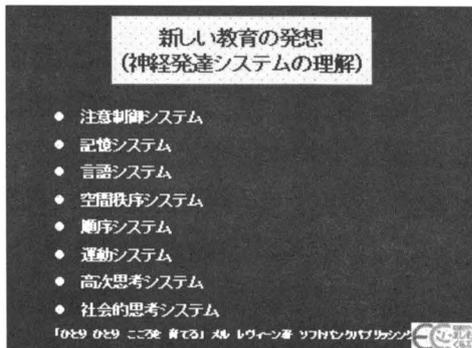
そこでやっぱり重要になってくるのが、ICFのモデルです。環境が障害をつくることもあるんだよということ。それからICFのモデルというのは、参加と活動のところに支障を来すと、それはみんな障害を持っているという考え方になったんですね。だから障害を持っているという人が何

パーセントとかという話ではなくて、1人で活動と参加に制約を持っている赤ちゃん、これはみんな障害児だということです。

私たちは、年とともに一つ一つできないことが増えてきます。私は最近老眼があるんですけどね。障害が増えてくるんですよ。障害者にみんななっていくんですね。ICFのモデルというのは、みんな障害児であったし、これからみんな障害になっていくというモデルでもあるんです。その中間で慢性的に障害者であり、一時的に骨折とかで障害を持つようになったり、そういう人もいますよ、ということになったんですね。障害は特別なものという発想を捨てることが重要だと思います。

障害のあるなしは関係ない、環境因子、個人因子によって参加と活動に制約があったら、それはみんな障害を持っていることになるということです。そうすると妊婦さんも障害者ということですね、走れないですからね、支援が必要、そういうことになるわけですね。逆に、例えば、足がご不自由な方がいたとします。そのときに車いすがあり、スロープがあり、車いすを押してくれる人がいたら、日常生活では困らないですよ、それは障害は個性になるということです。

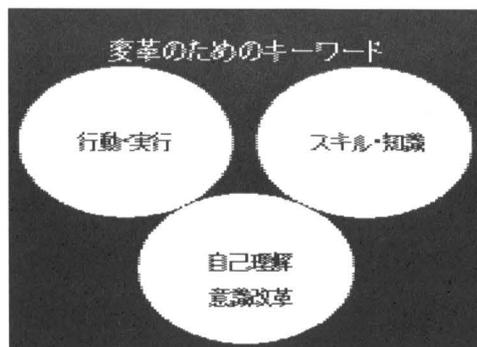
ですから障害は、理解と支援で個性になる、ということを私はずっと言ってきたわけですけども、WHOのICFのモデルがそれを裏付けてくれているということになって、時代の流れかなというふうに思います。



メル・レヴィーンという小児科の先生が新しい発想をアメリカの教育界に入れました。それはAD/HDとか、LDとか、アスペルガーとかという障害名は意味があるのかと。重なって持っている場合もあるし、途中で状態像も変わるし、そういう障害名を付けてどうこうというのではなく、この8つのシステム、ここにみんなそれぞれアンバランスがある。そして、アンバランスのあるところをどうサポートし、そして得意な部分をどう伸ばすか、こういう教育の発想に変えようというふうに提唱を

して、ニューヨーク州のどこか、ある群(カウnty)はこれを採用して教育委員会で、これで行きましょう、というふうにやったわけなんですね。この発想が重要ですよ。

AD/HDという診断名がつかないから支援はしない、これはおかしいです。逆に診断名がつかない子ほど、二次障害になりやすいんです。周りが普通を求めて、本人も普通を求めるから。そのところの視点というのが非常に重要になってくるんじゃないかな、と思います。今、スキルとか知識とかというのは多くの方がもう持ち始めたんです、研修も増えているし。えじそんくらぶを設立したころは、AD/HDに関する本はなかったですね。



出版社に言っても出してくれなかったからえじそんくらぶで出そうか、という話で出したわけですからね。今は本屋さんいっぱいあります。それは売れるということが分かったから、本屋さん、出版社も出すようになったんですね。

スキルと知識というのは充滿しているんです。だけど行動に移せない、実行できない、なぜでしょう？ それ

は、一人一人の在り方、意識改革ができるかどうか、見方を変えるかどうか、そういうことになるんだと思うんですね。例えば、みんな違って、みんないい、誰でもそう思う。知識としてインプットされる。だけどそういうことを行動に移せない。それは本当に意識改革のところでそう思っていない、そういうものがある。違うという言葉、同じじゃないという意味ですよ。だけど間違っているという違う概念が日本の中には入っているんです。つまり日本の価値観として、環境因子として、文化として、違っていているものは間違っている、そういうニュアンスがあるということなんですね。

見方を変えとか、それから恥をかかせない支援をする、そういう意識改革、そして自分が何気なくやっている行動が子どもを傷つけているんじゃないのか。そういう視点に立てるか。多くの先生が、いい支援をやってくださっている先生は、特別なことはやっていないと言っているんですよ。たまたまやったらうまくいったみたいだね、それで意識的にやっていないけれどもうまくいっている場合と、意識的にやっていなくてうまくいかない場合もあるんですね。

子どもが、そこで止まってしまったときに、その状況をどう考えるかですよ。その子の努力が足りないか考えるか、先生が指導法を変えたら、この子はできるんじゃないかと考えるか、そういうところになるのかなと。そうなってくると、もともと意識改革ができていたり、自己理解があるとAD/HDとかを知らなくても、ちゃんと行動を実行に移せていると。後から講演を聞いて、自分がやったことは間違いじゃない、というふうになっていくわけなんですね。

ここにいる、皆様一人一人が環境因子です。皆様のつくる世界が環境因子ということになるんですね。私はたまたま、カリスマティック・アダルトに出会って今の自分があるなというふうに思っています。部活というのは、実は非常に大切なんですね、部活動。そこで、やはり社会性を学ぶことができる。あとモデルもいるんです、構造化されている。上下関係を学ぶ、そういう中で私の社会性は身についたかなというところがあります。

今、えじそんくらぶの副代表は大学時代の部活の先輩であるわけなんですけれども、本当に、ちょっとした出会いの中で人は変わっていく。皆さん一人一人がカリスマティック・アダルトになる可能性があるということだと思います。どうもご清聴ありがとうございました。

ありがとうございました。



高山恵子

シンポジウム2（午後）

「特別支援教育を具体化するために」 総合討論

影山竜子 品川裕香 高山恵子
宮崎隆志（教育学研究科） 田中康雄（教育学研究科）

（司会） どうもありがとうございました。それでは午前中からシンポジウムとして立っていただいた影山さん、品川さん、そして高山さん、お疲れのところ、声がかすれているところを申し訳ありませんが、前の方にテーブルを用意いたしますので、そちらへお座りください。

この後、北海道大学大学院教育学研究科教育社会学グループの宮崎隆志先生の方から3つのシンポジウムを通した中での指定討論という形でコメントをいただきたいというふうに思っております。

（宮崎） 関心を持った点について意見を述べさせていただきたいと思います。かなり論点か明確でしたので、屋上屋を重ねるようなことになるかもしれませんが、しばらくご容赦いただきたいと思います。

午前中の最後に田中先生が、今日の共通の論点は環境調整という点ではないかと指摘されましたが、まさにそうだったと思います。今の高山さんのご報告にありましたように、同じ機能が、集中できないというふうに表れる場合から想像力として表れる、というように現象形態を変えるわけですね。そういった新しい環境をどう作っていくのかということが問題だったと思います。

そこで1点目ですけれども、その新しい環境をつくる問題について、社会関係という視点に限定して考えてみたいと思います。その場合、その社会関係をどういうふうに考えればいいのかということなんですけれども、この点につきましては、品川さんが、するどい問題提起をされておられました。配慮という名の排除がもたらされてしまう。そういった社会関係の質をどう考えるかということでありました。

これはおそらく、相互に理解不能に陥っていくような、そういった社会関係であるわけですけれども、そのことの指摘もされたかと思えます。そこで問われていた問題は、一体何であったかということなんですけれども、そこでは差し当たりその関係の質を単線性といいたいでしょうか、あるいは一次元的なりニアな関係と言ってみたいと思います。

その関係が持っている問題性は何か、ということを考える必要があるということと、それからその関係を転換していくためにはどうすればいいのか、それが環境調整として語られたことなんだろうと思います。そういった単線的な関係、これは今日の報告を伺いますと中学校、高校から職場と接近するにつれて、ますます強まっていっているというふうに理解をしました。

この点につきましては、品川さんの報告では、4つぐらいの指摘があったと、私自身は理解をしました。まず1点目です。その単線的関係とは何かといった意味ですけれども、まず自分が前提として適応をしている社会が、それぞれ専門家にはあるわけですが、その社会のルールを直接的に押し付けてしまう、その関係の中で理解できない他者に対しては、例えば怠けているんじゃないかと排除をしていく、これが1つ目です。

2つ目ですけれども、その単線的な関係で、理解できない他者に対して、例外扱いをして放置をするということです。これも単一的なルールに基づく単線的な関係を押し付けたに過ぎないものだと思います。

3点目に、狭い専門の世界に閉じこもる、という対応が指摘されたと思います。高校の先生だったと思いますけれども、障害と診断されたのであれば、私の専門ではないというふうに開き直ったといいたいでしょうか、そういう対応をされたという話が紹介されていました。これは言い換えれば自分で問題処理可能な部分に対応するけれども、それ以外に対応をしないということでもあります。

これは一見、学問的な良心に基づくようにも見えるわけですが、実は相手との開かれたコミュニケーションを求めている対応でありまして、自分の理解できる他者、つまり自分と同質な他者、あるいはもっと平たく言えば、業界用語が通じる他者としか話をしないという、そういった閉じられた対応の裏返しだと思います。これも単線的な関係の例だと思います。

それからさらに、ちょっと質が異なりますけれども、4点目として、そうした関係が実は企業や学校の現場だけではなくて、家庭の中にまで浸透してきている、ということが指摘されたと思います。母親が責められるわけですね、愛情が不足しているとか、遺伝ではないのかというような指摘をされるということがありました。

本来、家族、あるいは家庭というのは、企業社会とは異なった社会原理で構成されている世界のはずなんですけれども、そうした世界でさえも単線的な関係に支配されていっている。そうなると問題解決は極めて困難になってくる。文字通り悪循環に陥ってしまうということが指摘されていました。

この点で高山さんは先ほど、高山家はそういった家ではなかった、忘れるのが当たり前で、お互いに助け合うという関係だったとおっしゃいましたが、それと対比的な関係が一般的には進行しているのかもしれないと思います。

そういった関係の質を、以上のように理解した場合に、求められている対応は何か、ということが次に問題になってくるわけです。単線的な関係に対して、むしろ多元化された関係が必要だということは、自明のことです。先ほどの業界用語が通じる他者といえども自分と同質の他者でしかない他者とは異なって、まったく自分と異質な他者と開かれたコミュニケーションを可能にしていくような、そういった関係、それが何かということです。この点につきましても品川の支援策ということでいくつか紹介されていました。

学校や企業、家庭が単一の声でありますとか、単一の関係によって支配されていると申しましたが、その当事者の世界を、いわばずらして、あるいは相対化して多元化していく、そういった方法をいくつか指摘されたんだろうと思います。

1点目として挙げられた点でいきますと、例えば自分を排除してきた社会があるわけですが、それが実はすべてではない、そういうメッセージをきちんと伝える、別の社会や関係があることに気付いていくわけですね。その中では例えば犬の世話をすることもありましたし、あるいは先ほど高山さんが言われた話でいくと、人の役に立つ経験をするということも非常に大きい。こういった経験の中で一元化された世界で、抑圧的な関係を自分の中に内在化していたわけですが、その関係や世界自体を転換していく可能性が生まれてくるのではないかとということであったと思います。

それから2点目に認め合える集団、あるいは親でも教師でもない第三の大人による承認が非常に重要だということも、いずれの報告でも紹介されました。これは自己評価を転換し、肯定しうる自分をつくる場を作っていく、ということなんだと思います。高山さんは人格と行動を分離するとおっしゃいました。ナラティブセラピーではよく言われる話でもありますけれども、逆に言えばこれは自分と付き合い自分をつくっていくということでもあります。それが可能になるような集団や、第三の大人が求められている、ということなんだと思います。

これは高山さんが先ほど最後の方で言われましたけれども、自己理解といったときに障害名を知ることが自己理解ではなくて、自分は何ができて、何ができないのかを自己理解すること。そういう意味で自分をきちんと見つめて、自分と付き合い自分をつくるのが大事なんだとおっしゃったんですけれども、確かにといいたまいますか、まさにそういった自分と付き合い自分をつくる集団を、どのように求めてつくっていくのかということが課題になっているのだと思います。

その第三の大人の問題ですけれども、これも非常に重要な問題だと思います。私もちょっと共同学童保育の人たちとかかかわっているんですが、そこではいつも、その言葉が出てきます。これは言い換えれば制度化されていない空間ですよ、学校でもないわけです。家庭でもないというのは、家庭でさえも、いわば今の段階では教育家族になってしまっていますから、そういった点から解放された第三の非制度的な自由な空間、つまり多様な関係性を用いるような空間ですね。そういった解放的な空間として第三の大人がいる場がおそらく存在するのだらうと思います。

どうすればいいのかということの3点目ですけれども、具体的なソーシャルスキルを獲得していく、あるいはそれを提示していく、ということが非常に重要だということも強調されました。例えば単線的な関係を押し付けてくる他者に対して、自分の状況をきちんと説明する言葉を持つ、ですとか、助けてもらう方法をきちんと伝える術を知るということも非常に大事だと言われました。これは、いわばその単線化された関係を主体的に再構成するためのスキルであります。それがやはり重要なんだと思います。

4点目ですけれども、保護者も含めて関係者がリラックスすることの大事さも指摘されました。『ドブプリ!』というのがパロディーの漫画の話がありましたけれども、大事なことだと思いました。実は単線的な関係というのは、情動的な関係といいたまいますか、そういった次元でさえも抑圧してしまいうわけですね。身体次元やあるいは情動的なレベルでも過緊張を強いるということがよくあるわけです。むしろそういった次元から解放していき、体の内から沸いてくるようなエネルギーを実感する。笑いの重要性も強調されましたし、遊びの重要性も強調されました。そのことが非常に大事なんだらうと思います。

高山さんは自分がミスをしたときに笑える、ということが非常に大事なんだと。自分がミスをしたときに、固まってしまう、過緊張に陥ってしまうのか、笑えるのかというのが、これが大きな違いですね。そういう意味で情動的な次元で、自由度を獲得するということは非常に大事な問題であります。そういった次元が確保されて、おそらく多様な関係や、あるいは多声的な関係を主体的につくっていくエネルギーもわいてくるのだらう、と思います。

5点目ですけれども、このような支援のプロセスを理解した教師が言うべきときには、ガンと言うということが大事だ、という話もされました。規範を顕在化させるということですね。これはクラスの子どもたちの社会関係の質を考えるとときに、非常に重要でありますし、そのことによって集

団が変わっていくということも当然あるだろうと思います。

以上が1点目の話なんですけど、大きな2点目の話として、こうした視点から見たときにわかき保育園の実践の意義は極めて鮮明であったと思います。まず1つ目に、自主的な個別保育ということ強調されました。これは、保育士がルールを押し付けるものではない。つまり、先ほどのこの文脈で言いますと単線化された関係を子どもたちに押し付けない、あるいはその関係の中に子どもを押し込めないような、そういった保育を基本的な理念として追求されてこられたということですね。

このことがあってひまわりでしたか、特別な、個別的な対応も実は成り立っているということが大事なんだということ強調されました。これも高山さんが最後に何度も強調されたことで、自分がやってきたことが間違っていなかった、という教師に何をやってきたのかという、特別なことはしていない、というふうに言われていました。必ずそう言うんだと指摘されていましたが、それと同じことで、特別な対応がむしろ日常化されているといいましょうか、そういった関係の中でしか、実はこういった特別な対応はできないのだ、ということ指摘されていると思います。

そこでは、いくつか大事なことが指摘されましたが、まず子どもが自由になるということです。これは、子どもの自由が確保されるということは、1つは身近なモデルを持たなければならない。何も無いところで自由になるわけではなくて、むしろ不安になることもある。身近なモデルを持つ、あるいは見通しを持つ、そういったことが非常に大事だということ指摘されました。

これは子ども自身が未来、あるいは明日の世界、あるいはそこにいる自分が見えるということでありましょし、そういうものが見えたときに、初めて主体性が育まれてくるのだらうというふうに思います。これは品川報告であった、そこで紹介された子どもたちとまさに対照的です。見通しが持たなくて、主体性を失ってしまう、あるいはそうさせられてしまう、そういった状況に押し込まれた子どもたちと、まさに対照的であったというふうに思います。

それから、わかき保育園の実践に関する特徴の2つ目ですが、ここでもソーシャルスキルトレーニングが強調されていたと思います。ひまわりで個別対応をしていくわけですが、自己肯定感を高める援助、あるいは集団の一員としての自己を確立するための色々なトレーニング的な対応も行われているわけです。やはりこういったスキルという問題は非常に大事なんだと思います。

このひまわりの対応は、決して例外として排除するものでない、ということも明らかです。冒頭で、単線的な関係は例外として排除する、と言いましたが、そうではない。ひまわりの対応は決してそうではなかったわけです。それは、わかき保育園全体の中での多元性の延長でありますし、他の親がひまわりに参加した、と言っていることによっても証明されていると思います。

わかきさの3点目ですけど、連携の問題についても大事な指摘をされました。1つめは、情報の共有の問題です。こういった取り組みの中で子どもたちの状況や、あるいはそこでの活動について、情報発信を一生懸命やっておられるわけです。実はこれは、多元的なもう1つの世界を、地域の中でつくるための情報発信をされていますし、その情報を共有することによって、初めて多元的な関係からなる世界ができてくるのだらう、というふうに思います。

そういった経験が共有されてくること、そのことによって一緒になって次の課題は何かということを考える。よく言われますけれども、協働ということが成り立ってくるのだらうというふうに思います。理解と支援によって障害が個性になると高山さんがおっしゃいましたが、その理解と支

援を具体的につくっていく実践例として、この問題は理解できるだろうと思いました。

大きな3点目、最後の点ですけれども、このシンポジウムのテーマであります、地域連携ですけれども、その条件を考えると、今日のお三方の報告が持っている意味といいたいまいしょうか、気がついたことだけ述べさせていただきます。まず1点目ですけれども、抽象的、一般的に述べれば、この連携をつくるためには、子どもを一元化された関係から解放すること、あるいはその一元化された目で見えていた専門家や親が、自分自身を解放すること、それがなければおそらく連携は成り立たない、というふうに言えるのだろうと思います。

では、そういった子どもや大人、両者の解放がいかにして可能になるか、ということで2点目ですけれども、そのためには先ほどのわかき保育園にありましたような情報と経験を共有していく、その共有によって成り立つ一種のコモンズといいたいまいしょうか、共有的なスペースを作っていくことが、大変大事になってくるのだろうと思います。それはおそらく、子どもをまるごととらえるコモンズでありまいしょうし、あるいは子どもが解放されるコモンズというふうに、おそらく言えるのだろうと思います。

第2回目のシンポジウムでは支援システムをどう作るのか、あるいは支援センターを地域の中にどう作るのか、ということが課題になっているという話だったと思いますけれども、おそらくその問題と今の点はかかわってくると思います。そのコモンズに多様な専門家に関わり合うこと、その中で相互に学び合うことによって、それぞれの専門家が持っている専門的な知識とは異なった新たな実践的な知識が、そこから生まれてくるのだろうと思います。それは何なのかということは、さらに問わなければなりませんけれども、今求められている新しい知というのは、おそらくそういう類のものだろうと考えます。

3点目ですけれども、そこから既存の制度化された諸機関、学校などですけれども、それを解放していくような支援を作り上げていくことがむしろ今、求められているんだろうと思います。それは学校だけではなくて、むしろ家族でさえも、今はそういった支配の中に閉じ込められてしまっているとすると、そういった家族も含めて解放していくような取り組みが必要になってくるというふうに思います。

例えば単一の支援センターを作ったときに、その場で元気になったとしても、家庭、家族やあるいは地域社会に戻ったときに、また抑圧的な関係の中で元気をなくしてしまうという問題が、おそらく生じるのだろうと思うんです。これは私の専門にしている社会教育でもよくある話です。公民館に行って元気になったんだけど、地域に帰って町内会の人と話すともまた元気をなくして、元気をもらいに公民館に行くんだけど、行ったり来たりの繰り返しだと。公民館の内側と外側をどうつなぐのかという問題は古くから提起されてきた問題なんです。

ですからそういう点では地域の諸機関、制度化された世界の中で身動きできなくなっている諸機関、家族も含めて、それを解放していくようなコミュニティワークといいたいまいしょうか、地域の中での教育的なサポート、働き掛けが不可欠になってくる。社会教育の役割も、おそらくそこで何らかのものがあるのだろうと思います。その点ではえじそんくらぶの最後に述べられましたペアレント・トレーニングという話は、まさに社会教育実践そのものでありますし、とりわけ母親支援の重要性を語られましたけれども、そういった取り組みがNPOという新しいアクターといいたいまいしょうか、それを通して展開されることは、格別な意味があるのだろうと思いました。以上です。

(司会) 総括をしていただきまして、今日の午前中からの3つの話に1つ筋が通ったような気がいたします。まず、宮崎先生の今のお話を受けて、ご感想でも何かお気づきの点でも、演者の方お一人お一人、お言葉があればと思うのですが。

(影山) とにかく社会全体というか、関わるものすべてが同じ思いになって行動をしていくということがやはりすごく重要なポイントになるんじゃないかな、というふうに思うんです。今、宮崎先生がおっしゃったような一つ一つの柱というものを、あらゆる場にかかわるものがよく理解し、そして自分の現場に合った形で実践をしていくというか、やはり行動をしていくということが重要なことを実感します。

今日、ここの壇上に上がっている立場の私も含めてお三方、かかわっている子どもたちの年代も違いますし、やはりそのときの課題は、通じるものはあるけれども、支援の具体的なツールというのは、少しずつ変化していくと思うので、でも、その中でやはり根底に流れている考え方、そういうことがやはり共有できているということが、大事なこれからの課題かなということを感じました。

(品川) 先生、まとめていただいてありがとうございました。今のお話を聞きながら、私が思ったのは、確かに今、制度も変わろうとしている、支援センターもできるというふうにいろいろと動きはすごく見えているんですが、いくら箱を作っても結局テレビがあっても作る人がいなきゃ映らないのと同じで、いくら支援センターができて、そこにマインドがないものが、取りあえず異動だから来たかなとか、やらなきゃいけないからやるかなというのでは何も変わらないのかなというふうに思っています。

確かに私が話したことも高山さんが話されたことも、影山先生が話されたことも、非常に現場の話では、特に私の話は現場なんですけど、でもこうあればいいだろうな、という話もしましたけど、絶対にそうはいかないんですね。やっぱり、なかなかそんな、先ほど高山さんはスーパーティーチャーとおっしゃっていましたが、そうそうスーパーティーチャーもいないし、そうそう議会の引っ張っていきような議員もいないし、予算をぶん取ってこれるような教育委員会の人も、そうそういないんですね。

やっぱり、そういうときに分かってくれないとかだけでは、そういうだけではいけない。やはりそこには訴える側の方も、もうちょっと相手の琴線に触れるような理論武装をやはりしていかなきゃいけないのかな、というふうにすごく、それは関係者の人は特に、一生懸命やればやるほど、どうして分かってくれないのかしらと皆さんおっしゃるのですが、だいたい一生懸命やればやるほど人には伝わらなくなってくるんですね。

特に、専門性が高くなれば高くなるほど知識と経験の差がすごく広がっていくんですね。例えば1人の子どもさんを見ている人と10人の子どもさんを見ている人ではやはり思いが違ってくる。だけども見れば見るほど、もっと実態を知るから、もっとやらなきゃいけないと思うけど、その言葉を言っても、人は動かないんですね。やっぱりいかに相手を動かせるかというのは、それは、やっぱりこちら側もそのスキルを身につけなければいけないのかな、とすごく思います。

よく親御さんが学校の先生が分かってくれないんです、委員会が分かってくれないんですとおっしゃる。でもその通りだと思うんですけど、相手が分かってくれないと言って、そこで責めても

何も変わらないんだったら、どうしたらこの人を動かせるか、というような、やはり自分自身のコミュニケーションスキルも上げていくべきかな、とすごく思います。それはよく学校の先生が、親が分かってくれないんですとおっしゃるのですが、でも親が分からないのは、それはあなたの話し方が悪いんだよと、はっきり言って思うんですね。

同じように、親御さんが学校の先生が分からないと、それはあなたの話し方が悪い。それはやっぱり特に私は商売上、自分がこうやって文章を書いているので、私は書いたものが分からないというのは、それは私の書き方が悪いのであって、やはり、いつでも思うようにするんですね。

やっぱりコミュニケーションというのは、自分が言いたいことを言うためのものではなくて、いかに言いたいことを相手に伝えるか、やっぱりここにはテクニックがあるので、そこを特にこうやって、今日みたいに、こんな雪の日にこうやって来る熱心な方だからこそ、自分の気持ちだけでは人は動かない、やっぱり、動かせるテクニックというものが世の中には、例えば、5分間で人を動かす方法とか、ビジネスツールはいっぱいありますから、それをうまく落とし込んでいくのが大事なのかな、というふうに思います。

あともう1つは、昨日の夜にちょっと話があったんですが、よく学校の先生は、なかなか親御さんの気持ちが分からないとおっしゃる。親御さんの方は、なかなか先生の気持ちが分からないというんだけど、人の気持ちは、そもそも分かるものではない、というふうに私は思っているんですね。

大事なのは、だいたい分かると思うこと自体が、私は自分としてはすごく傲慢かな、とっていて、やはり大事なものは、分からないけど分かりたいと思うとか、分からないけど分かろうとする努力をしたから話してというふうに言っていくのかな、と思います。というのは、やはり自分が子どもたちを取材していると、子どもたちは分かってくれたいと口ではもちろん言うんだけど、でもどこかで、でも分かるわけない、というのがすごくよく分かっているんですね。

でもそこで分からないよ、と言って突き放すのではなくて、分かりたいから話し合おうと、それが、人間がやっぱり猿とは違うコミュニケーションができるということなのかなと思っているので、特にこういう特別支援教育を進めていく上では情報を発信する側もやっぱり努力をしなければいけないのかなというふうに思っています。

(高山) 宮崎先生にクリアにまとめていただいて、また皆さんのお話を聞いて、やっぱりまた元の質問に戻ってくるかな、というのは専門性って何だろうということですね。日本でソーシャルワークができるか。ソーシャルワークというのは、一つ一つの専門性をつなぐ仕事なんですよ。一つ一つの専門性というのは何だろう。先生にしても素晴らしい先生とか、言語聴覚士の方とかお医者さんとかっているんですけども、どこか職人芸という感じなんですよ。そのところがやっぱり理論と実践というのが両輪の輪というのもあるって、だから、それは品川さんの話にも通じるところがあるんですけども、1人で頑張っているというのだとその人がバーン・アウトしてしまう。

これをいかに支援者を増やす、そして、そういうコミュニケーションがどれだけできるのかということになるのかなと思うんですね。それでスキルを学んでもらいたい、というふうに思っている限り、相手はやっぱり変わらない。相手のやはり意識改革というか、琴線に触れるという話もありましたけれども、その立っている位置を変えないと変わっていかないという感じがあるんですね。その立っている位置というのは、一人一人の自己理解、そして一人一人の他者理解、そういうこと

があるのかな、というふうに思います。

日本の社会というのは、当然、協調とか、和とか、集団ということに価値を置く民族なんですけど、実は他者理解から入っている。集団の中に、どう自分を溶け込ませようか、そこから入っている。そのときに浮いちゃったりすると、何でだろうというときに、自己理解がないから、そこであっふあっふしちゃうということがあるのかな、と思うんですね。

道徳の教科書というのが先ほど出ましたけれども、北海道の道徳の教科書の、指導要綱というのをたまたま見たことがあって、そこに自己理解という項目がなかった。そこに私はすごい衝撃を受けました。アメリカのソーシャルスキルは、自己理解から始まるんですね。それは幼稚園、保育園からやる、外見から入る、好き嫌いから入る。同じチョコレートでも嫌いな人と好きな人がいる、そういう単純なところから自己理解、他者理解、違いを尊重する、そういうものがあるんですね。

だから環境因子というのは確かに一人一人なんですけど、実はもっと広い目を見たときに、価値観とか文化とか、そういうところになるんですね。だから立っている位置がどこかということで、環境因子が変わっちゃうと、そういうことになるんじゃないかな、というのをアメリカで幼稚園の先生をしていたり、そういう教壇に立ったという体験と日本の養護学校でソーシャルスキルの授業をやったりするという、そういうものの違いから本当に感じる事なんですね。

だから国際理解教育の前に、国内理解教育みたいな、学級内理解教育みたいな、これは通じるところがあると思うんですね。障害者への理解というのは人権教育に重なっているし、やはり違いというのをどう受け止めるか。それぞれが、どこの立ち位置で、その違いというのを見ているか、それによって変わってくるということがあるのかなというふうに思います。

(司会) どうもありがとうございました。それではちょっと司会の不手際に終わってしまうと、あと10分ほどしかないものですから、3時15分まで延長をさせていただきたいと思います。フロアの方からご質問ご意見などございますでしょうか。

(Q1) 影山さんにちょっと質問があるんですけども、保育園を卒業した後、その後というのは何か、要するに切れちゃうわけですよね、せつかくやってきたものが。そういったものをどういうふうなビジョンで考えて、どういうふうなことがあったらいいな、とかというふうにあったりするんですか。

(影山) 夢は、地域の各学校に、うちみたいなサポートシステムがあって、これがまた誤解をされては困るんですけども、もしそういう子どもたちが、そこに排斥される形ではなくて、本当にみんながお互いに理解をして、一人一人が発達を保障していける、そして、最終的には、コミュニティでお互いが認め合って生きていくことのできる支援が、各学校の中で、そういうシステムができればいいなというのは大きな夢なんですけど。

それはちょっと今はそんな無理だと思うので、うちの園としては、まずは卒園児を対象に、一番彼らがたぶん学校の中で困難と考えられるのが、もちろん学習困難ということも出てくると思うんですけど、それとやっぱり、集団への適応の問題とか、そういったその子たちに合わせた課題に対する支援を、放課後にうちに通ってくることでサポートをする、ということをやっと今考えてい

ます。

一応、エンカレッジスクールとあって、名前はできているんですけども、保育士の手数の中で、そういうサポートをするための裏付けも制度の中では一切ないですから、だから、園独自の地域支援活動の中に学童児を対象とした、そういうケアを考えています。

実際に実は、1人卒園児で、ちょっとLD傾向のあるお子さんがゆっくり自分のペースでやればできるのに、やっぱり学級のペースには乗っていきなくて、どんどん自尊心が下がってきってしまうという、そういう子どもが放課後に来て、うちのスタッフが学習指導をしながら、補完していくということを1年やったんですけども、彼も通ってくることを忘れちゃうんですよ。

園にたどり着かないから、その支援をぜひやってあげたくても結果、その通うということ自体に困難が生じてしまって、親御さんと話し合っただけ、そこが続けられなかったという経験があるんですけど、色々なタイプに対応できる支援を園の中で考えていきたいな、とは思っています。

(Q1) もう1点いいですか。あと今まで卒園してきた、今の話にちょっと出ていたんですけども、そういう人たちの成績が上がっていったとか、そういった追跡調査みたいなものはあるのでしょうか。

(影山) 実際にはしていません、データのことも取っていないです。個別に親御さんがやはり園に相談にいらっしゃるときに、その実態を知るとか。あとは一番近い学区2校に関しては、連絡会があって情報交換を時々していますが、学校の方もうちの卒園児がというふうにまとめたデータを持ってはいないので、ちょっとそこら辺は客観的なご回答を避けさせてもらって、答えられないのが現実です。

(Q2) 今日は、本当に中身の濃い、私も現場の人間なんですけれども、自分が今求めている色々なテーマを4人の先生方が非常に分かりやすく整理をして、メッセージとして送ってくださったなと思ひまして心から本当に感謝したい気持ちです。

影山先生のおわくさ保育園の実践は、いつか拝見したいなと思ひまして、実は田中先生から『気になる子』の本を1冊紹介していただいて、その本をきっかけに、私は子育て支援センターというところにおりまして、療育の方を担当しているんですけども、やはり今、保育園で色々な発達が気になるお子さんが増えてきていて、そこで問題ですとか、問題の整理だとか、今後の見通しというのを、いかに保育所の先生方と共有していくかというところでもものすごくエネルギーが必要だったんですが、あの本ですね、『気になる子』の本を、保育園の先生方はみんな自分のために1冊買ってくださったんですね。

そして、ある自閉症の子どもさんを通して、やはりどうこの子を理解していったらいいかと言ったときに、あの本を読み合いながら、そのAちゃんのイメージ、問題行動のイメージを全部ダブらせて話し合いをしていったところ、非常に整理をされて、ものすごく勉強になったんです。それは、私もすごくいい経験をさせていただいて、本当は今日、保育所の先生方を全員連れてきたかったし、お母さん方にも本当に来ていただきたかったんですけど、そういった形で活用させていただいております。

それと質問というのではないんですけれども、私の中でまだずっと長い間整理できない問題がありまして、実は成長発達の弱いお子さんと母性の関係と申しますか、その兼ね合いはいろいろ賛否両論がございまして、うまく言えないんですけども、年々長時間保育が求められてきていて、例えばハンデがあっても、やはり働きたいお母さん方が増えてきますね。今の保育所ですね、わかき保育園のような実践をしているところは少ないと思うんですけども、今のような保育所態勢でやっていった場合、かたや女性労働が非常に重要視されてきて、かたや従来通りの保育所運営をしていく、というところでは、やはり成長発達の弱いお子さんは、かなりストレスがかかってくるだろうと思ったんです。

長時間保育をするためには、やはり保育所というのは抜本的な改革をしていかないといけない。先生が最初にお話されたような、保育所自体を抜本的に大改革をしましておっしゃいましたけど、本当にそれが必要だなと感じました。ですからゆったりとした家庭にいるような感覚で長時間預けていくようなシステムにしていかないと、子どもさんが参っちゃらんじゃないかと。そのストレスが家庭に帰っても解決されないで、それが複合的に母親のストレスにまた二重に加算されていくというような悪影響をずっと持ち続けていくのが今の現状じゃないかと。

その中で、我々が保育所の先生も療育の担当者もみんなどうしたらいいんだろう、というところで頭を悩ませている、そこにずっとわかき保育園のゆったりとした視点で、あまり集団を押し付けられないとか、大人の規範を押し付けない、そういった新しい視点を提示してくれたというのはものすごく参考になりました。本当にありがとうございました。

(影山) ありがとうございます。すごく勇気付けになりました、うれしく思います。全く同じ思いで、日々私たちも保育をしまして、うちの園のコンセプトに、もう1つのお家というのがうちの園の考え方なんです、保育園というのはもう1つのお家だよ。やはり色々な家庭から、利用する時間もさまざま、そのストレスというものが最小限で、そうした環境であってほしい、というふうに思いながら保育をしているんですけど、やっぱりこれが限界があるんですね。やっぱり集団であることは現実ですし、保育士の手数も現実ですし、なかなか理想に近づきたくてもできない部分が実態としてあるんですね。

そういった中で、やはり色々な家庭があるので、親御さんを追い込むこともできないけれども、やっぱり同じ思いで、そんな中で子育てを一緒にしていこうと。私たちは保育士のことは、親御さんにとってはパートナーという視点で保育をしているので、先生という称号を園では使っていないんですね、誰々さんというふうに保護者からも子どもからも、私の場合は子どもからも竜子さんと呼ばれているんですけど、そういう感覚で同じ、お互いの思いを共有して、本当に品川さんがおっしゃるように、すっからは分からないけど、お互いが近づこうという思いで、それで社会の中でしょうがなくこういふところを利用して、子どもにも協力してもらって、親も子どものために協力して一緒に助け合って生きていこうという、そういう思いがあるとないとは全然子どもさんの育ちも違うんじゃないかなというふうに思うのです。

本当に今の子どもたちは、大人は一生懸命なんだけど、大切にされていないと実感して生きている子どもたちが本当に多いと思うんですね。高山さんの話にあったように、やっぱり環境因子で障害と同じような状況、障害になっていく、ということ結構私たちも現場で実感していて、かえっ

て、そういうお子さんの方のケアが大変という言い方はよくないんですけど、やはり難しいので、そこら辺はこれから、私たちも模索しながらさらに環境を充実したいな、と持っているところです。ありがとうございました。

(司会) 宮崎先生、この問題で何かコメントはないでしょうか。今の保育園の在り方も含めて。

(宮崎) すみません、専門外だと思って。そうですね、学童保育でも実は同じようなことがやはり言われて、民間共同学童保育ですと当然、ただいまと言って帰ってきて、お帰りと迎えるという、そういうもう1つの家ということですよ。ですから、寝ていようが自由だし、どこかで一緒になって遊んでいようが、押し入れの中に入っていようが自由だというのが基本的な対応だと思います。

設定保育として、何かゲームを強制するということではないという対応なんです。ですけど、問題はそういう第三の場というか、自由な空間をつくるのは、実はものすごい努力が必要で、それは放任とは全然違うわけですよ。その中で、確かに子どもたち同士が成長発達していくような契機を、やはり作らないといけなくて、それは自然発生的には実はできないことなんです。ですから、わかきのような取り組みも、色々な試行錯誤の中でできてきたんだろうと思いますし、父母との関係にしても当然同じだと思います。

父母の側も、先ほどの質問と関わるかもしれませんが、自分が忙しくなってきたり、働かなくなっちゃいけなくなったり、大変だということも絡んでいると思いますけれども、やはり預けるという発想の親がすごく多い、一緒になって作っていく、という発想に立つまでにもものすごく時間がかかる。そういった預ける親になってしまったときには文句は言っているんですけども、一緒になって問題を解決する、とはならない。そういう父母会になってしまったときに、色々な困難を抱えた子どもの親は、やはり孤立しちゃうということが起きてしまうんですね。ですから、その親の問題も含めて本当に分かり合っていく一種の共同体に作り上げていくためのエネルギーというのは、もう膨大なものなんだろうと思います。

おそらくそこで先ほど、単にそれは情報提供をすればいいという問題ではなくて、品川さんですか、相手を動かす言葉が大事なんじゃないかとおっしゃった、その問題とすごく関わっていて、抽象的な問いになってしまいますけれども分かるか、理解するとはいったいどういうことかということですね。その理解をもたらす言葉とはいったい何なんだろうかと。それとコミュニケーションとは何なんだろうかということであらためて問わないといけなのだろうというふうに思っています。

(司会) ありがとうございました、ほかにご質問、ご意見はないでしょうか。

(Q3) 今のお話の中でコミュニケーションの取り方、在り方がどうなっていくんだろうということをお話されていたと思うんですけど、実際問題、先生を育てている先生方、大学の教授の方が教員を育てるといえるときに、どういったコミュニケーションの取り方であるとか、発声の仕方であるとか、そういったものを使っているのかというか、そういうスキルを使っているのか分からないんですけども、そこら辺をちょっと知りたいです。そこら辺の実態が知りたいです。

(司会) 教員養成過程においてということですね。これは答えられる方は、よろしいですか。

(高山) うち、学生さんを研修生として受け入れているので、その立場からということなんですけれども、やっぱり授業の中では、コミュニケーションというのは学べないですよ。実習がやはり非常に重要になってくるのかなというふうに思います。それで色々な大学で、色々な研修生とかボランティアとか、そういう色々な単位が取れる、取れないとか色々なレベルで、えじそんくらぶにかかわってくださる学生さんがいるんですけれども、やはり学ぶ、ソーシャルスキルって何か授業で学ぶという感じではないんですよ。

それで何か、すごくセンスのいい子どもとの関わり方をしているなというふうに思うと結局、家庭でたくさん褒められていた子だったりするんですよ。それで子どもをすごく否定的に見ちゃうというのは、すごくやはり厳しい親に育てられていたというところがあって、あとそれから部活ですね。どういう部活に入っていて、その中で、やはり社会性が育ってきている。だから1年生と4年生はやっぱり全然違うんですよ。だから大学の中で授業という形ではないですけども、そういう中でセンスをつかんでいく子は、センスをつかんでいく。そういう意味でも大学だけでは不十分という発想を持って、もっとNPOとか、あと子育て支援センターとか保育園とか、そういうところで本当に子どもたちと触れ合うということが、重要なかなとは思っています。

触れ合いたいと思っていても、どうやって触れ合っているか分からないんですけど、という質問をする生徒さんもいるんですよ。心理学部の人だったりしてね。だからそこからやるのかみたいな、何の実習だっけ? みたいなところがあったりとか、だからやっぱりソーシャルスキルというのは、実体験の中で育まれていくものなので、うちも子どもたちに対してSSTという形でやるんですけど、何か大学生のボランティアがすごく勉強になったかと言っていたりするんですよ。

基本は同じなだけで、やっぱりそれが使えるというか、モデルとか、あとこういうふうにした方がいいとかって言うてくれる場をやっぱりたくさん学生さんに提供してあげることがすごく重要なかなと思います。

理論と実践で教科書から、教授から学ぶということプラス、実践で私は子どもたちにいつも学生さんたちに言うんですけど、子どもは生きる教科書だと、子どもが答えを持っている、教科書で学んだことが、本当に使えるかどうかは子どもで実験することが大切だというふうに言っています。お答えになったかどうかは分かりません。

(影山) 私も現場ですごく実感するんですけど、保育士もインターン制があるといいと思うんですね。今は4年制にだんだんなっていくようですけど、やはり、本当に一番人間の始めにかかわるところに、私たちは関わっているので、保育の世界ってすごく保守的で、すごく感覚でずっと保育をしてきたみたいな、何というか、伝統で大きくきてきて、全然科学的じゃないんですよ。まさに乳幼児の発達って科学で、それを知らないと、そこで人を信頼するとか、自分を信頼するとか、コミュニケーションの原点を最初に、本当のことを言うと最初の1年半と言ってもいいぐらいに、そこに集約されているんですね。

それをスタッフがどれだけ感じて現場に立つかというのは重要なところで、本当に高山さんがおっしゃるように現場で多くを学ぶ、それを、いきなりもう資格をもらってではなくて、やっぱりイン

ターンで、自分が適性があるかどうかというのもそこで確かめられると思うんですよ。結構つらいんですよ、色々な子どもオーライって言うておきながら、色々な大人オーライと言いたいんだけど、なかなかちょっと、やっぱり適性というのが、たぶん自尊心が下がると思うんですよ。だからやっぱり適材適所、その人の能力に合った社会で、お互いが貢献し合うということがいいと思うので、やっぱりそれは学生の間にとということです。

あと1つ養成校でいつも首を傾けているのは、その養成校の全然保育士のとらえ方が違うんですね。イベント屋ぐらいにしか思っていないような学校もあって、パンフレットなんかを見ると、なんか体操のお兄さん、お姉さんみたいな保育士大歓迎みたいな、そんなようなコンセプトで養成をしようとしている科が、芸術の範囲でもあるんだけど、やっぱり人間の、もっと専門性の高い世界だということで、だいたいその養成校が、何科にその保育士資格を取れるところを作っているかでも、ちょっと評価が私の中でも分かちやうかなみたいな。だからやっぱりぜひ、大学とか、そういう養成時代に大いに色々な勉強をしてきてもらいたいな、と思っています。

(品川) 実際に大学でそういったコミュニケーションのスキルを教えているかというのと、たぶんすごく制度の中ではないと思います。LD学会の会長なんか聞くと、それはこれから入れていくというふうにおっしゃっているし、例えば大学で、滋賀大とか、確か香川とかの方では、もう特別支援教育科というのを作って、そこで、まだ実際にこれから動き始めますから、どういう内容かというのはいちよつと分からないんですが、ただ学問だけではなくて、そういった伝え方というのものもやらなきゃいけないと、プログラムを作った先生たちは言っていました、でも実際はどうかは分からない。

というのは現実的には、その教員養成大学という、養成大学に限りませんが、その指導の内容は教えるんですよ。この科目はこうやって教えようということはあるんですが、ほとんどの日本人は、例えば作文の書き方一つ習ったことがないですよ。人の前で、どうやってディベートをするかということを知っていないので、それは決して教師だけではない、行政だけではない、あらゆる社会、普通のサラリーマンでも分からないレベルですよ。だからこれだけ、その作文の書き方の本だとか、コミュニケーションの本が売れるわけで、現実的にはそういったシステム、そういったスキルをシステムティックに教える学問というのがほとんど日本に今まで根付いてきていないんですね。

やっぱりその背景には、さっき高山さんもおっしゃっていましたが、何となくみんな、日本人は同じような顔をして、同じ黒い髪をしているから、言わなくても分かるだろう、というのがすごくあるんですね。今まではずっと言わなくても分かるだろう、という流れでやってきたので、そういった技術的に、上手に自分の言いたいことを相手に伝える、ということの必要性がなかったんだと。

ここに来て初めてどうもそうじゃないらしいとか、やっぱりみんな違って、みんないいとかがキーワードになって、初めてやらなきゃいけないという、今回のホリエモンとフジテレビと同じように、時代が何か起こって初めて、あ、ここに抜け穴があった、それが1つは実はこのコミュニケーションスキルだった。

(録音不良にて掲載不能)

2.1.1. 第3回シンポジウムの解説

『特別支援教育と地域連携～子どもと親たちの視点から～』について

教育臨床講座（臨床教育学分野）

田中 康雄

2005年、3月13日、北海道大学学術交流会館二階で、2004年度研究プロジェクトのひとつである「特別支援教育と地域支援プログラムの展開」第三回のそして最後の公開シンポジウムを開催した。今回は、もっとも当事者に近い方々に登壇してもらった。就学前に関与する保育士、当事者インタビューを重ねている記者、そして自助・家族支援団体の代表者である。

ここでの解説は省略したい。大きな理由は指定討論者である宮崎隆志教授の発言のほとんどが、見事に演者の趣旨をとりまとめているからである。

2.1.2. 障害のある方々とおつきあい

シンポジウムに参加して考えたこと

教育臨床講座（教育臨床心理学分野）

葛西 康子

大学構内を歩いていたら、道ばたの水溜りにつがいのカモが身を寄せて立っていた。歩み寄りながらしばし眺めていると、全体に茶色の、彩りのさっぱりよくない雌カモが首をくねらせくちばしを翼にこすりつけながら、身づくろいをしていた。彩りのいいほうのオスは何もせず、メスの傍らでただそこに立っていた。

結婚を目前にひかえたカップルの祝賀会を先日企画した。お二人はともに病いを抱えながら生き抜いてきていて、辛い思いはさんざんしたので、もう何があっても大丈夫とって、ニコニコしていた。彼らが幸せでいるということは、私の幸せでもあるのだ、とこのとき素直に思えた。

「私、結婚してほんとよかったわ。彼も同じ病気だから調子悪いとき分かってくれる。見守ってくれる。前はすぐに入院だなんていわれてきたのに・・・、ほんとによかった」。精神障害を抱えながらお仕事をしてきた人が、ふっと呟いた言葉だった。見守ることの度量の深さを教えられる一言だった。よく手をつないで二人で歩いていらっしやいました。とにかくたいへん仲のよいご夫婦なのです。

その昔、若い女の子とおしゃべりが、なにより、人とつながろうとする唯一の原動力なのかもしれないと思ってしまうような一人の青年がいた。楽しそうにおしゃべりしてたのに、にぎやかに卓球が始まりだすうちに、ふいっと一人で姿を消してしまった。どうしてなのかと考えるたびにさまざまな憶測が広がった。心が通い合えたときもあったのに、最後は誰も彼の思いにたどり着くことができなくなっていた。今は風の便りも途絶えてしまったままだ。

「患者から学ぶ」。恩師のことばは、私にとって支えでもあり戒めでもある。

頭の中で空想をめぐらすことに傾きがちな私には、これ以上のアドバイスはない。

そして今回のシンポジウムは、この原点をことさらに意識させられる内容だった。さらには専門家という存在、当事者という存在について考えを巡らせる機会となった。

専門家と当事者をケアの担い手と受け手に置き換えて考えてみる。

ケアリングとは、本来、応答性の行為、つまり当事者から働きかけられることによって、始まる。ケアの担い手はケア領域において素人ではなく、働きかけられるに足る専門家としてその場になくなくてはならない。知識を持ち且つ実践者でなければ意味がない。専門家は当事者が働きかけたいような存在であり、彼ら彼女らの環境の資源の一つなのだ。

ケアリングのプロセス、環境の資源の一つとしての専門家がケアの受け手に活用されているときをよくよく考えてみた。

このときの当事者って誰のことをいうのだろうかという素朴な疑問が湧く。

ほどよい環境として機能し、互いに生き残ろうとしているときには、ケアの受け手はもとより担い手もまた当事者の延長線上に並んでいるのではないだろうか。意識改革というのは視点を変えることによって気づくことができるような、広い土俵の中にいる私たちという意識の獲得なのかもしれないと思う。

シンポジウムを括る重要なキーワードは「環境」だった。

障害を抱えた子どもや人々が育まれる環境は誰にとっても育まれる環境だという話があった。

札幌市に「すみれ共同作業所」という精神障害を抱える当事者が運営している作業所がある。せつせと軽作業に従事する第一作業所と、のんびりペースで各々が仕事をこなす第2作業所がある。設立にあたって資金作りから奔走し、当事者自らが築いた作業所だ。

「あずましい」場所でありたい、と所長さんはよく言う。

私もまた、くさくさしたとき職場からここに逃げこんで、ほっと息を抜かせてもらっている。居心地のいい空間がそこにはある。彼らが作り出す環境はどんな自分でも受け入れOKといった寛容さがある。

すみれの利用者さんのなかには、顔をあわせると必ず缶コーヒーを振舞ってくれる人がいる。40を過ぎた私をつかまえて「学生さんが来たあ」とからかってくれる人がいる。私はちょされるがまま、いることが心地よい。このように相手を気遣うもてなし方を私は見習いたいとも思う。

「やっぱり同じ病気の人じゃないと、私たちのほんとの苦しみなんてわからない」。

この言葉には、わかったつもりで振舞う、わかっていない・わかろうとしない専門家の傲慢な態度への抗議として受けとめられる。しかし、もう一方で、苦しみを誰かに汲み取ってもらいたいという切実な思いもにじんんでいる。

病気や障害を抱えていない他者にとっては、当事者のとりわけ見えない障害を抱えて生きる、その生きづらいつら体験について、なかなかわからないというのもまた至極当然かもしれない。

私とあなたは違っているし、完全に分かり合えることなんかない、おんなじなんて、対等な関係なんてないというような越えられない境界線はあると思う。

でもだからこそ、隣人としてのつき合いがはじまるのだと思う。それでも、だからこそ相手の成長へ助力するケアの担い手として、わかりたいと思っていること、教えてほしいと思っていることを謙虚に愚直に問い続け、そうして関係というものが紡がれていくのだと思う。

私たちという意識の獲得というのを私は、ケアの担い手と受け手が共通の目標に向かって共同戦線を組む作業同盟として捉えてみたい。

この意識は、場をともにする他者との関係性への問いを怠ることで簡単に失われる。一緒にはなれない、同じじゃない、立場は違う、ということをごまかさずに認めるとき、ずれをずれとしておさえたらうで、おさまりのよい布置を探ることで、だけど一緒に居ることができる、だけど一緒に作業できる私たちという意識が生じるのだと思う。

ネットワークをつくる時、チームがまとまっていこうとすると、同質性を求めるがゆえに、えてして異質な他者をスケープゴートにして凝集性や安全感を高めていくプロセスが展開する。しかし誰かを仲間はずれにすることで仲良し集団が結成されていくときの、行き着く先はやっぱり集団の崩壊でしかないだろう。

容易ではないのだけれど、様々な個性をもった異質な他者が、居心地よく「あずましく」居続けられる、柔軟で寛容な環境の生態系が必要とされているように思う。私もまた、その生態系をなす資源の一部になりたいと思う。

カモたちはにんげんたちの往来を知りつつも、日の暮れるまで、あっけらかんとのんきにたがいのときを営んでいた。

おわりに

おおくの出会いのなかで、今回3回にわたるシンポジウムが開催できた。企画者としては、快く演者を引き受けてくれたすべての方々に心から感謝したい。これまでの、そして、これからも、こうした支えで私は生かされているのだらうと思う。

3回におよぶシンポジウムの記録と校正には、多くの方々の手を借りている。特に教育臨床講座の間宮先生、葛西先生、障害児教育講座の室橋先生には企画、開催から今回の報告書作成において、多大なお力をいただいた。感謝の言葉もない。また両講座の学部生、院生の方々にも感謝したい。いつも開催準備から受け付けなど、いやな顔ひとつせず大車輪のように動いてくれた。一人ひとりのお名前はだせないが、心から感謝している。

間宮先生、葛西先生、室橋先生には加えて書き下ろしの原稿を依頼し、短時間に書き上げていただいている。大学の多くの仕事の合間を縫ってのことであり、厚かましく図々しいと反省している。

しかし、一方で一蓮托生という言葉も頭に浮かんでいた。

連携とは、こうした良質の依存関係がないと成り立ちにくいものであるのだらうと、不肖な思いを抱きつつ、それでも心から感謝して筆を置きたい。

最後に、報告書の良否であるが、良いと評価していただくことがあれば、それは演者一人ひとりの力量と校正にあたった方々の力であり、否の評価は、企画者の私の力不足である。

さらにすでに事前に多くの原稿をいただきながら、遅々として出版にまで至らなかったのは、ひとえに田中の責任である。心からお詫びしたい。

田中 康雄

執筆者紹介・執筆順（執筆分担）

影山 竜子	社会福祉法人みきの家わかくさ保育園主任保育士	2.3
品川 裕香	ノンフィクションライター	2.3
高山 恵子	NPO法人えじそんくらぶ代表	2.3
宮崎 隆志	北海道大学大学院教育学研究科助教授	2.3
田中 康雄	北海道大学大学院教育学研究科教授	2.3.1
葛西 康子	北海道大学大学院教育学研究科助手	2.3.2

編集に携わった人

朝比奈千絵

有本 裕美

上西 知子

葛西 康子

加藤 拓

今野 邦彦

坂東佳代子

藤田 真理

堀井 靖代

発達・学習支援ネットワーク研究 第5号（非売品）

特別支援教育と地域支援プログラムの展開

2005年8月29日 印刷

2005年9月1日 発行

発行者 〒060-0811 札幌市北区北11条西7丁目

北海道大学大学院教育学研究科 鈴木 敏正

印刷所 北海道印刷企画株式会社